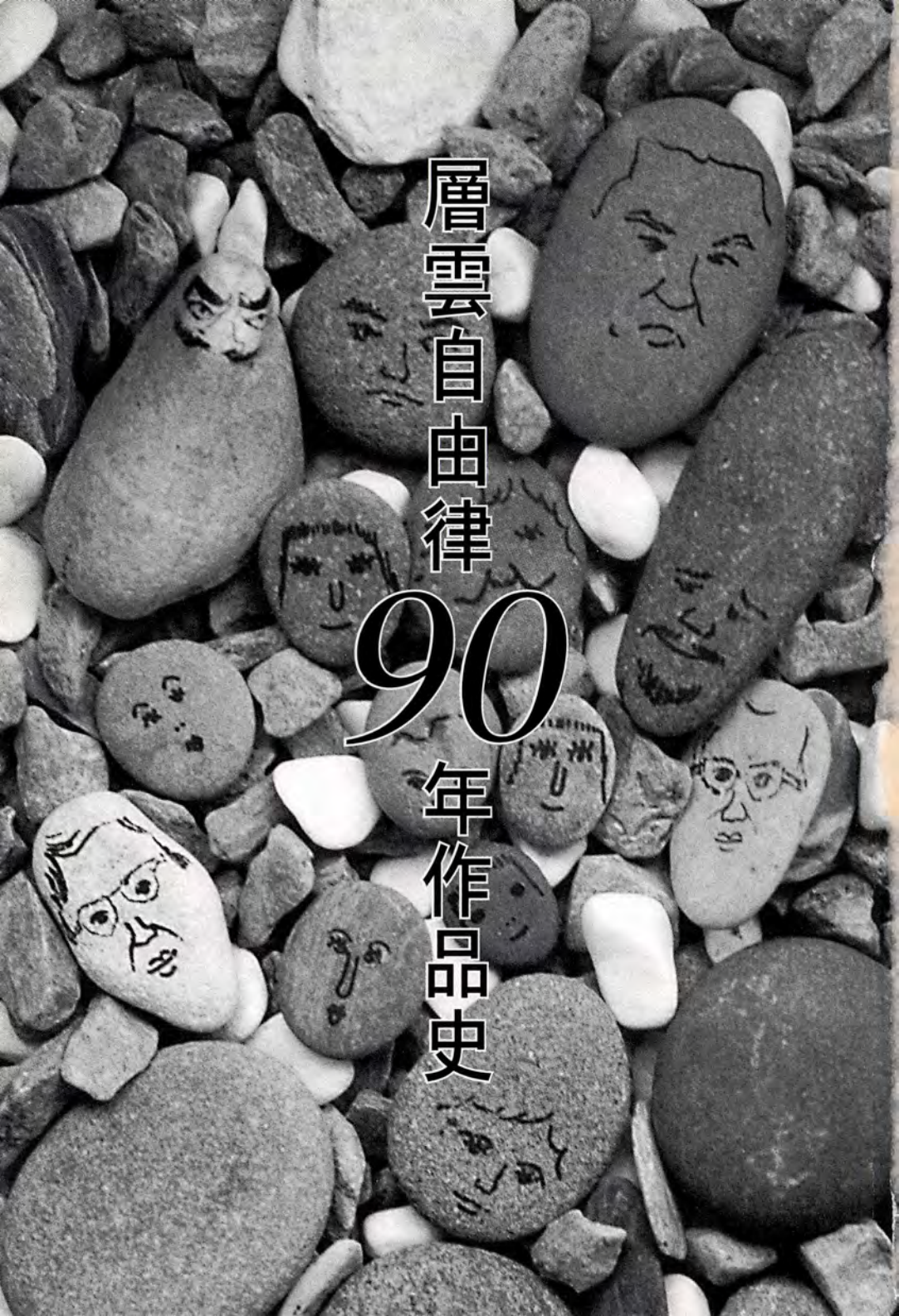
層雲自由律90年作品史


層雲自由律
90年作品史

もくじ

作品および年表……2
あとがき・伊藤完吾……184
層雲句集収録表……186
層雲史を創った人々……191

牧牛の群れ来れば水鳥も輪に　　河東碧梧桐
婢にも買ひ物冬の夜町の賑ひや　　〃
躑躅見に日傘影濃うさしそめて　　中塚一碧楼
酒苦しと君が云ふ月も傾きぬ　　〃
母を扶けて海越しぬ風に扇落つ　　荻原井泉水
言問の秋風や火を散らす川蒸気　　〃
囚徒渡すに裏橋のあり行々子　　〃
愚豚児の何耽読や灯取虫　　〃
家鴨なく昼淋し萩に麦煎れば　　野村朱鱗洞
茶屋萩に曇り見て帰港急ぐ事　　芹田鳳車

○層雲記要

四月、荻原井泉水「層雲」創刊。
海潮音（小牧暮鳥訳）「自由」（ヘルマン・バール）。
碧悟洞「十番句合」。
井泉水「俳壇最近の傾向を論ず」。連載。
「文壇と俳壇」。（文壇の方々には俳壇の進歩に注目して貰ひたく、俳壇の方々には文壇の大勢に注意せられんことを望むものである。）
六月、是影生（阿部次郎）「キルケゴオルドの恋日記」。
七月、井泉水選雑吟欄「雲層々」開始。
井泉水、郊汀と共訳で「チチアンの死」（ホーフマンスタール）を掲載。
九月、井泉水訳「二行詩」（シルレル）掲載。
十二月、久米正雄「沼と魔睡」。

○同人動静

種田山頭火郷土文芸誌に俳句や文章発表。

衣桁揺る、は蛍放ちしよ灯もなみに　秋山秋紅蓼

萩の白さ月踏む帰路に忘れ居し　〃

日蝕知らず萩小屋に土捏るもの　河村花不言

或る日の歌　七月号（11首より）

石川啄木

あの年のゆく春のころ、
眼を病みて懸けし黒眼鏡—
壊しやしにけむ。

＊

枕辺の障子開けさせて、
空を見る癖もつけるかな—
長き病に。

＊

おとなしき家畜のごとき
心となる、
熱やや高き日のたよりなさ。

＊

何か、かう、書いてみたくなりて、
ペンを取りぬ—
花活の花あたらしき朝。

あたらしきインクの匂ひ、
目に沁むもかなしや—
夏の雨の明るさ。

＊

ひと処畳を見つめてありし間の
その思ひを、
妻よ、語れといふや。

＊

ひさしぶりに、
ふと聲を出して笑ひてみぬ—
蠅の両手を揉むが可笑しさに。

＊

何か一つ騒ぎを起してみたかりし、
先刻の我を
いとしと思へる。

野村朱鱗洞層雲に参加。

○その他
表紙絵—中村不折。挿絵に岡本一平、名取春仙、富田渓仙その他。

〈注記〉
「層雲」創刊の前年、明治43年には『白樺』『新思潮』（第二次）の創刊など、新しい文壇の動きがあり、これらの影響を受けたと思われる。

〈この年〉
青木繁没（32歳、洋画家）。
北原白秋「朱欒」創刊。
前田夕暮「詩歌」創刊。
五月中央線全通。
「デカンショ節」流行。
大阪に通天閣完成。

算盤鳴らして戻る子や柿に日も斜	荻原井泉水
君を訪はんと下りし駅蚕籠も売る（西宮）	〃
伏して哭す民草に酷暑きはまりぬ（明治天皇崩御）	〃
国旗みな黒し日盛の風もなし	〃
論議の中につつましく柿をむく君よ（甲府大会、一技に）	〃
いつしかに銀杏も黄に諒闇の空秋ふかし	〃
荒れ磧（かわら）も露寒う濫伐の里	栗林一石路
蒲団干して読めるもの湖の明るさに	〃
門衛に日永し盛葬の過ぐ	〃
露朝日の耕地来て犬猛き戸に	下山逸蒼

○層雲記要

六月、井泉水「短小なる文学」、「簡潔なる詩型」連載開始。（後の『俳句趣味論』）。

阿部次郎「若きゴッホ」。

十月、井泉水「新に句作する人々と共に」連載開始。

○同人動静

二月、小沢武二層雲社入社。

栗林一石路「石楠花」の号で投句。

七月、碧梧桐『第一次第二次旅中句集』刊。

十二月、喜谷六花句集『寒烟』刊。

○その他

井泉水秋田十和田旅行中、季題無用に気付く。

甲府峡中俳句大会後、井泉水を囲み季題無用論大いに湧く。

虚子俳壇復帰。

石川啄木没（27歳）。

貯金戻りに買ふ酔や冬木茶屋の花　〃
八ッ手咲ける蒲団庫鼠入りし事　江良碧松
菊手入も霧の朝児は登校す　〃
孝女偲ばむ砧石笹鳴の里　芹田鳳車
探勝もものうき日寒菊の宿に　野村朱鱗洞
畜生に煮る物か月寒き土間に　〃
音読そそるを淡雪にひそと織る母か　〃
青田水つく背戸を揺るるは春の灯か　〃
脚絆干せし影膳に落つ蝉の茶屋　河村花不言
製糸場ほとり昼顔に陣屋石垣も　〃

「層雲」創刊号

〈この年〉
石川啄木『悲しき玩具』刊。
明治天皇没（61歳）。
大正と改元。
第5回オリンピックに日本初参加。

筆採る我にひそと炭つぐ母かなし　荻原井泉水
我等雲海を登り来ぬ月くだる（登嶽句帖）　〃
ものの音に魅せられし仮睡（かりね）秋夕べ　野村朱鱗洞
倉のひまより見ゆ春の山夕月が　〃
窓に迫る巨船あり河豚鍋の宿　種田山頭火
子と遊ぶうらら木蓮数へては　〃
楽屋障子に樹影さす冬の月更けて　河村花不言
落葉明りせる里に赤き煙突が　〃
鳥居建つと人寄りす冬日蓮田掘る　江良碧松
よべの火事趾あはれ道の辺初午に　〃

○層雲記要

一月、井泉水「昇る日を待つ間」連載開始。（「新傾向の俳句に欠けているのは光と力である」等）。

二月、井泉水「季題」論。（季題揚棄の根底となる論旨）。碧梧桐「日本俳句抄」。

三月、山頭火、井泉水に師事し層雲に投句。初期の号（田螺公）。

六月、井泉水「季題のことども」連載開始。（季題と季節感の違い、地域差や慣習の違いなど）。

九月、井泉水、谷桂子と婚約。

○同人動静

五月、層雲社にて第一回目の砂文学会開かれる。（挿絵の合評会）。会者＝信太郎、春仙、一平、竜子他。

十月、東京俳句会第百回大会芝浦で開かれる。

幹事＝六花、不喚楼、井泉水。

書棚前の灯も白む徹夜水仙に　秋山秋紅蓼
独り旅もよき朝の膳海苔を香に　〃
球場淋し春雪に一人ココワ飲む　芹田鳳車
森の奥冴返る水の揺れてあり　〃
蚕棚組みしを掃く月夜春の山も見て　栗林一石路
運びおえしを蔵鎖せば月や桐の花　〃
汽船かがやかに漂ふ灯夜汐涼しうす（宮島）　久保白船
朝を水打つ貝店通り子を連れて　〃
靴磨かす椅子の人新紙涼しげに　下山逸著
原稿紙に何書ける残暑街瞰下ろして　〃

○その他
八月、井泉水富士登山。

〈この年〉
伊藤左千夫没（50歳・歌人、小説家、雑誌「アララギ」発刊）。
岡倉天心没（52歳・美術指導者、美術評論家、フェノロサと東京美術学校を創立のちの日本美術院を創設）。
徳川慶喜没（77歳・江戸幕府15代将軍）。

力一ぱいに泣く児と啼く鶏との朝　荻原井泉水
猫も食はんとす心猫知る夜半の冬（凶作地より）　安斎桜磈子
萱に雪鳴る米山村は亡びけん　〃
今日も事なし凩に酒量るのみ　種田山頭火
朝餉時寒う娶れなど母の云ひ初めぬ（わが一月）　江良碧松
父の鼾いたましうランプ消して寝ぬ　〃
弟妹幼くて乱す居間かくも宵の冬　小沢武二
旭うれしく掃く畳汽船着く笛か　久保白船
雲雀鳴く鳴く揚がる浪音につつまれて　野村朱鱗洞
空仰げば紺青の海の高まさる　〃

○層雲記要

一月、久米三汀「秘書盗人」。
瀧井孝作「ほんとうの事」。
二月、山頭火「断章」掲載開始。
三月、井泉水「今日も書斎より」。
（句と二行詩）。
桜磈子「凶作地より」39句。
四月号より井泉水選の俳句欄「我等の印象」開始。
七月、井泉水「蛇の言葉」連載開始。
（短章と二行詩の方向性は俳句と共に後の自由律の作品に影響を及ぼすものとなる）。
八月、層雲第一句集『自然の扉』刊。
十月、井泉水「野ざらし紀行の句評釈」開始。
十一月、井泉水「昇る日を待つ間」で、碧梧桐氏の俳論を批判。

○同人動静

一月、碧梧桐『続三千里』上巻。
二月、下山逸蒼句集『逸蒼句集』刊。
七月、久米三汀句集『牧唄』刊。
十一月、川西和露『和露句集』刊。

汽笛尾を引く郷愁の二月初めの夜　兼崎地橙孫
石膏像は春夜こなごなに砕かれたり　〃
蛍一つ高く飛べりそれのみの大空　福岡灰斗
夕のうれしさ足洗ふ時の二言三言に　〃
母に代りて米とぎしより二度の三日月　栗林一石路
母病みていますわが家見ゆ畑よりの蜻蛉　〃
銃を擔ひて追はるる如く街に出でたり（軍隊生活）　芹田鳳車
いつしか蟻の影見えず白き雨落ちぬ　〃
明かき壁紙の香に我影を懐かしむ　下山逸蒼
米刺にぎりまぶしき蒼き陽をかざすかな　河村花不言

○その他
九月、井泉水「国民文学」に「奥の細道より」発表。
十月下旬より十一月の中国、四国旅行で井泉水は山頭火、朱鱗洞と初めて会う。
九月、井泉水、谷桂子と結婚。

〈この年〉
阿部次郎『三太郎の日記』刊。
夏目漱石「こころ」発表。
七月、第一次世界大戦勃発。
横山大観ら日本美術院再興、十月第一回院展を開く。
二科会、文展より独立。
山田耕筰、帝劇で管弦楽曲発表。
「カチューシャの唄」流行。

沈み行く夜の底へ底へ時雨落つ　種田山頭火
闇の奥には火が燃えて凸凹の道を来ぬ　〃
一日物いはず海にむかへば潮満ちて来ぬ　〃
物思ふそばに子はおとなしく砂掘れり　〃
夕汐の明るさ呼びあいて泳ぐなり　荻原井泉水
心澄ませば林の奥の雫なり　芹田鳳車
草に寝れば空流る雲の音聞こゆ　〃
冬の日燃ゆる原の逞しき犬ら　小沢武二
夕陽横ざまに流るる空のとんぼとんぼ　〃
わなに死ぬ鳥赤き実は食まずして残る　山岡夢人

○層雲記要

三月、瀧井孝作「二十一の旅」。

四月、井泉水「真実を求むる心」「俳論短章連載始まる。四月改刊号より「層雲」を井泉水独自の運営にすることを宣言。

層雲社句間新聞「現代通報」刊。内容は広く政治、文化論を扱う。第一号はドイツの軍国主義の批判。

十月、井泉水「笈の小文の句評釈」

十二月、「俳句講座」を「現代通報」の付録としてはじめる。

○同人動静

一月、碧梧桐『新傾向句集』。

三月、碧梧桐、一碧楼らと共に「海紅」創刊。碧梧桐一門層雲を去る。

十二月、放哉層雲に出句。

○その他

井泉水、高輪の家に移る。

高輪より麻布新堀町の家に戻る。

神保町に芸術書房を開く。

雨雨雨肺療院の梅の実の青さに　〃
濁流の轟き傘借りて葉書買ひに出し　江良碧松
蜂がぽっちり交み落ちて粘き日の溜り　清水一翁
鍬をかついでこの身軽さを風の中へ　福岡灰斗
落日の光りに黙々と石を動かせる男　高野月紅子
人は汽車を待ち馬車は客を待ちてのみ静か　深田紫洋
柿の花降る芋畑ののらくら猫よ　内島北朗
虫一つ高鳴けり鳴きつづく虫ら　秋山秋紅蓼
月の光にさぐり飲む火酒の味ひ　下山逸蒼
霧に悲しく心とけ二人添ひ行けり　〃

〈この年〉
ドイツ軍毒ガス使用。
第一回全国中学野球大会（大阪）。
井上馨没（81歳・明治期の政治家）。
大阪朝日新聞夕刊発行。
大正天皇即位式。
「恋はやさし野辺の花よ」流行。

たんぽぽたんぽぽ砂浜に春が目を開く　荻原井泉水
みどりゆらゆらゆらめきて動く暁　〃
もののこゑほのぼのと海はたたへけり　種田山頭火
燕とびかふ空しみじみと家出かな　〃
風どうどう米量り居るひとりなれ　江良碧松
朝日うちさばきうちさばき稲刈る　〃
大きな雲が裂けまじと風に鳴るかな　久保白船
小鳥ら喜びて接吻くる大地雪解かな　栗林一石路
夕日ざらざらと人送る群の一人なる　〃
桜おほらかにゆれいでて風となる夕べ　秋山秋紅蓼

○層雲記要
四月より付録として「講壇より」「俳句講座」連載。
山頭火、層雲十名の選者に加わる。
選者互評の回覧紙「求心結集」三回掲載。
（選者＝井泉水32、鳳車30、白船32、秋紅蓼30、碧松28、紫洋23、山頭火33、灰斗22、武二22、朱鱗洞22）数字は年齢。
五月、「緑の国」第一号「現代通報」の付録として載る。
七月、井泉水「長岡温泉にて」。
八月、阡陌余史郎「蛙」。

○同人動静
四月、山頭火、実家倒産。熊本へ。
七月、草上句集第一編『日像』刊。
九月、芹田鳳車句集『雲の音』刊。

○その他
井泉水、再び高輪の家に。麻布の層雲社へ通う。大井北浜川に移住。
「私が読んだ物の中から」（北原

あさひあさひ今しこの雪にもえあがる　河本緑石
夕日にすこし障子をあけて縫う母よ　木村緑平
れうらんのはなのはるひをふらせる　野村朱鱗洞
茂り重たう水の輪が輪が夕焼くる　〃
桑やればかいこいとほし首をふる　福岡灰斗
我が汗ほろほろと石に落ちて干る　佐々木石々
口笛ふいて沈みたる海女に海青し　内島北朗
霧のふかきに馬は馬どち顔よせぬ　〃
女そとぬけいでし朝蚊帳の青けれ　深田紫洋
いと長き文書けば若葉きらめけり　阡陌余史郎

白秋、和辻哲郎、野口米次郎、窪田空穂の文紹介）。

〈この年〉
日本は大戦景気に沸く。
「金紗のお召」など服装が華美になる。
「婦人公論」創刊。
上田敏没（43歳・翻訳家、詩人、評論家）。
夏目漱石没（50歳・小説家）。
大日本医師会発足。
「ゴンドラの歌」「八木節」流行。

黒き手が黒き手が木の実つかみたり　種田山頭火
水の深さを身に張りたわむ棹細し　荻原井泉水
牛が汗して鋤く田の土の黄な冬日　江良碧松
田を打つ人ら火を焚いて風にくるまれり　〃
ただに静か太陽西におはしけれ　青木此君楼
力のかぎり鐘をつく嵐ただ中　〃
鎖鳴らしつつおのが影掘るは囚人　栗林一石路
どっと笑いしがわれには病める母ありけり　〃
息もつかず飲む水の身ぬちおちてゆく　芹田鳳車
心ゆれゆれ酒さかづきにしづまらず　〃

○層雲記要

一月、「生活の断片」。

（山頭火、灰斗、朱鱗洞、鳳車、武二、紫洋、白船、碧松、秋紅蓼等の小文を収集したもの）

層雲社新年句会に一石路、緑石ら参加。

二月、井泉水「真実を求むる心」で配合法の短律作品を批判。

七月、井泉水「顧みて」、栗林貞一「夜来た男」。

八月、井泉水「更に第一歩より」。

十二月、層雲第二句集『生命の木』刊。

○同人動静

二月、下山逸蒼『下山英太郎句集』刊。

層雲誌友名簿消息集『金蘭録』刊。

○その他

井泉水信州上林温泉へ。湯田中に

人の死を送りし足袋いたくよごれたり　内島北朗
積み桶高く軽業の児に海が見えるぞな　〃
寝てゐる児らにまた着する夜の浪音　久保白船
殺さるる鶏が追はれつつ産みしその卵　佐々木石々
風の中を挽く車いたく軌るなり　鈴木子因
闇をひらきつ風の中燃ゆる灯は一つ　小沢武二
銭を貯ふ子が銭箱の赤き紐　高野月紅子
蛍にがせば闇ふかぶかと舞へるなり　木村緑平
雲むらさきにふるさとの方へ流れゆく　渡辺砂吐流
あられあられ石蕗の葉といはず花といはず　小玉暁村

て一茶遺墨を尋ね長野にて一石路と初対面。
井泉水　大井町へ移る。九月三十日台風による洪水被害に遭遇し、南品川荏原神社裏へ移転。
十月、『俳句提唱』刊。（初期の自由律俳論として重要）。

〈この年〉
萩原朔太郎『月に吠える』刊。二月「層雲」にも広告載る。
夏目漱石『漱石俳句集』刊。
東京芝浦で第3回極東オリンピック開催。
活動写真取締規則公布、フィルム検閲。男女席区別等を規定。
大暴風雨、東京に津波、大量の死者行方不明者。
佐々紅華ら東京歌劇座結成、浅草オペラ時代始まる。
画家ドガ、彫刻家ロダン没。

いちはやく枯るる草なれば実をむすぶ	野村朱鱗洞
かがやきのきわみしら波うちかへし	〃
はるの日の礼讃に或るは鉦打ち鈴を振り	〃
牛のまなこにあつめたる力燃ゆるなり	〃
はたと打たれて泣かぬ子のその顔	小沢武二
風風小学校のどよめきをもたらし	〃
人を殺せし馬の顔静かなり厩	栗林一石路
雨風たける地に伏して低き家々	〃
もの食へる子の口を見ておとなしきけもの	小玉暁村
またあふまじき弟にわかれ泥濘ありく	種田山頭火

○層雲記要

一月、井泉水「光に聳えよ」。
栗林貞一「愛の残虐」。
二月、井泉水「定型的表現か自由表現か」。
四月、層雲の付録「俳句講座を分離して」「民衆芸術」刊。
句集『生命の木』の感想を荻原朔太郎、福田正夫、日夏耿之介、青木健作ら寄稿。
六月、井泉水「二行詩」。
福田正夫「二行詩十五章」。
会友の二行詩創作も載る。
七月、井泉水「二行詩について」連載始まる。

○同人動静

一月、回覧誌「せせらぎ」刊。
七月、山頭火の弟二郎自殺。
九月、山頭火「汗」を最後に大正九年一月まで休句（この中に上掲の〈またあふまじき弟…〉の句がある）。
十月、野村朱鱗洞没（26歳）。
十二月、朱鱗洞「香烟抄」16句他、追悼文。

夕餉の膳に子が懐の草こぼれ　木村緑平

静けささむくピアノのキィの白き列　山岡夢人

豚が逃げ出せし青い畑のひるすぎ　藻谷草土子

みんなの手にのせられてむかしの銭なれ　清水一翁

糸車わくわくと母にめぐりけり　河本緑石

よろしきことの限りなう酒に酔ひゐし　青木此君楼

馬鈴薯ふとり光りつつ土をまろび出し　江良碧松

死にに戻りし工女の里の森よ田よ　河村花不言

流るる雲に太鼓うつ旅の飴売　小林銀汀

荷を解かるるにさへよろめける馬の疲れよ　内藤寸栗子

○その他

井泉水「俳界」新年号に「句作の道」発表。

十一月、井泉水大磯南下町に居住。

句作問答（入門叢書第一）刊。

俳句階俤（入門叢書第二）刊。

五月から十月にかけ井泉水信越北陸巡遊の旅しきり。

〈この年〉

室生犀星『愛の詩集』刊。

北海道帝大創立。

福田正夫ら「民衆」創刊。

日本創作版画協会創立。

島村抱月没（48歳・評論家、劇作家、演出家、自然主義文学運動の理論的指導者）。

武者小路実篤ら宮崎県で「新しき村」建設に着手。（9月）

第一次大戦終了。（11月）

「かなりや」「証城寺の狸ばやし」「ノンキ節」などが流行。

翌年にかけてインフルエンザ大流行（15万人余死亡）。

月光しみじみとこうろぎ雌を抱くなり　荻原井泉水
嵐猛るにあたたかう腹をつくり　青木此君楼
着ものからげて大地つんざく雨見る子　阡陌余史郎
さくらこぼれて地上を走る風となり　〃
まず耳に入る古里の流なり　芹田鳳車
竹とんぼ幼き日のやうに飛ばぬかな　佐々木石々
山は黎明の紺青のうしほに浸り　久保白船
山の夕日によろめきつきし汽車かな　木村緑平
山々枯れてゆく底の我らの学校　金井三良
病む子のために笛吹けば響くまよなか　酒井仙酔楼

○層雲記要
一月、井泉水「高原の秋」
六月、井泉水「ホイットマンと芭蕉」
七月、第百号記念号
九月、井泉水編『街並木』（層雲第百号記念出版挿絵画集）
十二月、山村暮鳥「苦悩者の言葉」「民衆芸術」三月号を朱鱗洞追悼号とする。

○同人動静
四月、河本緑石、盛岡高等農林学校卒、郷里へかえる。
尾崎放哉「清明抄」三句、以後大正11・1まで句作中断。
五月、野村朱鱗洞句集『礼讃』刊。
十月、小沢武二編『象画帖』（第百号記念同人写真集）。
十一月、井泉水横浜市根岸町に転居。山頭火上京、東京市セメント試験場に入る。

手拭を腰に兵隊となる村の青年　栗林一石路
歓ぶことの言葉つまりし子のひとみ　〃
学びに行く子に鳥の声ふりかかる　河村花不言
ビイドロのうす明りして祖母のかんざし　〃
獣の如く戯れながら労働にゆく　内島北朗
塔は端麗まひるの雀鳴きかかる　〃
児に噛んでやる餅よく噛むほどに甘し　小沢武二
稲は穂に穂に祭の頃は月が照る　〃
死んだ父がのこしたただ一つの歌なり　鈴村日梢
夜を学ぶわれらの休み時間の星空　〃
　江良碧松
　〃
　秋山秋紅蓼
　渡辺砂吐流

○その他
井泉水著作。『芭蕉選集』。
『俳句小史』（俳句入門叢書第三）。
実篤の「新しき村」に共鳴し「層雲道場」の構想を持たれた。

〈この年〉
松井須磨子自殺（34歳・日本最初の新劇女優）。
西条八十『砂金』刊。
民族詩運動が隆盛。
「改造」創刊。
史跡名勝天然記念物保存法公布。
「解放」創刊。
板垣退助没（83歳・政治家）。
帝国美術院設立。
「人間」創刊。
島崎藤村「新生」発表。
野口英世「黄熱病病原体」発見。
東京市内乗合自動車営業開始。
ルノアール没。

佛を信ず麦の穂の青きしんじつ	荻原井泉水
空をあゆむ朗朗と月ひとり	〃
陰（ほと）もあらわに病む母見るも別れか	〃
死人に着せし米俵の米がこぼれたり	七戸黙徒
木の股から産れたと言はれ淋しい子	〃
貧しき父を馬にして勇めるぞ吾子は	〃
蝶ひとつ飛べども飛べども石原なり	種田山頭火
ゆたゆたと牛が首ふり京へ曳くもの	〃
朝日まづ歩哨の顔	内島北朗
温泉を出でし肉体に鏡の椿（蓮台寺温泉）	小松崎翔陽

○層雲記要

一月、山頭火「紅塵」14句（上京中の作品）以後大正15年11月まで休句。

井泉水「俗人語」連載はじまる。

層雲第三句集『光明三昧』刊。

五月、層雲第十巻より、新聞紙法で刊。

七月、井泉水「青き灯の下にて」。（ホイットマン他の文芸時評）。

井泉水上掲の名句〈仏を信ず…〉は五月小豆島での作、〈空をあゆむ…〉は七月横浜根岸にての作。

（注）先の「層雲道場」の構想がなかなか実現せず孤軍奮闘の状況。

○同人動静

一月、岡栄一による「鳩心」第一号。

十月、中村未外編第一句集『群鳥』刊。

十二月、芹田鳳車第二句集『生ある限り』刊。

小松崎翔陽の上掲の句〈朝日まづ…〉は層雲短律句のはしり。

井泉水、関西・中国・四国旅行、小

御僧いささか酔ひたまひ世間の話　阡陌　余史郎
一生懸命でむだな仕事して居たぞ　青木　此君楼
雀争へばあまたの雀来て宥め　内藤　寸栗子
死にさきだちしとしよりをおがむとしより　〃
生きがたき身のねむるとすれば汗かけり　岸田　鳳車
とんぼ釣る子に草原みんな与へらる　秋山　秋紅蓼
悩みなき世をくさむらの秋に見出づる　小沢　武二
濡れて餌あさる朝の雀よ我身の事　木村　緑平
踊れ踊れ夕焼雲は燃えきったり　大越　吾亦紅
貧しき家のしみじみとあつい茶を呑む　金井　三良

豆島淵崎滞在、（注）井上一二方に二十日滞在（桂子さんも）四～五月。
井泉水のご母堂九月に倒れたため、横浜を引き払い東京芝区今入町へ。
（注）「層雲道場」構想をあきらめる。

○その他

井泉水著作『新しき俳句をみよ』『句作捷径』（俳句入門叢書第四）『俳句選評』（俳句入門叢書第五）『井泉水句集第一巻』刊。

〈この年〉

菊池寛「真珠夫人」の新聞連載始まる。（通俗大衆小説のはじまり）。
大学令により、慶応・早稲田設立認可。私立大学設立あいつぐ。
市川房枝、平塚らいてう、新婦人協会結成。
東京で最初のメーデー。これを機に労働組合同盟会結成。
新聞の文体、口語体に改められる。
北海道夕張炭鉱爆発（死者多数）。
アメリカでラジオ放送開始。

かんがり暮るる元日の明星（あかぼし）かかり	荻原井泉水
小き仏に編笠草履小さくてあわれ（産児死す）	〃
はたらきし金飲んでしまひ馬と帰る	内島北朗
土のうつはにて地のうるはしきくだものを盛れ	〃
空の真下に道をゆきつめ一人なり	芹田鳳車
まだ冷えぬ児に赤き産着の袖通さすと	荻原桂子
亡き母思はぬ日とてなく縄を綯ふなり	佐々木石々
元日すでに心とがる親子とてさむき	栗林一石路
アメリカへ来て足なへとなりベッドの蝿打つ	下山逸蒼
牛のまなこのうるみなやましく春となる	井上一二

○層雲記要

一月、井泉水「芭蕉の生活と芸術」連載、小牧暮潮「印象芸術と表現芸術」。

二月、山村暮鳥『生ある限り』について。

四月、層雲十周年記念号。

ホフマンスタール作戯曲「チチアンの死」。井泉水、青山郊汀訳。

石川啄木の書簡。

久米正雄の文章。

層雲創刊十周年記念俳句大会。

十月、阡陌余史郎「一燈園へ」。

○同人動静

二月、栗林一石路結婚。

四月、小沢武二句集『不滅の愛』刊。

荻原桂子死産。

五月、「鳩心」改め「求心」と改題。

六月、小沢武二編集発行で「地に咲く花」創刊。

八月、誌友筆跡俳句画帖『艸風帖』刊。（十周年記念）

十一月、下山逸蒼句集『砂漠の旅より』。

親にそむかう心麦踏みてやはらげり　大越吾亦紅
獄に父が落ちゆける昔の雪が降る　〃
明星消ゆその時巨人歩みきたる　青木此君楼
はらから父を争へば二人抱きて歩むぞや　七戸黙徒
我が怒りにたへて妻はひたと子を抱き　〃
雪の果てより匍匐うて来る汽車を待つなり　内藤寸栗子
雪降れば餓えたる鴉いさかふか　山岡夢人
思ひせまれば愈々月静かなり　木村緑平
千羽の雀おへば又来る千羽の秋　岡栄一
画をさげてゆく太陽がくるめいてゐる画を　小沢武二

○その他
井泉水著作
『井泉水俳話』、『芭蕉の言葉』、『山水巡礼』、『新しき俳句の作り方』、『新に俳句を創る人に』。
井泉水、麻布区宮村町三十七の新宅に転居。

〈この年〉
深田紫洋没（30歳）
小牧近江、金子洋文ら『種蒔く人』創刊。
日本南画院創立。
佐藤春夫『殉情詩集』刊。
ヒトラー、ナチス党首に就任。
「思想」創刊。
原首相、東京駅改札口で暗殺される（65歳）。
カルーソ、サンサーンス没。
「船頭小唄、流浪の旅」流行。

男と女あなさむざむと抱(いだ)きあうものか	荻原井泉水
空はさびしよ家あらば烟をあげよ	〃
日曜の陽を浴びてこの木造りの古椅子よ	村野四郎
かうべをあぐるあなうるはしの夕空はあり	青木此君楼
焚火くわっと炎え聖書の細字	下山逸蒼
まっ黒き欝屈の石炭が噴くほのほ	〃
酒ぞんぶんにのみ泣いてゐる百姓	河本緑石
町の山澄み空澄み鮭産みに来る	大越吾亦紅
怒りて暫く太陽を見失ひたり	〃
夕鳥に鳴かるる女の足とて何がな急がるる	荻原桂子

○層雲記要

一月、井泉水「心の内の世界」。層雲社評議員十一名選出。（井泉水、武二、栄一、静雄、蒼天、紅珠玉、巴水楼、翔陽、秋紅蓼、草土子、日梢）

四月、層雲社組織変更俳句大会。

六月、井泉水「白秋君の民謡を読む」。（論争の発端）。

七月、層雲第四句集『風景心経』刊。井泉水の詩作「私の窓」。

八月、朔太郎の『新しき欲情』紹介、評掲載。

十一月、岡栄一「私の『雀』句に就いて北原白秋氏へお答」。

○同人動静

四月、放哉保険会社設立のため朝鮮へ赴任。

大橋裸木層雲入門、村野四郎と共に活躍始まる。

十二月、山頭火一ツ橋図書館退職。

○その他

井泉水、アルス紙上で北原白秋との論争始まる。

としより独り居て薯喰へばのんどにつまる　内藤寸栗子
百姓の子たくましく地より冬となる　七戸黙徒
寒き子供の手と云はず足と云はず　秋山秋紅蓼
土にいそしみおろかもの迷ふことなし　芹田鳳車
牛のまなこのうるみなやましく春となる　井上一二
この子あまりにかしこく石の如し　佐々木露路
唾する地にぬかづいて生くる人ありし　善方牛臥城
息せききって来て死人にもの云う　大橋裸木
はじめて創るものの形を星空の一角に見る　小沢武二
泥手を挙げて太陽に明日を約す　内島北朗

井泉水著作。
『奥の細道新釈』、校訂『芭蕉俳句全録』、『新俳句提唱』、校訂『一茶遺稿父の終焉日記』、『ゲエテの言葉』、『俳壇十年』、『新俳句評釈』、『芭蕉句選略解　春夏の部』、『芭蕉句選略解秋冬の部』。

〈この年〉
「前衛」創刊。
梅原龍三郎ら「春陽会」創立。
大隈重信没（85歳・政治家、東京専門学校創立者）。
山県有朋没（83歳・軍人、政治家）。
「旬刊朝日」創刊、のち「週刊朝日」と改称。
「サンデー毎日」創刊。
平和記念東京大博覧会。
未成年者飲酒禁止法公布
森鴎外没（61歳・小説家、翻訳家、軍医）。
アインシュタイン来日。
婦人の断髪、ダンスホール、「籠の鳥」流行。

湯呑久しくこわさずに持ち四十となる　荻原井泉水
劫火更けつつ欠けし月を吐けり（震災）　〃
ただに水のうまさを云う最期なるか（妻桂子死す）　〃
病めばかそけき琴のそら鳴り　荻原桂子
小鳥ら唄わせ貧しき国の我は女王　〃
青空よ少女の誇ありし日はるけく　〃
冬夜親しく読む本を父に覗かれる　大橋裸木
松の実ほつほつたべる児の無い夫婦　尾崎放哉
蛇を食べよう山人等ここに火をつくる　河本緑石
種馬あらびおどりたち寂光土　七戸黙徒

○層雲記要
一月、放哉の句復活（三年八ヶ月ぶり）。
青山郊汀「独逸詩壇の現状」。
村野四郎、河本緑石の詩作発表続く。
二月、裸木方黎明吟社発足。
（碌人、四郎、一石路ら知性集団の会）。
層雲社評議委員改選。
四月、井泉水「旅人芭蕉」（「芭蕉の生活と芸術」の改題）、山村暮鳥詩篇「聖母子図」。村野四郎「詩七篇」。
十月、第百五十号記念号として発行予定のところ関東大震災のためやめる。「民衆芸術」第九十九号にて終刊。
十一月、井泉水「劫火」「大震雑記」層雲に発表。

○同人動静
三月、一石路上京。
九月、山頭火罹災、熊本へ帰る。
十月、荻原桂子夫人没。
十一月、放哉会社を馘首、後満州放浪し発病後帰国。一燈園入園。

それから先は先生も知らない野に寝て話す	佐々木露路
けぶりがふかるる方へこの街を去るもの	山口旅人
木の葉口にあてて若者恋しい心を鳴らす	村野四郎
鉄を打つしたたか太陽を打つ	内島北朗
大きな太陽がころげる子供等の合唱	木戸夢郎
芽ぶかう丘の風景の窓がある	小沢武二
震ひやまぬ地にゆまりして笑はれず（震災）	〃
いのちあればぞ焼け土を掘る（震災）	山本蒼天
暮れてきてほっかり潰れた太陽にぶつかる	栗林一石路
狂人ふとしづかに何ぞ思へる顔	芹田鳳車

十二月、桂子夫人追悼俳句大会。

○その他

層雲社相談役一同の発起で誌友罹災慰問義捐金を募る。

井泉水、宮村町より新堀町へ戻る。

井泉水著作。

『野晒紀行評釈』、詩集『野に出でて』、『チックタック日記』、『緑蔭に語る』、『旅人芭蕉』、『昇る日を待つ間』。

〈この年〉

関東大震災（死者・行方不明13万人焼失家屋40万戸余り）。

「文芸春秋」創立。

萩原朔太郎『青猫』刊。一月、層雲に紹介。

ソビエト社会主義共和国連邦成立。

有島武郎（46歳・小説家）波多野秋子と自殺。（井泉水「路草日記」で論評）。

横山大観「生々流転」院展に出展。

レントゲン没。

枯れすすきを主題歌とした映画「船頭小唄」ヒット。

佛の杖を何として棺に忘れし事（母死す）　荻原井泉水
ひぐらし日の暮ほいほい籠（かご）駕来る（高野山）　〃
石のしたしさよしぐれけり（天得院）　〃
風は何をしてゐる路傍の石　木戸夢郎
いまは枯るるばかりにたくましき唐黍の風　栗林一石路
淋しい夢からさめて細いからだをいたはる　和田光利
こぜにが夜長のめしひの帽子にたまった　下山逸蒼
人焼く火にて大松の腹があぶられる　河本緑石
戸にさわる吹雪のたより待つ身や　柳田流矢
星拾う子が松の木山に来て遊ぶ　木村緑平

○層雲記要

三月、桂子夫人層雲追悼号。
四月、層雲百五十号記念句集『群像』刊。
五月、井泉水層雲に「哀傷詩篇」（桂子追悼）。
六月、山村暮鳥「貧賤小詩」。
十月、『俳壇春秋』創刊。
十二月、井泉水「高野句抄」、尾崎放哉「眼耳鼻舌」。この頃から放哉の句作旺盛。

○同人動静

二月、荻原桂子句集『寂光帖』刊。
四月、山岡夢人句集『真実心経』刊。
六月、放哉須磨寺に入り句作。
九月、下山逸蒼句集『霧の罅』刊。
十月、桂子一周忌句会。
十一月、関西誌友大会。『銀箭』創刊。岡栄一、巣山鳴雨編集。
十二月、山頭火熊本の報恩寺入山。

○その他

一月、井泉水母堂没。
五月、井泉水身延山へ母の納骨のあと、京都東福寺塔頭天得院に入る。

一日物云はず蝶の影さす	尾崎放哉
拓榴が口あけたたはけた恋だ	〃
わかれを云ひて幌おろす白いゆびさき	〃
花莫蓙に座ってゐて痩せたぢゃないか	大橋裸木
雪の日の二人にてたのしきは楽譜	鈴村日梢
落葉からから笑ひこける塀の落書	大越吾亦紅
ことんと寝がへりして美しい夢を失うた	小沢武二
囲炉裡火の猛きに里言葉あらげしたしみ	村野四郎
飛んだり跳ねたりばった巣がない	善方牛臥城
夜風ぺろぺろ舌出して障子の穴め	秋山秋紅蓼

井泉水著作。『古人を説く』、『流転しつつ』、『芭蕉選集』、『俳句の新しき味ひ方』、『芭蕉連句選釈』、『初懐紙評註』、『井泉俳話第二巻』、『大地に嘆く』、『俳句に入る道』。

〈この年〉

宮沢賢治『春と修羅』刊。「マヴォ」「ダムダム」「亜」などの前衛詩誌相次いで創刊。

「アトリエ」創刊。

黒田清輝没（59歳・洋画家、白馬会を創立「日本近代絵画の父」と呼ばれた）。

松方正義没（90歳・政治家）。

山村暮鳥没（40歳・詩人、層雲に掲載あり）。

「文芸時代」創刊。

富岡鉄斎没（89歳・画家）。

レーニン、カフカ、ブッチーニ没。

「月は無情、ストトン節」流行。

酔いのさめかけの星が出てゐる	尾崎放哉
漬物桶に塩ふれと母は産んだか	〃
底がぬけた杓で水を呑もうとした	〃
京の春はわが寺のさくら一本	
翌からは禁酒の酒がこぼれる（放哉送別）	荻原井泉水
木の葉木の葉とおちる	〃
一日のポケットから何もかもつかみだした	栗林一石路
山山さむし訴へやうもなき移民	下山逸蒼
耳が木の耳かと罵られてゐる	柳田流矢
小鳥をつれて太陽の近くに移る	木村緑平

○層雲記要

一月、井泉水「伊賀の話」。
二月、層雲第五句集『泉を掘る』刊。
三月、層雲評議委員改選。
四月、経営井泉水に委任。
九月、井泉水「伊達の大木戸まで」。
十月、層雲社世話人会発足。
東京第一支部（幹事横山林二）。若手集団の会発足。
十二月、井泉水「最上川を下る」。

○同人動静

三月、別府で九州誌友大会開催。山頭火出家得度。味取観音堂堂守。
四月、河本緑石詩集『夢の破片』刊。（村野四郎の評）。
六月、大橋裸木句集『人間を彫る』刊。
七月、下山英太郎句集『霧笛』刊。
八月、放哉、井泉水に見送られ小豆島へ渡る（南郷庵）。

○その他

三月、井泉水別府滞在中、白船より

冬の夕焼けさびしい指が生えた	河本緑石
吸取紙のぼろぼろの私の生活	秋山秋紅蓼
隣りで米つく音の故里の厠にゐる	佐々木露路
雪が降りこむ焚火をふとらせてゐる	大橋裸木
花に登った蟻で行くところがない	〃
梅が咲いた蓑虫は知らない	小沢武二
月にふと会ふ又考へぶかかった	鈴村日梢
ししこいこいししこいこい虫の声	浜口弥十郎
おれがほほけたんぽぽになりさう	和田光利
こんなちいさなきもの着る児が生れる	伊藤雪男

山頭火の消息を知る。
七月、井泉水橋畔亭に移る。
九月、「放哉の為の会」（後援会）発足。
井泉水著作。校註一茶文庫『一茶発句集』、『おらが春』、『芭蕉と一茶』、『井泉水句集』、『さびしきままに』、『続旅人芭蕉』。

〈この年〉
「キング」（講談社）創刊。70余万部売れる（小豆島の放哉も送って貰い唯一の情報源にしていた）。
東京放送局、ラジオ試験放送開始。
孫文没（60歳・中国の政治家）。
新橋演舞場開場。
東京環状線電車（今の山手線）全通。
東京六大学野球連盟成立。
人気女優第一位・岡田嘉子、男優第一位・坂東妻三郎（キネマ旬報）。

咳をしても一人	尾崎放哉
入れものが無い両手で受ける	〃
墓のうらに廻る	〃
春の山のうしろから烟が出だした	荻原井泉水
わらやふるゆきつもる	〃
水がみんな動いてゐる落日	秋山秋紅蓼
短日の水のゆく川幅	大橋裸木
全き冬の木の一かたまり	柳田流矢
泥手火をつくる	内島北朗
目鼻耳とちゃんと覚えた	浜口弥十郎

○層雲記要

一月、尾崎放哉「入庵雑記」の連載開始。
六月、井泉水「放哉を葬る」、「放哉追悼俳談」、「放哉書簡集」。
七月、放哉追悼諸家の文掲載。
十一月、一石路「主観の客観性と表現手段における制約」。（次頁掲載の山頭火句は六年ぶりの復活）。

○同人動静

四月七日、尾崎放哉小豆島にて没（42歳）。放哉の死と前後して山頭火放浪の旅開始。
五月、大橋裸木『現代俳句辞典』刊。
六月、放哉追悼号として『俳壇春秋』刊。
尾崎放哉俳句集『大空』刊。
七月、松垣昧々句集『石は黙す』刊。
湯本五郎治編『一茶遺稿―九番日記其他』（井泉水校訂）。
十月、小沢武二句集『悩みの花を開く』刊。

魂に眼があるきょとんとしてゐる	河本緑石
汗臭い心臓の音をきいてゐる	木村緑平
壁にしょんぼりさがる着物を着る	河村花不言
でむしうまれている	荻原井泉水
絵の消えた絵馬がかかってゐた	小沢武二
シャツ雑草にぶっかけておく	栗林一石路
場末で夕日となってころがっていた	〃
分け入っても分け入っても青い山	種田山頭火
鴉啼いて私も一人（放哉居士に和す）	〃
生死の中の雪ふりしきる	〃

○その他
一月、井泉水、若山牧水と沼津で会う。
四月、井泉水放哉葬送のため小豆島へ。
井泉水著作。
『新俳句研究』、『七番日記抄』、『道』、『新しき俳句の作り方』、『一茶遺稿』、『井泉俳話第三巻『道あり言葉あり』。

〈この年〉
小説家協会と劇作家協会が合同、文芸家協会を創立。
山田耕筰らの日本交響楽協会、日本最初の交響楽定期演奏会を開く。
島木赤彦没（51歳・歌人、「アララギ」を主宰）。
北海道十勝岳噴火（死者146人）。
東京府美術館落成。
健康保険法施行。
社団法人「日本放送協会」設立。
大正天皇没（48歳）。
昭和改元。
藤原義江、出船の港・鉾をおさめて等を掲げて世界演奏旅行。
モネ、リルケ没。

咲きいずるや桜さくらと咲きつらなり　荻原井泉水
棹さして月のただ中　〃
鼻凍らせて来てぼろい話がある　大橋裸木
地べたの落葉はがして年がおしつまってゐた　〃
心臓が草笛をふかなくなってゐる　河本緑石
たった一本の動脈を売ります　〃
屋根屋根の夕焼くるあすも仕事がない　栗林一石路
家うらのどぶが泡ふく生活　近藤益雄
渡って来たきりの大平洋がある　下山逸蒼
風の中唄売ってゐる　和田光利

○層雲記要

三月、通信欄で「東京第一支部」（青年グループ）の活性化宣言。
四月、井泉水「あしのうら」「烟」。
五月、「印象」（文章欄）新設。「UNDER LINE」（転載の文章欄）。
八月、頴原退藏「丈草と史邦」。
井泉水「加賀の秋」。
十月、井泉水「鹿島まで」。
頴原退藏「俳諧の季についての史的考察」。
六月、層雲第六句集『劫火の後』刊。
十一月、層雲二百号記念として層雲社俳談会を銀座にて開く。
十二月、層雲二百号に達す。

○同人動静

六月、岡栄一句集『霊光』刊。

○その他

井泉水、JOBKにて「奥の細道講話」を五日間放送。

となりのむしろおる音で死んでゆかれた　木村緑平

けだるい午後の籠の鳥が争ってゐる　内藤寸栗子

冬めく人人の中にわれもゐて停車場　秋山秋紅蓼

籠に生れて籠に死ぬ恋をしてゐる　海藤抱壷

かたいあたまに手を添へて聞く　佐々木石々

風がくもった棒ぐいを打ちこんでしまふ　内田創平

脚がながい秋をねそべる　大越吾亦紅

ひでりのめだかかよ　浜口弥十郎

死んだつもりで働きますと別れたきり　三留風満楼

かくし妻の弥生は川の見ゆる住居　扇屋半平

井泉水著作。
一茶句集『しだら』、『おらが春我春集』、『俳句の作り方と味ひ方』、『一茶文集』、『一茶俳諧歌集』。
井泉水編著。
『放哉書簡集』。

〈この年〉
蒋介石、クーデターで国民党左派・中共を抑え、南京政府樹立。
「岩波文庫」刊行開始。
芥川龍之介自殺（36歳・小説家）。
徳富蘆花没（60歳・小説家）。
日本歌人協会結成。
『日本プロレタリア詩集』刊。
第一回都市対抗野球大会開催。
最初の野球実況放送（甲子園）。
宝塚劇団レビュー「モンパリ」上演。
最初の地下鉄、上野・浅草間開通。

月が明るくて帰る	荻原井泉水	
いばら冬芽をもち富士の雪	〃	
元日の夜の大阪をたてよこに流れてゐる川	大橋裸木	
蓑虫よ絵かきは絵の旅に出る	〃	
人が繋がれてゆく三人が一本の縄で	〃	
死顔に化粧する紅が見あたらない	小沢武二	
春が去んだ空へ小鳥籠を吊す	〃	
死んだ子の書いたものなど見るのであった	秋山秋紅蓼	
朝からあってくりやのお盆ばな	〃	
へうへうとして水を味ふ	大越吾亦紅	
	種田山頭火	

○層雲記要

三月、内島北朗　劇「南郷庵」。

四月、石原元寛「栗林一石路とプロ俳句」。プロレタリア俳句と名付けた最初の論。元寛は熊本火山の会で山頭火を支持した一人。これを機にプロレタリア俳句賛否両論が誌上で活発になる。

五月、象画帖（小沢武二）（層雲二百号記念）。

七月、近藤麦平（益雄）「小沢武二氏の近業について」。

九月、井泉水「雲の如く」。

十二月、井泉水「奥の細道贅註」連載始まる。

層雲同人自選句集『月像』刊。

○同人動静

一月、木村緑平句集『太陽の近くに移る』刊。清水一翁没。

三月、大橋裸木句集『生活を彩る』尾崎放哉書簡俳句集『好日集』（小沢武二編）刊。

四月、北村春畦句集『昭和の花』刊。

八月、内島北朗句文集『壷屋草子』刊。

十月、小沢武二句集『絵の消えた絵馬』刊。

十二月、『木村末吉句集』刊。

入沢春光遺稿『春光』刊。

烏なく世間から忘れられてをる	木村緑平
東京へ烏になかれに出て来た	酒井仙酔楼
あんぱんを喰べる旅にしあれば	扇屋半平
びんぼう長屋のこひねこどうし	浜口弥十郎
海ははるかなり砂丘のふらここ	河本緑石
異国で病む身をやいとに灼かせる	下山逸蒼
空になにもないひなた	芹田鳳車
ペンペンぐさよ母に叱られた遠い日のぺんぺんぐさ	横山林二
妻を泣かせて出るとする蓑つけて	佐々木石々
なにもかも月もひんまがってけつかる	栗林一石路

○その他
一月、井泉水JOCKより「連句、発句、俳句」放送。
四月、井泉水、山崎聖天にて放哉三周忌追悼京阪俳句大会に出席。
五月、井泉水、大阪朝日会館にて講演「芭蕉の言葉」。
九月、行乞放浪途上の山頭火が小豆島に渡り、放哉の墓参。
十一月、井泉水、鎌倉佐介ヶ谷に移転。
井泉水著作。
『奥の細道評論』、井泉水句集『皆懺悔』。

〈この年〉
共産党中央機関誌「赤旗」創刊。
共産党員全国で検挙（3・15事件）。
高柳健次郎、世界最初のテレビ実験に成功。
野口英世アフリカで客死（53歳）。
関東軍列車爆破で張作霖を爆殺。
第9回オリンピックに日章旗初めて揚がる（織田幹雄、鶴田義行）。
「詩と詩論」創刊。
林芙美子「放浪記」発表。
若山牧水没（44歳・歌人）。
昭和天皇、京都で即位式挙行。
小山内薫没（49歳・劇作家、詩人）。
人見絹枝、女子四百mに世界新。

蜩鳴く鎌倉を鎌倉に移り　荻原井泉水
夜ふけの号外でばくはつしてゐる　大橋裸木
星空のベンチからも追ひたてられた　〃
鉄索が空をひっぱっていて一月一日　栗林一石路
鉄を叩いて人間が空のどこかにいる　〃
とまりてよるのわらうつきぬた　大越吾亦紅
みんな弟よ鱈汁のうまいふるさと（高岡にて）　内島北朗
冬枯の世間が見える窓あけてをく　木村緑平
雪風の電線から落ちまい仕事してゐる　小沢武二
猿の手にも拾はせて一まいの銅貨だ　秋山秋紅蓼

○層雲記要
四月、井泉水「福島から仙台まで」その上。
七月、鎌倉俳談会にて栗林一石路、内島北朗の間にプロレタリア俳句是非の論争。
八月、青山郊汀「ホフマンスタールの死」
十二月、層雲第七句集『短律時代』刊。

○同人動静
一月、栗林一石路句集『シャツと雑草』刊。
五月、大橋裸木編『一茶俳句全集』刊。
七月、内藤寸栗子句集『私の空間』刊。
十一月、九州旅行中の井泉水が、阿蘇で十五年ぶりに山頭火と再会。
十二月、三宅酒壺洞『井泉水先生著作目録』を謄写版で作成。松尾あつゆき加入。

○その他
七月、井泉水鎌倉扇ヶ谷に移転。芹沢寿子と結婚。
九月、井泉水鎌倉材木座に移転。
井泉水著作。
『観音巡礼』、『俳句趣味論』、『井

さくらさいたよいそうろうするみで　浜口弥十郎
土の高み低み春なれ　青木此君楼
月が波が荒れるばかり吃水線　近藤益雄
酔ってゐて寒い終電車をとっつかまへた　内田創平
また黒うなった乳首にてすかさるる子か　佐々木石々
アメリカ三界でつぶされる煎餅の辻占　下山逸蒼
もろもろの悩みを捨てて妊りている妻を愛す　橋本夢道
ほろほろ酔うて木の葉ふる　種田山頭火
死ぬ人癒る人の薬はかる小さなふんどう　海藤抱壷
シグナルの硝子ふきにのぼり能登の雪　高橋良太郎

泉水句集』、『旅のまた旅』、『京洛小品』、井泉水俳話第四巻『この一筋を行く』。

〈この年〉
沢田正二郎没（38歳・俳優）。
島崎藤村「夜明け前」発表。
安西冬衛『軍艦茉莉』刊。
北川冬彦『戦争』刊。
館山一子歌集『プロレタリア意識の下に』刊。
内田魯庵没（62歳・評論家、小説家）。
川端竜子ら青竜会創立。
浜口雄幸内閣成立。
ニューヨーク株式市場大暴落、世界経済恐慌の始まり。
岸田劉生没（39歳・洋画家）。
清水トンネル開通。
ツエッペリン、飛行船世界一周に成功。
フレミング、ペニシリンを発見。
レコード歌謡の「君恋し」が流行し、作詞・作曲の専属制始まる。

けさは浪音もなく松の葉を掃く　荻原井泉水

夜の富士の涼しく見えていて、たばこぼん　秋山秋紅蓼

陽へ病む　大橋裸木

日に日に薬の紙を手にして三羽の鶴　海藤抱壷

へなへな転任させられてゆく夏草　大越吾亦紅

学校へ行く児行かぬ児の味噌汁　内島北朗

さくらさいてぱちぱちそろばん　藤沢せい二

おそい月が出たさいせんばこのねずみ　酒井仙酔楼

夜霧の伴れが減って減って独り　下山逸蒼

どうしようもないわたしが歩いてゐる　種田山頭火

○層雲記要

四月、一石路「俳句は生きてる」。

九月、秋紅蓼「不定型俳句における内容律の究明とその形態について」。

八月、井手逸郎「自由俳句の音律」。東京の層雲江東支部（幹事・橋本夢道）、東京第一支部（幹事・横山林二）が層雲での活動を中止、退会。

○同人動静

五月、大橋裸木、病気療養のため、奈良県曽爾村へ転居。

十一月、鳥取湖の会編『春の烟』（放哉追悼集）刊。

○その他

井泉水、ラジオ放送での講座活動活発。

父を火にしていでて雪の山なみはあり　和田光利
まゆ煮るにほひの津軽がくもる　七戸黙徒
干草の匂ひする乳房が二つある　佐々木石々
道化役者が一人舞台で冷たい雪が降ってゐる　小沢武二
吹きさらしの仕事場へめしびつがとどいてる　小松崎翔陽
人造人間もしぐれて暮の街の同情週間　伊藤雪男
何ンの漁もない沖でけふもぞろぞろ軍艦がとほる　浜口弥十郎
煙突の林立静かに煙をあげて戦争が起りそうな朝です　橋本夢道
寒夜の一点へ人がいくらでもあつまってくる　浦山木霊
はるけき人を思えば静かなる螢の明滅　塚田虹子

井泉水著作。
『旅の茶話』、『奥の細道を尋ねて』、『俳壇傾向論』、『山川行住』、俳人遺跡全集第十巻『一茶』

〈この年〉
下村観山没（58歳・日本画家）。
田山花袋没（60歳・小説家）。
九州大暴風雨（全壊三千百六十戸）。
三好達治詩集『測量船』刊。
東京、大阪間に写真電送開始。
東京、神戸間に特急「燕」運転（時速67・4km）。
日本図書館協会設立。
伊豆・相模地方大震災（死者二百五十四人）。
浜口首相、東京駅で狙撃され重傷。
里見勝蔵ら独立美術協会設立。
堀辰雄「聖家族」発表。
大日本連合婦人会創立。
「祇園小唄」、酋長の娘」流行。

湯女もてすりに、あれは蝦夷へゆく船　荻原井泉水
蟹工船に乗込む雪をかじってゐる　七戸黙徒
盗みする子の母親に椅子をすすめる　〃
米とぎ汁の流れゆくあやめばなあやめばな　大越吾亦紅
クラリオネット、遠い月夜の曲馬団　〃
額（ぬか）しろきうまの顔あげて夏山幾重　和田光利
子を思ふにつけ死んではならぬと思ふにつけ咳する　大橋裸木
気球の曇った表情の空を仰いでゐる　小沢武二
私の思想のちぐはぐな気球の浮いてゐる街　〃
うしろ姿のしぐれてゆくか　種田山頭火

○層雲記要

二月、井手逸郎「不易流行」（この論文中に「自由律俳句」という言葉を使用）。

三月、井泉水「評釈的に」連載始まる。

五月、秋紅蓼「語音感のはたらきについて」。

六月、逸郎「明治大正俳句史」連載始まる。

十一月、層雲第八句集「昭和の曲」刊。

○同人動静

一月、一石路、層雲退会。

四月、和田秋兎死句集『月山』刊。

六月、大橋裸木句集『四十前後』刊。

八月、内田忠句集『白い海白い空』刊。『鳩』創刊。井泉水、雪男、鳴雨、交代編集。

九月、秋山秋紅蓼句集『夜の富士』刊。牧山牧句人句集『草の雨集』刊。

まったく雲がない笠をぬぎ	〃
死面のやうな凧がある異国の夕空	下山逸蒼
青い海の恋しさ燕がさかなになった	海藤抱壷
こしかけて鳥の行く空	酒井仙酔楼
かげもめだか	沼尻陽三郎
月夜から高く非常階段が折れて曲がってくる	秋山秋紅蓼
窓は雪降る退け時の金庫の扉	伊藤雪男
支那が戦争となった新聞を蚤がとんでる	池田龍眠
雲のあるガスタンクのある少女のゐない風景	内田創平
自動車が好きで好きで金色の自動車にのってゆく子	中原礼二

○その他
井泉水著作。
『一茶七番日記』上下、『第一の扉』、『新俳句座談』、『芭蕉入門』、『俳人読本』。

〈この年〉
国政調査発表（内地人六千四百四十五万人）。
満州事変勃発。
リンドバーグ北太平洋横断飛行に成功。
東北・北海道で大飢饉。
新宿でムーランルージュ開場。
大阪帝大・名古屋医大創立。
スペインで革命。
前進座創立。
「美術研究」創刊。
日本版画協会創立。
「大百科事典」（平凡社）刊行開始。
谷崎潤一郎「盲目物語」発表。
世界経済恐慌深刻となる。
エジソン没。
「酒は涙かためいきか」流行。

佐渡はおけさで酔えば八日の月のおちる　荻原井泉水
鳶の一羽が吹き晴れて美術館の旗　秋山秋紅蓼
短日の陽ざしに一本足で立ってゐる鶴　大橋裸木
住めば東寺の塔は東に冬雲一ひら　〃
果してさういふ世が来るか、落葉してゐる　小沢武二
鉄鉢の中へも霰　種田山頭火
螢一つ二ついる闇へ子を失うてゐる　河本緑石
ヒヨイと釣られたドンコではねる　近藤益雄
俺を振りおとさずに此一年廻った地球だ　下山逸蒼
月へ手紙一本出して置く　木村緑平

○層雲記要
三月、青山郊汀「ゲーテと俳句」。層雲同人を中心とした俳画展覧会（上野松坂屋）。
三月の麻布俳談会で、山頭火の「鉄鉢の」「うしろ姿の」句が話題となる。
五月、小沢武二編『春菜』（層雲二百五十号記念同人自選句文集）刊。
六月、井泉水「歩くもの」。
近藤益雄「童牛荘雑記」で三月号の層雲句の音数、文語・口語脈の作品調査発表。
九月、逸郎「作家と作品」。
層雲リーフレット第一号出来る。

○同人動静
三月、小沢武二句集『花と絵馬と気球』刊。
五月、井手逸郎『明治大正俳句史』刊。
六月、種田山頭火句集『鉢の子』刊。
七月、浜松より『松』創刊。
八月、青木茂『乞食放哉の大往生』刊。
九月、『群鳥』創刊。
山頭火、山口県小郡町の其中庵に入居。
近木黎々火（圭之介）層雲加入。
十月、佐藤露江句集『海の門』刊。

麦は刈るべし最上の川のおしゆくひかり　和田光利

紫苑の花や今日という日を静かに生きよう　海藤抱壺

めおとごとおわり夜のさゐさゐと雨ふるや　中原礼二

押し入ろうとする風に戸をたててゐる生活　芹田鳳車

号外がたてよこにとんでゐる月の黒くも　谷尾寿彦

月夜は海の方で啼く　久保白船

汽車が汽車を追い抜いてゆく町になる風景の中で　内田創平

恰好の骨壷の値段　松尾あつゆき

おちていたのはじつにしずかなてふのはね　伊藤みどり

蹴ればとて石ころ　財馬呵歩

十二月、池田龍眠句集『陽を浴びて』。
鹿島黙太句集『芽ぶいた太陽』刊。

○その他
井泉水ＪＯＨＫより五日間「奥の細道抜抄」を放送。
井泉水著作。
『俳句の道』、『芭蕉遺語集』、句集『梵行品』、『俳人読本』下、『新俳句提唱』、『旅人芭蕉』、『わりなき人芭蕉』。

〈この年〉
ジュネーブ軍縮会議。
陸軍将校、犬養首相を射殺。
チャップリン来日。
『日本文学大辞典』刊。
第十回オリンピック開催。
日本水泳他五種目に優勝。
ドイツ総選挙でナチス第一党となる。
東宝映画株式会社創立。
日本労働組合会議結成。
日本学術振興会創立。
進歩的美術への圧迫始まる。
陽電子、中性子発見される。
ヤスパース『哲学』、ショーロホフ『開かれたる処女地』、ジュール・ロマン『善意の人々』刊。

月が涼しう毀れた肺がしみじみ息するは　大橋裸木
まこと京のかりのやどりの白い団扇を置く　〃
病む子のそばにはいつも母がゐて雪の下は咲く　〃
リベラリストであることが、蔓物茂りに茂り　小沢武二
玉葱の芽ののびたしばらく留守にします（遺稿）　七戸黙徒
春風の鉢の子一つ　種田山頭火
すゞめうまれてゐる花の下をはく　木村緑平
死ねば星になるといふ子の手をひいてゐる　佐々木石々
ふろしきの四角いこれがべんとう、を持つ　大越吾亦紅
弾力のない椅子をストーブに寄せ合ってゐた　近藤益雄

○**層雲記要**
二月、青山郊汀「文学としての層雲ヴァイタリズムの一提唱」。
七月、諸家「七戸黙徒を憶う」。「黙徒遺稿」。
九月、裸木「最後の作」、「裸木書簡」。層雲社にて裸木追悼俳談会。一草社第二回俳画展を上野松坂屋にて開催。
十月、十一月、諸家「裸木を語る」追悼号。
十二月、層雲第九句集『一人一境』刊。

○**同人動静**
四月、北村春畦句集『根白草』刊。
六月、井手逸郎『俳句論攷』刊。
七月、木村緑平句集『雀のいる窓』刊。
十月、中島せい作句集『ひぐらしを聴いて』刊。大橋裸木句集『海国山国』刊。
十二月、種田山頭火句集『草木塔』刊。
七戸黙徒没（五月・44歳）。
河本緑石没（七月・37歳）。
大橋裸木没（八月・44歳）。
他、池田龍眠、山口旅人没。
北村春畦没（表紙画家）。

清水（きよみず）のすこしぬるい甘酒と枯木の影　酒井仙酔楼

ねづみが夜をかぢる考へてはかぢる　内島北朗

つばめ、つばめがあらしになった　松尾あつゆき

風鈴、笑うて暮せと言わはりますけど　財馬呵歩

いつ死んでもよいやうに片付けはしたが雀のこえ　海藤抱壷

貧しかりしぢぢばばのこれは水甕　河村花不言

その人が血を売った領収書（うけとり）　牧山牧句人

なにもかも曲った世の中で、釘をのばす　中原礼二

おいて一鉢の蘭の雨をよろこぶ色　山口旅人

すててせなむけてゆく　関口父草

○その他
井泉水著作。
『第二の扉』、『放哉俳句集』、『芭蕉選集』、『芭蕉の自然観』、『続旅人芭蕉』、『芭蕉さま』、『奥の細道通説』、『京洛小品』、『ある日の微笑』、『芭蕉と一茶』、『旅の話・句の話』、『人間道と句作道』。

〈この年〉
一月、「京大俳句」創刊。新興俳句運動隆盛期
ヒトラー、ドイツ首相となる。
小林多喜二検挙、東京築地署で虐殺される。
東北・三陸地方大地震、大津波で死者千五百人余。
ルーズベルト、アメリカ大統領に。
ドイツ、ユダヤ人弾圧始まる。
京都美術館開館。
尾崎士郎「人生劇場」発表。
国語読本「サイタサイタ」等、新国定教科書使用開始。
石坂洋次郎「若い人」発表。
谷崎潤一郎「春琴抄」発表。
宮沢賢治没（38歳・詩人、童話作家）。
「東京音頭」大流行。

子どもラッパふいてすすめば草の風なびく　大越吾亦紅
講話に冬の日すっとさしてきて聴衆　〃
ほころび縫ってくれて、糸切歯　下山逸蒼
ボヘミヤンネクタイで故国へ帰る気もない　〃
秋風の砂丘に人が、近づけば行ってしまふ　小沢武二
落葉、風の氾濫に立ちつくしてゐる　〃
木を挽けば鳩の声木を挽けば　和田光利
凶作のおびえが、鎌研いでゐる　〃
寒い建物のざらついた夕日に背をあててゐる　秋山秋紅蓼
かぞへきれないものをかぞへてゐる此子がみなし子　〃

○層雲記要

五月、伊沢元美「自然主義と俳句覚書」。伊勢伝一「尾崎放哉論」。
七月、井泉水五十歳記念『象画帖』刊（小沢武二編）。
八月、三宅酒壺洞「井泉水先生著作便覧」。
十一月、井泉水満五十歳祝賀会（東京赤坂溜池の三会堂）。長谷川義起作「寿像」を贈呈。全国俳句大会開催。

○同人動静

一月、夢道、一石路参加の「俳句生活」創刊。
里見波哉句集『すみ田』刊。
二月、創刊の「俳句研究」に井泉水自由律俳句の道」連載。
六月、「椿」創刊。
八月、紫原春渓遺句集『浪音』刊。
牧山牧句人句集『木の端集』刊。
十一月、池田龍眠遺稿及追悼集『木蓮集』刊。
海藤抱壺句集『三羽の鶴』刊。

○その他

井泉水、六十歳以上の層雲誌友及創刊号以来の読者に記念揮毫を送る。

クリストの齢なるこそ女に触れぬ我身こそ	海藤抱壷
死の近しか青木の実は赤ききはみ	〃
ネオンサインが動脈静脈、夜は凍るばかり	吉田六郎
昼のひかりと影と水族館の切符売る窓	池田詩外楼
噴水に風がありすぎて笑いさざめくのが少女たち	吉沢博
昼月があると水上署の天気予報の旗	牧山牧句人
山の烏が又一つ年を持って来た	木村緑平
この道しかない春の雪ふる	種田山頭火
とめる言葉をもち月にいそいでゆく	伊藤雪男
ぐんかんのぬれてとほるにあめがぬかあめ	近木圭之介

個人誌「大泉」創刊。
井泉水ＪＯＡＫより「奥の細道を辿る」を放送。
十二月、井泉水麻布新居に移転。
井泉水著作。『遍路と巡礼』、『一茶雑記』、一茶遺稿『父の終焉日記』、『青天の書』、『芭蕉を尋ねて』、『春秋草紙』、『俳人読本』、『芭蕉・蕪村・子規』、『放送芭蕉を語る』。

〈この年〉
三月、「俳句研究」創刊。
京都駅で入営兵見送りで混雑し、七十七人圧死。
直木三十五没（44歳・小説家）。
文部省、国名をニッポンと決定。
藤原義江「ラ・ボエーム」上演。
函館市大火、全焼二万三千六百戸余、死者二千。
関西地方に大暴風雨、死者行方不明三千（室戸台風）。
竹久夢二没（51歳・画家）。
高村光雲没（83歳・彫刻家）。
アメリカ選抜職業野球来日、日本の職業野球団結成のきっかけ。
丹那トンネル開通。
ハーバー・キューリー夫人没。
「赤城の子守唄、国境の町」流行。

短針を長針が追うだけの生活で日ざしが三角　荻原井泉水

あまざけのあぢをみるははじゃ人はおわし　和田光利

訪問タイムの靴音の方を向いてゐた（入院）　下山逸蒼

金魚は水に私は朝の息をしてゐる　海藤抱壷

灸をすえるふっとふるさとの母の匂ひの　中原礼二

春夜の闇から私を嗅ぎ出した犬で、私を知ってゐる　小沢武二

あつい日で貨物列車がくろくてとほる　大越吾亦紅

冷蔵庫の氷も痩せこけて夜のお客さま　内藤寸栗子

煙突ふかれてひろびろと風が強い鉄橋　秋山秋紅蓼

花の下の群衆で酔っているのは日本人で（旧安東市）　塚田虹子

○**層雲記要**

四月、層雲社俳談会。放哉居士十周年供養

五月、秋紅蓼「俳句におけるコンマの性質」。

七月、井泉水「裸木の屑籠」。

八月、裸木・緑石追悼俳談。

十月、荻原桂子十三回忌追悼句会。

十二月、村尾草樹「蝟集する眼」で新興俳句に言及。

層雲第十句集『第十の牛』刊。

○**同人動静**

一月、下山逸蒼没（57歳）。

二月、種田山頭火句集『山行水行』刊。

三月、木村緑平句集『松の木』刊。

四月、河本緑石『大空放哉伝』刊。

六月、下山逸蒼句集『海へだて』刊。

九月、和田秋兎死句集『海神』刊。

十月、小沢武二句集『散文時代』刊。

河本緑石句集『大山』刊。

里見波哉没。

○**その他**

井泉水眼底出血で右眼ほぼ失明。

そんなに遠くへは行くまい影が電信棒　堀　英之助

春の太陽がぬがせたものを胸にしてゆく　松尾　あつゆき

一人の親がたっしゃなので田舎の春を汽車にのってます　藤崎　麦村

女と心満ちたらぬ男と、切符に鋏入れて貰った　牧山　牧句人

航空燈が明滅してゐる女は女らしい話　内島　北朗

柳に蝙蝠なんど旧い思想がとんでゐるやうな　飯尾　青城子

蟻の穴に陽がいっぱい胸に寂しさをためてゐる　井上　牧子

うららか着物一枚ぬぐ破れてゐる　酒井　仙酔楼

何を求める風の中ゆく　種田　山頭火

いっしょにあるけばまがってゆくみち　近木　圭之介

井泉水著作。『一茶句集』、『自由律俳句評釈』、『花鳥小品』、『火中の書』、『俳談』、『雲の如くゆく』、井泉水句集『無所在』、『新に俳句を作る人に』。

〈この年〉

日野草城「旗艦」創刊。

「世界文化」創刊。

高見順「故旧忘れ得べき」発表。

坪内逍遙没（77歳・小説家・劇作家・評論家）。

与謝野鉄幹没（63歳・歌人・詩人）。

「日本浪漫派」創刊。

第一回芥川賞に石川達三「蒼氓」。

直木賞に川口松太郎「鶴八鶴次郎」決定。

日本ペンクラブ発会（会長に島崎藤村）。

島木健作『再建』刊。

林房雄ら独立作家倶楽部結成。

寺田寅彦没（58歳・物理学者・文学者・俳号薮柑子）。

満州に極秘裡に細菌兵器研究所設立。

イギリスでテレビジョン放送始まる。

雪はふるふるラジオは兵に告ぐ、又兵に告ぐ（二・二六事件）　荻原井泉水

誰とて黙って、ただただ雪降る世相か　〃

雪朝の建物が何としても白い沈黙（二・二六事件）　秋山秋紅蓼

雪にあめかぜ、そらがむちの音たてる　藤沢青銭子

美しい水で流れてばかり　芹田鳳車

ポストが寒い影、をなくした　池原魚眠洞

寒夜の抽斗から次々に物を出すことをしてゐる　小沢武二

あるけばかっこういそげばかっこう　種田山頭火

荒海へ脚投げだして旅のあとさき　〃

日ざかりの網代笠をぬがれたる顔（山頭火来訪）　和田光利

○層雲記要

一月、橋本健三「論抄」。

四月、中原礼二「短律精神」。

四月、この号で三百号。

東京築地にて層雲創刊二十五周年大会開催、山頭火も出席。

五月、井上三喜夫「自由律俳句序論」連載。

層雲社俳画展（銀座松坂屋）。

六月、層雲三百号記念『楽々帖』小沢武二編で刊。

層雲の経営及び編集の一切を小沢武二に委譲。七月号より武二の手で発行。

○同人動静

二月、種田山頭火句集『雑草風景』刊。

三月、内藤寸栗子没（63歳）。

十月、酒井仙酔楼句集『鳥のゆく空』刊。

十一月、青木青夫『青夫句集』刊。

○その他

山頭火、東京大会のあと、信濃路を経、新潟、鶴岡、仙台と、同人を訪問しての旅を果たし、七月帰庵。

井泉水、JOAKより「奥の細道の心」五日間放送。

白いかみが螢一ぴき二ひきつつめばひかる　藤崎麦村

人間をそこに機械の逞しい表情が、夏　牧山牧句人

残暑の機械に吸わするあぶら、あぶらつぼ　大越吾亦紅

まことに煙突林立しずかにゆうぞらがある水平　井上阿弥坊

風鈴、ことばのさみしさを知ってゐる　財馬呵歩

犬が嗅いでみて落葉でしかない、青空　窪田耕児

枯木に雲の美しい少女の漕いでくるボート　吉田六郎

ずい分世も変りました坂の冬木の俥屋さん　飯尾青城子

日曜の陽を浴びてこの木造りの古椅子よ　村野四郎

捨てるところにすてて風ふく　伊藤雪男

井泉水著作。『奥の細道古註』、『俳句教程』、『新俳句鑑賞』、『身辺の書』、『白馬に乗る』、『俳句に入る道』。

〈この年〉

ロンドン軍縮会議から日本脱退して無制限軍備拡張時代になる。

武田鱗太郎「人民文庫」創刊。

同盟通信社開業。

シャリアピン来日。

下村湖人「次郎物語」発表。

皇道派青年将校、下士官兵千四百人を率いてクーデター（二・二六事件）。翌々日反乱軍武装解除される。七月の軍法会議にて十七人の死刑決まる。（一週間後執行）。

この年メーデー禁止（昭和21年復活）。

内田巌ら「新制作派協会」創立。

天津で日本軍列車爆破事件起る。

第十一回オリンピックにて日本水上四種目と三段跳びに優勝。

石井柏亭ら「一水会」創立。

堀辰雄「風立ちぬ」発表。

国会議事堂完成（十一月）。

日独防共協定調印。

ゴーリキー、魯迅没。

「忘れちゃいやよ、東京ラプソディ」流行。

梵音海潮音海はこんじょう鐘の鳴る	荻原	井泉水
風の中おのれを責めつつ歩く	種田	山頭火
ふたたびは踏むまい土を踏みしめて征く	〃	
風にむかってみながあるきはじめて風強し	大越	吾亦紅
ポストが寒い影をなくした	池原	魚眠洞
暮れてしまひさうで鍋が煮えてゐる	芹田	鳳車
音という音が海にはみ出てゐる戦時工業地帯	内島	北朗
靴おと彼等のがっちりと戦地へ負うて行く重量	〃	
かぜにふきちる噴水の、東京で逢うてゐる	池田	詩外楼
それからきつい霜がまい朝、軍事郵便	牧山	牧句人

○層雲記要

一月、秋紅蓼「表現律論」。

二月、『層雲第十一句集刊』。

七月、井泉水「海をこえて」。

十月、秋紅蓼「自由律俳句のゆく道」。

○同人動静

六月、青木此君楼句集『句集此君楼』刊。

八月、山頭火・緑平句集『柿の葉』刊。

○その他

二月一日、河東碧梧桐没（65歳）。井泉水、河東碧梧桐の告別式に参列。

四月、井泉水、渋谷区青葉町に移転。

六月、井泉水、渡米の途につく。ハワイ滞留一ヵ月、北米一ヵ月。

八月、井泉水アメリカより浅間丸にて横浜に帰る。

十一月、井泉水、四国遍路に出立。

井泉水著作。『井泉水句集』、『自由律俳句入門』、『芭蕉を尋ねて』、『一茶

命生きてゐる木の葉のやうなハガキ一まい　窪田耕児
兵を送りては山兵を送りては山が白くなる　前田若水
大きな虹の稲をば束ね稲をば背負ひ　柳田流矢
木の葉口にあてて若者恋しい心を鳴らす　村野四郎
来し方行く末の、朝は涼しい脈と秒針　海藤抱壷
二子とて一つ寝床に霜やけがかゆく　阡陌余史郎
雨にキネマの灯ばかり明るくて　船の笛　近木圭之介
白いピストルと鳩と、らしんの女がまた笑ひだした　鈴木周二
万歳万歳と云ったのちの青空よりせまってくるもの　山本蒼天
銀河を顔のうへはいのう枕にすると（北支戦線）　尾崎善七

真蹟集』、一茶遺稿『志多良』、『俳句の手』、『旅窓読本』。

〈この年〉
文化勲章を設定。
自由美術協会創立。
横光利一「旅愁」発表。
帝国芸術院創立。
川端康成『雪国』刊。
豊田正子『綴方教室』刊。
七月、日中戦争始まる。
八月、上海で日中両軍交戦開始。
十一月、大本営陸海軍部に報道部。
岸田国士ら文学座結成。
第一回文部省展覧会開催。
イタリア、日独防共協定に参加。
島木健作『生活の探究』刊。
国民儀礼用に「海ゆかば」を採用。
日本共産主義者団体結成。
漫画『のらくろ』ベストセラーとなる。
「ああそれなのに、裏町人生」等流行。

うどん供へて、母よ、わたくしもいただきまする　種田山頭火
うまれた家はあとかたもないほうたる　〃
駅へ朝日さし朝日が通りぬけてゐる　大越吾亦紅
陰膳そなへて一年、からすうり咲く
大砲を曳く馬の汗の香に雪ふり　和田光利
はじめて握る手の、放てば戦地へいってしもう　内島北朗
山に、空をまもる灯があって秋めく満天の星　松尾あつゆき
叱ってくれる親がいてまたひとつ年とり候　〃
ひらひらとゆきちらちらとはなびらがははのめいにち　関口父草
心のどこかに硝子の破片、夕月が枯木に突き刺さってゐる　井上牧子
伊藤雪男

○層雲記要
三月、層雲第十二句集刊。
四月、不喚洞主人「ルビ句の正体」。
六月、秋紅蓼「自由律と基準律」。
九月、青山郊汀「転換期の層雲」。
十一月、諸家「阡陌余史郎を語る」。

○同人動静
三月、木村緑平句集『雀と松の木』刊。
四月、松尾敦之句集『浮灯台』刊。
七月、吉沢句唖郎句集『榛の木』刊。
小沢武二句集『春の通った道』刊。
八月、朱鱗洞句集『礼讃』（再販）刊。
阡陌余史郎没（46歳）。
九月、和田秋兎死句集『林相』刊。
尾崎善七戦没。

○その他
井泉水再び四国遍路。
井泉水、井の頭公園の西、三鷹町に移転。
小豆島にて放哉十三回忌。
井泉水、JOAKで「芭蕉の心」放送。
井泉水、俳句三代集の「自由律篇」

汽車が水呑んでいるので田に稲は稔ってゐる　池田詩外楼
水のおもてはまだ寒いはるがさかさま　重村雪人
三日月の、ポストへ落とせば日本へ届く　秦是道
戦いは勝たねばならぬ蟻が死んだ蟻運んでゆく　前田若水
囲炉裡火の猛きに里言葉あらげしたしみ　村野四郎
風、顔をよごしてないてゐる　芹田鳳車
つきよ煙が煙を追っかけてさむし　藤崎麦村
子に大きな乳房をあたへつみびととして椅子　飯尾青城子
映画にみぞれの音が、かたまりとなって進軍する　日向野秀策
歴史が流れてゆく汽車の屋根みせてゆく（出征歓送）　井上阿弥坊

で中塚一碧楼と会う。
井泉水、渋谷常盤松町に移転。
渋谷句青葉町に新築でき移転。
井泉水著作。放送講話『奥の細道の心』、『芭蕉風景』、俳句文学全集の『荻原井泉水篇』、『一茶研究』、『芭蕉読本』、『アメリカ通信』、『知命の書』、『井泉俳話二』、『一茶を尋ねて』、『外遊句稿』。

〈この年〉
厚生省設置。
国家総動員法発令。
杉本良吉・岡田嘉子ソ連へ越境。
石川達三「生きている兵隊」筆禍事件。
日本ペンクラブ、国際ペンクラブを脱退。
パーマネント業者の新設移転を禁止。
火野葦平「麦と兵隊」発表。
国民健康保険法公布。
ヒットラー来日。
ハーン・ストラスマン、ウラニウムの原子核分裂現象を発見。
「別れのブルース、支那の夜」等流行。大陸の将兵慰問に歌謡曲部隊が出発。

雪きて雪あかり教員室の額のペスタロッチ　大越吾亦紅
本棚の人間学をとって以って、冬　〃
花を花に来て花の中に坐り（高遠）　荻原井泉水
手にあるのは馬券のしわ　堀英之助
妻の気持も、数の子かみしめて正月は家にゐる　〃
色はブラマンクそのまま一望吹かれてゐる　内島北朗
星が風吹く地下道へ人が吹かれて行く　〃
からだじうが月になって手すりに手を置く　芹田鳳車
無事でもどれたからだ横にしてゐてのはなし　池田詩外楼
雪空がチラチラしてきたのか垂れ幕が貯蓄週間　伊藤雪男

○層雲記要
一月、井泉水「わが思うところ」。
五月、『層雲第十三句集』刊。
七月、小豆島西光寺で層雲物故誌友追悼法要。
八月、秋紅蓼「新表現の探究」。
十月、井泉水「業・体・道」。
層雲社改組。「層雲」を層雲会より発行とする。
十一月、秋紅蓼「放哉俳句の一面」。

○同人動静
一月、山頭火句集『孤寒』刊。
小川都影句文集『白い木蓮』刊。
四月、井上三喜夫『俳句文学新考』刊。
七月、浦山木霊句集『茶の花』刊。
尾崎善七句集『背嚢』刊。
十月、山頭火、四国に渡り、四国巡礼のあと、十二月、松山市御幸町の一草庵に入庵。
十二月、村野四郎『体操詩集』刊。

○その他
一月、井泉水、個人誌「随」創刊。
自句自解『自像素描』。
九月、井泉水朝鮮旅行。

死んだつもりで働けといはれてゐる柿のたね　飯尾青城子

ちくおんき月へはりあげてみんなのつきよ　藤崎麦村

ほほづきすこうし赤らんだ、いなか　窪田耕児

たたかへとこそ鴉や風に　伊東俊二

二本のひばしのどこの他国でもくらすという妻で　田中井夢

構図としても白い雲に梯けた瓦斯（ホルダア）溜の階段　牧山牧句人

朝月、霜のマンホールの蓋が盗まれてゐる　浄心寺良惇

夕焼けた空からへらへら凧をおろしてゐる　日向野秀策

炎天のレールまっすぐ　種田山頭火

草笛上手にふける支那の少女と日本の少年　塚田虹子

〈この年〉
岡本かの子没（50歳・歌人）。
岡本綺堂没（68歳・作家）。
ノモンハン事件（村上潮水が句と従軍記事を昭16年発表する）。
「俳句研究」座談会で「人間探求派」の語生まれる。
名古屋大学創立。
アメリカ、六ヵ月の予告で日米通商条約破棄を通告。
外国劇団上演不可能となる。
戦争画氾濫し始め、前衛的美術は後退。
ドイツ軍、ポーランドに進撃。イギリスとフランス、ドイツに宣戦。世界第二次大戦始まる。
泉鏡花没（67歳・作家）。
岡田三郎助没（71歳・洋画家）。
パーマネント禁止される。
帝国芸術院賞創設。高村光太郎「道程」等、第一回受賞。
「愛染夜曲、長崎物語」等が流行。
軍国童謡出現。

秋、恋愛のあいだとてすこしはなれてあるく　大越吾亦紅

真夏の海の底の泥つけてくる錨をまく　堀英之助

おれを見ている自画像の顔を塗っている　芹田鳳車

落日、こんなに静かにも戦争さなかの年が行く　池原魚眠洞

あれこれたべさせてたべて我子であり兵であり　池田詩外楼

何も持たない男が酔って秋空へ星をばらまく　伊東俊二

おちついて死ねそうな草萌ゆる　種田山頭火

もりもり盛りあがる雲へあゆむ　〃

空に紙のやうな昼月の、死とはこんなものか（山頭火を葬る）　久保白船

二三日寒くなってきたことの社会面を読んで　秋山秋紅蓼

○層雲記要

三月、諸家「放哉を語る」。

七月、村上潮水句「沙漠に闘ひつつ」。

十一月、層雲社秋季大会（神戸）。第一回層雲賞・堀英之助、池原魚眠洞。

和田秋兎死「抱壺の死」。

十二月、井泉水「秋寒し」（山頭火と抱壺追悼）。

諸家「山頭火追憶」連載開始。

『層雲第十四句集』刊。

○同人動静

一月、秋山秋紅蓼句集『兵隊と桜』刊。

四月、俳句三代集別巻『自由律俳句集』刊。

種田山頭火句集『草木塔』刊。

七月、緑平・山頭火句集『雀鴉』刊。

九月、海藤抱壺没（39歳）。

種田山頭火没（58歳）。

十一月、前田若水句集『仙丈』刊。

飯尾青城子編『放哉居士消息』刊。

京都東福寺にて、山頭火・抱壺追悼句会。

雪空が星になりきって電光ニュースがちかちかと欧州戦況　渡辺砂吐流

話せば母には母の寂しさが、あまのがわら　藤崎麦村

鳴りけりドラが別れなりけり（井泉水をおくる）　近木圭之介

胸から弾をぬいて還り涼んでゐる　田中井夢

麦の中身を伏せ土を烈しく呼吸してゐる時　村尾草樹

この身弾丸（たま）となし弾丸の中雄叫びつ駆けるこの時　〃

住みついて都会の隅その片隅の麦畠　牧山牧句人

何を着何を食う世がくるか大根を蒔く　鈴木蜻郎

子として父に挙手するその顔よ朝日まぶしく　木村緑平

障子も、私の思想も切りばりの、何とか正月してゐる　吉田六郎

○その他

井泉水、九月満州旅行。

新日本俳句作家協会の第一年度実行委員となる。

井泉水著作。『一茶読本』、『新俳句入門』、『井泉水俳話三』。

〈この年〉

各種軍事産業さかんになる。

給料からの税金天引き制度始まる。

大都市で砂糖やマッチが切符制。

文部省、ドレミの階名唱法をハニホヘトにかえる。

ベルリンで日独伊3国同盟調印。

イタリア、イギリス・フランスに宣戦。

左翼的出版物や演劇等に弾圧始まる。

京大俳句事件起り、平畑静塔、渡辺白泉、西東三鬼ら検挙され、新興俳句運動は壊滅。

「日本歌人協会」軍部の圧力で解散。

第十回国勢調査（総人工一億五百二十二万人・内地七千三百十一万人）。

日本出版文化協会設立。

トロッキー暗殺される。

「誰か故郷を思わざる、蘇州夜曲」等流行。

さくらに遠し増産にでてひとびと働く	大越吾亦紅
日照一日一万石のけふの日の照り田の面	〃
闇へマッチするほほがそげてゐる	近木圭之介
海から霧があがってくる夜をノックする	〃
一ぴきいれるとほたるがかごに	藤崎麦村
聖戦すすむ陸奥の山々いくたびか雪	和田光利
ウインド義手があり義足がありことしぬくい正月	内島北朗
湖が荒れめくと空は日食の刻となる表情	秋山秋紅蓼
パン買う長い列をつくり空の雲がうまさうな	窪田耕児
はなびらがながれるので、あめんぼう	松尾あつゆき

○層雲記要

一月、層雲の編集、井泉水にかえる。
四月、層雲の経営も井泉水にかえる。
五月、井泉水「三十年」。
層雲創刊三十周年記念俳句大会。
村尾草樹「長律の問題」。
六月、井泉水「当今奥の細道風景」連載始まる。
八月、諸家「白船を語る」。
十一月、井泉水「短律と長律」。
層雲秋季大会（上野・明月園）。
層雲賞・池田詩外楼、近木黎々火。
『層雲第十五句集』刊。

○同人動静

一月、米倉久枝句集『花作りの句』刊。
二月、「俳句生活」の一石路、夢道、横山林二、神代藤平ら検挙。
五月、小沢武二句集『空が芽ぶく』刊。
久保白船没（58歳）。
小沢武二、層雲社退社。
七月、高橋良太郎句集『氷雪』刊。
八月、山頭火句集『愚を守る』刊。
内田忠（創平）詩集『寸』刊。

少年の一隊森の天明けゆくラッパ歩調　伊東俊二

改札、一人一人日本海の落日に出る　中島せい作

親のことを言ひ壁土ふんでゐるはだか　井上充夫

けさ父が召されたその児読本よみちがえず　鈴木折嶺

月が出た蜘蛛の巣の蜘蛛でさかさま　飯尾青城子

柿包んできた古新聞のロンドンが燃えてゐる　筒井茎吉

ひらりとおりて日ざかり、でんぽうです　田中井夢

にっぽんのたよりはラヂオでくる月のあかりは月からくる　大月喜三郎

霜の藁馬に切る戦陣訓そらんじてゐる　久保白船

雑草の花仏の酒を買ひにゆく（山頭火一周忌）　木村緑平

十一月、木村緑平句集『雀の子』刊。
十二月、村上潮水『爆弾下の報告』。

○その他

井泉水、層雲四月号に私信として新日本俳句作家協会解散のこと。
井泉水著作。『俳句する心』、『芭蕉の心』、『遍路日記』。

〈この年〉

新聞紙等掲載制限令公布。
ニュース・文化映画強制上映。
国防保安法公布。
生活必需品統制令公布。
東京港開港。
小学校にかわり国民学校発足。
アメリカ、在米日本資産の凍結公布。
風俗壊乱の理由で大量の文芸作品が発禁に。
高村光太郎「智恵子抄」発表。
御前会議、対米英蘭開戦を決定。
十二月八日、日本軍ハワイ真珠湾を奇襲空爆。太平洋戦争始まる。
中国、日本・ドイツ・イタリアに宣戦。
アメリカ映画上映禁止。
「月月火水木金金」の歌流行。

憂国のしらひげうるはしきひとの講演をきく	大越	吾亦紅
くろい冬木に月が出た泣くのはよせ	近木	圭之介
蝶がとまっていて一個の煉瓦	〃	
おんぼろさんぼろのうつくしさはは	藤崎	麦村
むかしむかし月の兎今夜ときどきサーチライト	伊東	俊二
疾走するものばかりしきりに散るにて	〃	
備えは、満天の里	田中	井夢
おだやかなゆうひになると遠い哨戒気球が東京の枯木	池原	魚眠洞
けだものが創口なめてをる元日日だまり	飯尾	青城子
最後にいう言葉も言ってしまうと征ってしもう	堀	英之助

○層雲記要

二月、井泉水「ホノルルの人々」。
三月、井泉水「カリフォルニアの人々へ」。
五月、秋紅蓼「国民詩としての俳句」。
層雲春季大会（熱海）。
七月、秋紅蓼「佐藤惣之助の思い出」。
八月、秋紅蓼「文学の交流」（日本文学報国会総会に臨みて）。
十月、村尾草樹句「煙草と兵隊」。
十一月、層雲秋季大会（大阪）。
層雲賞・藤崎麦村、松尾敦之。
十二月、『層雲第十六句集』刊。

○同人動静

一月、秋山秋紅蓼、日本俳句作家協会理事。
三月、内島北朗随筆集『陶房』刊。
四月、内島北朗句集『光芒』刊。
五月、久保白船『ふきのとう』刊。
十一月、内田六郎『硝子絵』刊。
十二月、志賀白鷹『俳人放哉』刊。
小玉暁村、住山久二（扇屋半平）没。

○その他

井泉水、九月中旬より病。
井泉水、伊豆にて療養。そのため十

征く者は征きさうしてこつとりこつとり水車はまはってゐる　窪田耕児
かほ呵歩と鴉になかれる刈田に来てゐる　財馬呵歩
父のお骨納めしその子らの動物園へゆきたい　井上充夫
猛獣が火の輪をくぐる寒ン空のがくたいです　岡野宵火
雪積むわたしの代となっている長押の槍　渡辺砂吐流
おおみいくさのただなかのたらいのなかのみどりごです　関口父草
また暫くは逢へない人と来て話す冬のふんすゐ　鈴木蜻郎
闇の草の香、火を消せ、狙撃されとるぞ　村尾草樹
眼をつむると日本にゐる眼をあけて煙草あをぞら　〃
いっさいがっさいなかったものと思えば一本の冬木　鈴木折嶺

一月の秋季大会欠席。
井泉水著作。『東西南北』、『身辺の書』、随筆『春夏秋冬』、『随処の書』、『一茶物語』。

〈この年〉
灯火管制・食料・衣料配給制始まる。
米機本土初空襲（4・18）
与謝野晶子没（65歳・歌人）。
竹内栖鳳没（79歳・日本画）。
北原白秋没（58歳・詩人）。
イギリス空軍ドイツを爆撃。
日本軍南方各地へ進撃。その後米軍反撃に会い敗退。（ミッドウェー海戦）。
関門海底トンネル開通式（三千六百十四m）。
多くの同人雑誌が終刊。
シカゴでウラニウム原子核分裂による連鎖反応実験に成功。
ドイツ軍、ポーランドのアウシュビッツ等でユダヤ人を多数虐殺。
「勘太郎月夜唄」が流行。

露けく山刀腰にするのは山へ行く　荻原井泉水
たしかにものの芽ぶく夜のあめサアチライト　松尾あつゆき
ちょっと機械を休ませて休んでいる白雲　〃
膝にりんごむく眼をはなさないで話す　池原魚眠洞
電車を通して炎天の鶴嘴そろえる声　伊東俊二
朝がすずしい水晶の数珠　平松星童
あめふるでんでんむしむしでんしゃがとほる　〃
どこへいってもつくつくぼうし奉仕奉仕となくような　鈴木折嶺
麦の穂が出た飛行場へ直線道路　田中井夢
島の秋一族の墓である　近木圭之介

○層雲記要

一月、井泉水「捨身の心―芭蕉二百五十年忌に際して」発表。
五月、井泉水、藤崎麦村を訪う。
層雲発行人名義、伊東俊二へ。
十一月、層雲秋季大会を兼ねて錬成吟行会開催（大垂水・層雲閣）。
層雲賞・鈴木折嶺、井上充夫。
十二月、日本出版協会による用紙の配給量減少し十二月号は四十頁。

○同人動静

四月、伊東俊二結婚、新居鎌倉。
因みに同人転居（疎開）通知続出。
五月、伊沢元美詩集『碧流』刊。

○その他

井泉水、松本にて住山久二の墓参、安茂里の北朗居で信州俳句大会。
伊賀上野の芭蕉墓前祭に参列。
井泉水著作。『井泉水随談』、『古人を尋ねて』、句集『海潮音』、句集『一不二』、『俳句と青年』、新選『井泉水句集』。

枯れて地理にも歴史にもない山のかたちふるさと	藤崎麦村
増産増産農会ゴム靴雪どけ	内島北朗
枯れはてて牛の乳とるバケツ	芹田鳳車
浪音、つきよが屋根を重ねている	滝山重三
えんとつがよなべしているつきよのふじさん	〃
なんべん見ても骨壷（妻死す）	財馬呵歩
ひとつぶひとつぶ蒔いてゆくまめである	関口父草
波がぶちわる巌の烈日	親井牽牛花
この朝稲の出来ばえ聞きたい軍事郵便	皆川蓼二
元帥の少年のころの柿の木栗の木窓が見える	小林銀汀

〈この年〉
商工省に金属回収本部設置。
島崎藤村「東方の門」発表。
藤島武二没（77歳・洋画家）。
中野正剛「戦争宰相論」（東条首相批判）で朝日新聞発禁。
大阪毎日、東京日日と合体して毎日新聞と改称。
山本五十六元帥ソロモン上空で戦死。（上段に小林銀汀の元帥追悼句）。
「中央公論」連載中の谷崎潤一郎の「細雪」自粛掲載中止。
東京都制施行（七月）。
鳥取地方に大地震。
学徒戦時動員体制要綱発表（昭和十九年から中学生以上一年常時動員）。学徒出陣壮行大会。
中村不折没（72歳・画家）。
島崎藤村没（72歳・詩人、小説家）。
イタリア無条件降伏。
サルトル「存在と無」発表。
情報局、約一千曲の英米楽曲を演奏禁止。
十四から二十五才の未婚女子勤労動員決定。
「若鷲の歌」流行。

物言えば流言風に流るる葉は愛（かな）し　荻原井泉水

爆音雲雀はひばりで空　池原魚眠洞

かぜにはくれんふかれつつきよげ　平松星童

あらし、ゆうびんふがあらしのほうへゆく　〃

鉄の火花が散って雪の、積りゆく　大越吾亦紅

追ひて追ひ迫る空の上の点、冬、まさしく闘ふ　伊東俊二

身一つささげたるその身青天汗ふく　秋山秋紅蓼

玉砕又玉砕銃後冬の雪山とがり　内島北朗

麦踏み麦踏み雪山真白　〃

決戦けふも日は富士の肩に入る　古林巴水楼

○層雲記要

二月、層雲社青葉町より世田谷・伊東俊二方へ移転。

四月、俳誌統合のため、層雲四月号を以て一時終刊。

六月、「海紅」「陸」と合併「俳句日本」として創刊。

八月、俳句日本に井泉水、「開目鈔」連載始まる。

十一月、井泉水、還暦祝賀会（二十三日：丸ノ内の大東亜会館）。

○同人動静

一月、『みいくさ集』西垣卍禅子編の中に層雲作家の多数の句収められる。

三月、関口江畔句集『あられ』刊。

和田光利句集『繊月』刊。

五月、内田創平没（39歳）。

窪田耕児没。

○その他

井泉水、神奈川・大船町山之内、禅居庵地内に疎開。

たべられる草などもたべてみた明るい夕餉の箸おく　池田詩外楼
海のような麦、の波のような風が少年手旗信号　岡野宵火
青年きみの疵一つないからだしづかに波が夏の盛り　三好草一
もみすりももひきもみがら夕日　木村緑平
兵を送り兵を送りまた豆蒔くときになっている　〃
鼓笛隊先導女子挺身隊入所朝日青葉　渡辺砂吐流
正午になると四角なめし、転業　佐藤康治
わたしひとりが死に残って糸瓜がぶらり　財馬呵歩
盃さしかはしあすは征く子と秋の海をまへ　小川都影
征くとて鬚たくはへてひげひっぱらせてゐる　佐々木石々

〈この年〉
新聞の夕刊廃止。
大都会に疎開命令。
学童疎開決定。
雑炊食堂開かれる。
女子挺身隊結成。
昭和新山噴火開始。
人間魚雷「回天」の基地誕生。
5銭・10銭の新紙幣登場。
満十七才以上を兵籍に編入。
ゾルゲと尾崎秀実の死刑執行。
神風特別攻撃隊編成。
レイテ沖海戦。
二科会はじめ各美術団体解散。
十一月二十四日、B29東京初爆撃。
東海地方、強震・大津波で死者九百九十八人（十二月七日）。
ロマンローラン、マイヨール没。
「南から南から、同期の桜」流行。

雪にとどいて配給のこれは人を焼く薪（叔母死す）　荻原井泉水
星それぞれの秋の座にあり戦終り　〃
窯の火窯をあふれ星空一ぱいの星　内島北朗
馬小屋から馬が顔出して戦争が終った空　〃
石、ころげまはるのがあられ　池原魚眠洞
暗い夜へ悪魔の放った火の美しくあがるも　平松星童
星が夏めく夜店のモナリザの微笑　〃
警報解除のてふてふが暑いぜっちょう　田中井夢
ほのほあさになるだんだんあさやけのようなほのほ（富山戦災）　高橋良太郎
残置燈、秋が散ってちらばってゐる　滝山重三

○層雲記要
四月、層雲会会報第一号発刊。
五月、層雲社全焼（松原町・俊二方）。
六月、層雲第十七句集刊。
七月、富山市の空襲により、印刷所被災。層雲第十八句集焼失。

○同人動静
七月、藤崎麦村没（45歳）。
八月、長崎にて松尾敦之の家族被爆死。
十月、井出逸郎『正岡子規』刊。

○その他
東京空襲あり井泉水の青葉町自宅全焼。（六月）。
井泉水、「俳句日本」に「鎌倉雑記」を連載および「指導する道」を発表。

かなしいほど夜ぞらの雲が白いひめごとをもつ　里井正子

溶鉱炉の火にうつる顔が学徒夜の雪　藤崎麦村

つきよがつづくわかれてからも　岡野宵火

たたかいは終った秋へ蒔くもの買いにゆく　木村緑平

工場の裏に工場建ててゐる正月風の中　財馬呵歩

戦局ここに至っていなづまのひかり夜リベットを打つ　栃木よし雄

日本降伏というわれら一切秋の日に伏す（在米）　大月喜三郎

すがたきよらか冬木朝日はんらん　近木圭之介

ひとり戦死ひとり徴用ひとり虫聴く　井上一二

星空に星が動くと爆音である　松岡蒼児

〈この年〉
硫黄島の日本軍全滅。米軍、沖縄に上陸。
ドイツ軍、連合軍へ無条件降伏（五月）。ムッソリーニ処刑、ヒットラー自殺する。
東京大空襲、都区内の大半焼失。
広島に原爆投下（八月六日）。
ソ連、対日参戦。
長崎に原爆投下（八月九日）。
日本、ポツダム宣言を受諾し、連合軍に対し無条件降伏。天皇の無条件降伏放送（八月十五日）。
島木健作没（43歳・小説家）。
マッカーサー連合軍総司令官、厚木飛行場に到着。
ラジオ放送を娯楽本位に切り替え。
二科会再建。行動美術創立。
「新潮」、「文芸」、「人民評論」、「民主評論」創刊。
マッカーサー、憲法改正示唆。男女同権や労働者の団結権・教育の自由化・経済民主化の改革を指令。
民主主義文学運動高まる。
ユネスコ発足。
日米会話出版物ベストセラーになる。
「お山の杉の子」の歌流行。

こときれし子をそばに、木も家もなく明けてくる　松尾　あつゆき
炎天、子のいまはの水をさがしにゆく　〃
ほのほ、兄をなかによりそうて火になる　〃
なにもかもなくした手に四まいの爆死証明　〃
眼、この眼で見たと主張している　池原　魚眠洞
日に日に雪のよごれまちの空の青空がちな　大越　吾亦紅
なみだふきながらくがきしている　平松　星童
れつれつとふるゆきのあはあはとふるゆきとなって、つもる　〃　伊東　俊二
豪華なさびしさ山が咲いている　秋山　秋紅蓼
山が雪を着て正月の子供着ぶくれ　〃

○**層雲記要**
一月、井泉水「俳句日本」に「新連句提唱」を執筆、この年復刻（六月号）秋季号、冬季号の三冊発行。冬季号に松尾敦之「原子ばくだんの跡」掲載。
三月、層雲の経営機関として大雲社設立。四月業務開始。
六月、「層雲」再建第一号を第三十四巻第一号として発行。
井泉水「再建最初のページに」。
『層雲第十九句集』刊。
十二月、『層雲第十八句集』（再刻）刊。

○**同人動静**
一月、「鳩」再刊（編集・巣山鳴雨）。
四月、鈴木鯖郎没（41歳）。
九月、原蝦煎子没（69歳）。
一石路ら「俳句人連盟」設立。

○**その他**
桑原武夫、第二芸術論発表。
井泉水、四月に塩尻、松本、長野、富山、芦原温泉。
六月に東北各地。
九月に羽後と越後へ旅する。
井泉水著作。『春蘇る』、『私の綴り方』、句集『千里行』、『京洛春秋』、句集『金砂子』、『青葉若葉』、『柿

焼けたところも焼けないところも天の川南北　堀　英之助

眼も口ももう、私をかこみみんないるといふ　鈴木蜻郎

なんと斯んな世の中となって恋猫とたん屋根ぺこんぺこん通る　飯尾青城子

雪から桐が一本ハッキリとおのれを知る　池田詩外楼

焼跡を掘りおこす鍬こそは焼残り　北田千秋子

山茶花、もう戦争のない藁打つ音であり　木戸夢郎

無礼なる妻よ毎日馬鹿げたものを食わしむ　橋本夢道

でんきが来てくれないすこし酔った蝋燭とするめのあし　筒井茎吉

骨壷のおもみいだき膝におきさうして、おる　岡野宵火

雪の日の妊婦手帳をもって貰うてきた一握りほどの米　三好米子

と桃』、『芭蕉随想』、『標註芭蕉選集』、『向井去来』。

〈この年〉
天皇、神格否定宣言。
日本ジャーナリスト連盟結成。
「中央公論」「改造」復刊。
「世界」「人間」「近代文学」等創刊。
中田薫ら戦後初の文化勲章受賞。
第一次農地改革実施。
第一回日本美術展（日展）開催。
児童文学者協会設立。
「新日本文学」創刊。
プロ野球、メーデー復活。
極東軍事裁判開廷（五月三日）。
三浦環没（63歳・声楽）。
「思想の科学」「暮しの手帖」創刊。
中国、国民政府と中共の内戦開始。
坂口安吾「白痴」発表。
全国的に食料危機。
戦後初の全国中等学校野球大会。
新憲法公布（十一月三日）。
南海大地震、死者千人に。
シートン没。
第一回国民体育大会。
当用漢字、新かなづかい閣議決定。
ラジオのど自慢始まる。
「リンゴの唄」流行。

田植のあしあらう水も田へ行く水　荻原井泉水
りすのやうなこどもたちでただもう光のらんはんしゃです　平松星童
あいたいとだけびしょびしょのはがきがいちまい　〃
星がふるやうなまちぼうけ　〃
雨がもる　ちがった音がもる　池原魚眠洞
かみなり岩手境にいって鳴っているすずしい　大越吾亦紅
雪の日はことにしづかにくれるのでけんおん器のふた　瀧山重三
ひさしぶりにゆめにきたつまにいいわすれたこと　松尾あつゆき
月がくもってふと照ってきて、石　近木圭之介
月をかおに別れとうない　〃

○**層雲記要**
二月、層雲第二十句集刊。
五月、「層雲会報」発行。
層雲社を京都市東山区本町、東福寺内に移し、伊東俊二が経営編集にあたる。
六月、夏季号、井泉水「可否の後」。
七月、井泉水層雲に「改巻提言」。
井上三喜夫「水のすがた」。
十一月、層雲俳句大会（上野・国立博物館内応挙館にて）。
一石路講演。層雲賞・平松星童。
冬季号、詩人の菊岡久利「平松星童について」。

○**同人動静**
一月、「火の山」（佐藤竜）創刊。
「木立」（発行人・木戸夢郎）創刊。
四月、住山久二句集『冬扇』刊。
橋本健三詩集『若年』刊。
十二月、加賀谷宏詩集『詩片』刊。
河村花不言没。加賀谷宏没。

○**その他**
井泉水、千葉県、関西に旅。
井泉水著作。『秋晴』、『耳順の書』、『旅人芭蕉抄』、『一茶随想』、『アメリカ紀行』、『死面の蘇生』。

かかしのおどけている故里は今年も豊年満作	堀　英之助
買いたきもの靴蝙蝠傘植物辞典春の日	北田千秋子
月がでて月あかり処女である胸のふくらみ	岡野宵火
ふるい泥鰌やが生きていてどじょうでござい	橋本夢道
てふてふよわたしは集金人です	和田光利
からす寒く鳴く政治がないと鳴くことか	秋山秋紅蓼
窒素と燐酸とあふれる太陽と、てふてふ	伊東俊二
引揚者に春の青空が一枚毛布が一枚	小倉円平
雪がふるふるとんとん徳利で米をつく	柳田流矢
夜の指がさかなのやうにつめたいのも愛情	福永夏木

〈この年〉
新憲法施行（五月）。
詩誌「歴程」復刊。
「現代俳句協会」結成。
八高線で列車事故、死者千余人。
織田作之助没（35歳・小説家）。
日本ペンクラブ再建。
石井桃子「ノンちゃん雲に乗る」発表。
竹山道雄「ビルマの竪琴」発表。
田村泰次郎「肉体の門」発表。
石坂洋次郎「青い山脈」新聞に連載始まる（新聞小説の復活）。
太宰治「斜陽」発表。
民主党結成。
町内隣組を廃止。
第一回参議院選挙。
古橋広之進、水泳四百米自由形に世界新出す。
各帝国大学を国立総合大学と改称。
失業保険法公布。
児童福祉法公布。
横光利一没（50歳・小説家）。
「戦争と平和」（山本薩夫監督）上映。
フォード没。

ででむし今日は今日の処におる	荻原井泉水	
戦争放棄のやま川もみぢし花よりも濃き	大越吾亦紅	
染色体がそまっている冬の光の集積をのぞく	船木月々虹	
ほんとうのふゆがきたあかんぼうがやわらかい	平松星童	
もぐらつきよはてもなくほってゆく泣きながら	〃	
孤独の河童の月の出た顔である	近木圭之介	
ちらほら桜さき出ずれば河童にて候	〃	
露店の秋日にさんらんと勲章、の値段	吉田六郎	
満場一致スト突入風の中枯木のように手をあげたところ	北田千秋子	
ほんとのきもちにふれた思いを冷えたさかづきをもつ	瀧山重三	

○層雲記要

二月、（一、二月号合併）大山澄太「山頭火の正月」。橋本健三「ふりかえらない山頭火」。三月、秋山秋紅蓼「巴水楼氏の思い出」。四月、井泉水「影」。井上三喜夫「観照の世界」。六月、伊勢傳一「官能的俳句」。井上三喜夫「層雲の問題」。七月、秋山秋紅蓼「崩壊しつつある定型」で口語俳句運動に触れる。八月、井手逸郎「自画像時代」で、井泉水、星童、圭之介のでむし、もぐら、かっぱ連作句を話題。九月、秋山秋紅蓼「形式と内容」。岡野宵火「瀧山重三回想」。井上三喜夫「自由律俳句雑記」。十一月、井泉水「自由ということ」。井出逸郎「千秋子」。層雲俳句大会（東京・芝）。層雲賞・北田千秋子、（故）瀧山重三。井泉水賞・船木月々虹。十二月、井泉水「層雲の筋について」。三号連載。伊勢傳一「月々虹の光」。大越吾亦紅「船木月々虹」。

○同人動静

一月、古林巴水楼没（66歳）。栗林農夫『俳句芸術論』刊。

滅多には握る日もなく握ればかたき妻の手　橋本夢道

青い雨青田十二万石に音たててきた　木村緑平

みずうみ、うごかない凧がおる　池原魚眠洞

豆のつるとつるがふれ合って翌を約束する　秋山秋紅蓼

そろばん素直さ正直さ机に暑き日さしより　財馬呵歩

石ころずんずん体温をなくしてゆく、星　福永夏木

目撃者一疋の蠅が出てゆく　芹田鳳車

考えて考えぬいた空がからっぽ　木戸夢郎

おろかものおろかにいきてどんこをあいす　近藤益雄

人間芦である、考えて考えて冬になる　飯尾青城子

三月、瀧山重三没（32歳）。
五月、中島棹郎没（58歳）。
六月、巴水楼句集『うめもどき』。
七月、「河童」創刊（編集人岡野義男、発行人伊東俊二）。
　降矢百峰篇『やまめ句集』。
十二月、小松崎翔陽没（50歳）。

○その他
井泉水著作。『芭蕉随筆　春は曙』、『ごまみそばなし』。

〈この年〉
帝銀毒殺事件。
ガンジー暗殺される。
福井地方大地震、死者三千七百余人。
うたごえ運動始まる。
大岡昇平「俘虜記」発表。
菊池寛没（61歳・小説家）。
新制高校・新制大学発足。
大仏次郎「帰郷」連載（毎日新聞）。
太宰治入水自殺（40歳・小説家）。
大韓民国成立。
朝鮮民主主義人民共和国成立。
太宰治「人間失格」発表。
野上弥生子『迷路』第一部刊。
東条英機ら戦犯七名絞首刑執行。
映画「酔いどれ天使」（黒澤明監督）上映。「東京ブギウギ」大流行。

仰いで星空一枚の星座表となっている秋	大越	吾亦紅
木の葉と木の葉そして街頭の赤い羽根	内島	北朗
からすと昼月とこの国の子供愛にうえる	近木	圭之介
大寒、かぜの中まぎれなく鉄うつ音のする	〃	
突然蓬髪を見せ老いた彼は夏帽をぬぐ	秋山	秋紅蓼
石ころずんずん体温をなくしてゆく、星	福永	夏木
麦に土かける妻へあらい言葉で投げる愛情	財馬	呵歩
わがぶりきたたく音の大いなる音のして春の雪ふりつむ	三好	草一
蝙蝠、あの顔は知っている	財馬	呵歩
おろかなれば思うこと多し冬は、からすよ	井上	阿弥坊

○層雲記要

一月、種田山頭火遺稿「ぐうだら手記」。
二月、秋紅蓼「原因的と結果的と」。岡野宵火「進歩的と称するもの」。
三月、秋山秋紅蓼「長律と短律の問題」。井上三喜夫「余りに俳句的なものについて」。
四月、『層雲第二十一句集』刊。筒井莖吉「呵歩への観察」。秋山秋紅蓼「財馬呵歩の勘と実直」。
五月、層雲春季俳句大会（京都・二条城）。層雲賞・三好草一。井泉水賞・財馬呵歩。井泉水、病気のため欠席。
六月、筒井莖吉「変転する草一」。
八月、層雲裸木特集。
十月、『新俳句入門』刊。
十一月、山頭火特集。黎々火、北朗、詩外楼、銀汀、緑平等執筆。層雲秋季俳句大会（東京・芝）層雲賞・福永夏木。
十二月、池田詩外楼「夏木素描」。

○同人動静

四月、瀧山重三句集『行く雁』刊。
六月、内島北朗『泥中雑記』刊。
七月、井泉水の重六を記念して層雲の一部同人の発起で「瓦の会」を発起。
八月、裸木十七回忌句会（京都嵯峨

工員の一人が弁証法をよんでいるのも夏の日暑し　北田千秋子
海、木の葉のようなかにが風をきいている　平松星童
お正月がくるおやこ三人にわとり一羽ふつうのくらし　池田詩外楼
故郷に来ると蚊柱や母と妹と不和でいる　橋本夢道
やなぎわた飛んでおもの川とおく魚苗をはなつ　藤沢せい二
丸い電球の中に電気が来て涼しく光っておる夏　船木月々虹
はいつくばって水のんできてはたらく　関口父草
ふるさとは月がえんがわにいますはは　牧山牧句人
炎天、顔出しとるのがどんこか　飯尾青城子
老いてこそ、火のいろにある愛情　堀英之助

野天龍寺）。
十月、大山澄太『俳人山頭火』刊。
十二月、栗林農夫『時代のままっこ――小林一茶』刊。

○その他
井泉水、関西・甲州・信州・九州に旅。
井泉水著作。定本一茶全集第一巻『おらが春其他』、『鮎』、『新俳句入門』、『俳句に入る道』、『芭蕉名句鑑賞』。

〈この年〉
国宝法隆寺金堂の壁画消失。
木下順二「夕鶴」発表。
一ドル三百六十円の単一レート。
北大西洋条約（NATO）調印。
中国、毛沢東、中華人民共和国成立。
永井隆『この子を残して』刊。
井伏鱒二「本日休診」発表。
ソ連引揚第一船、舞鶴港へ入港。
下山事件・三鷹事件・松川事件起る。
キティ台風で関東地方大被害。
「きけわだつみの声」刊。
湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞。
ベルギーの文学者メーテルリンク、ドイツの音楽家シュトラウス没。
美空ひばり「悲しき口笛」大流行。

えっくすわいの解けてゆく数理のうつくしさ白いチョーク	大越吾亦紅
かまどもえさかり重態のままの病人	池原魚眠洞
木の葉のような年より公園の木の葉を掃く	吉澤稲市
河原に人が遊びに来る紫外線とねこやなぎ	〃
今夜こんなにおもしろく煮える湯豆腐の鍋	秋山秋紅蓼
寺の白壁の暮れおそいそこまできっちり水田	堀英之助
海が一匹の蟹の死をうちあげている朝	福永夏木
風が遊動円木にあそんでいるすいへいせん	日向野秀策
青葉の中に少女腕の時計を直す	内島北朗
はしごが届かない秋の空	木戸夢郎

○層雲記要

一月、秋山秋紅蓼「俳句内容の拡充と形式」。

二月、親井牽牛花「新短律の覚え書」。

四月、井泉水「一匹のばったの話」、一二篇「放哉書簡」、健三録「放哉未発表書簡」、その他、放哉特集号。層雲春季大会（大阪・四天王寺）。

五月、大竹大三「尾崎放哉論」。

六月、井泉水重六記念号。

七月、伊沢元美「俳句の性格についてのノート」、井上三喜夫「みずからの世界について」。

八月、永田東一郎「尾崎放哉を偲ぶ」（連載始める）。

九月、中原成之良「短律此君楼論」、親井牽牛花「新しい詩にまなぶもの」。

十月、層雲秋季大会（日本橋・室町）。層雲賞・吉澤稲市、藤澤せい二。

同日、井泉水重六祝賀晩餐会。

十一月、城雨郎、木天蓼、吉澤稲市について執筆。

十二月、大三、傳一、魚眠洞等藤澤せい二について執筆。

○同人動静

七月、此君楼句集『続句集此君楼』。東京、横浜、鎌倉等の同人で四十年ぶり帰国の秦是道歓迎句会。

月がよるどこかで硝子がこわれる　芹田鳳車
夢を朝、まとめてみようとする　池田詩外楼
春、たんぽぽから生まれたような女の子がおじぎする　船木月々虹
社会党大会がもめる新聞のうらでさくらがまんかい　藤澤せい二
降りに降る雪の激情　小谷信夫
少年ひそかに姉を美しと思う春夕べの星や　三好草一
歌笑が死んだ歌笑の写真が笑っている　財馬呵歩
月の美しいからだを売る　近木圭之介
はつ夏、岬の町は屋根に水平線を置く　江良碧松
なみだが洗い清めてくれた星が一ぱい　菅崎道雄

十月、木村緑平句集『すずめ』刊。

○その他

井泉水、関西に旅行。
朝日新聞の特別記者として日米対抗水泳大会を見る。同紙に「水のはやぶさ」を執筆（二百メートル自由形で古橋優勝）。
井泉水著作。定本一茶全集第三巻『七番日記上』。

〈この年〉

千円札発行。
トルーマン米大統領水爆製造を指令。
満年令の数え方実施。
「芸術新潮」創刊。
社会党書記長に浅沼稲次郎。
朝鮮戦争始まる。
吉川英治「新平家物語」連載開始。
獅子文六「自由学校」を発表。
田宮虎彦「絵本」発表。
伊藤整訳「チャタレイ夫人の恋人」ワイセツ文書として発禁。
和辻哲郎『鎖国』刊。
国家警察予備隊創設。
高村光太郎『典型』刊。
金閣寺放火で全焼。
ジェーン台風、関西地方に被害。

新しい思想がはいってきたらしい本屋の本だなの秋　大越吾亦紅
ここに一個のリンゴがある永遠と瞬間　橋本健三
国家と個人とそして私の家庭と冬　〃
大きな石もって来て空そのおきどころ　木戸夢郎
考えぬいて空が降って来た　〃
すずめかなしいようにあしおとさせないであるく　秋山秋紅蓼
原爆を耐えた立体と人間生きて蟻のように働く　井上有紀男
二羽いてふたつ産むのでふたりぐらし　池田詩外楼
窯のなか火のはじく音のふぶき一日　内島北朗
風のはげしい深夜の梢が折れまいとする、音　親井牽牛花

○**層雲記要**
一月、藤澤せい二「貧も麗し」、水田潤「俳句創作の可能性」。
三月、層雲社京都から鎌倉に移る。
四月、この号より編集・運営すべて井泉水で行う。池原魚眠洞「一作一律抄」連載開始。
五月、大竹大三「橋本健三論」、伊澤元美「国語使用と俳句」。
層雲春季大会（名古屋・覺王山寺）。
層雲賞・橋本健三。井泉水賞・木戸夢郎。
六月、内島北朗「夢郎を語る」、秋山秋紅蓼「橋本健三の詩性」。
七月、井泉水「美ということ」、「前田夕暮君逝く」。
八月、「最近の傾向を語る」座談会（次号にもある）。
十月、層雲秋季大会（東京日本橋）。
層雲文化賞・芹田鳳車、秋山秋紅蓼。
十一月、井泉水「一本の道」、大竹大三「芹田鳳車論」。
『層雲第二十二句集』刊。
十二月、井泉水「ついの栖」、伊澤元美「秋山秋紅蓼論」。

○**同人動静**
三月、木戸夢郎『天青帖』刊。秋山秋紅蓼「俳句往来」に自由律俳句

秋の日風呂場の軽石が円う乾いとる　小谷信夫

消夏法の一つとしてするどく一丁のメスをとぐ　船木月々虹

雪に風の加わる速度と密度とふりしきる　牧山牧句人

港町の雨にいて湿った煙草など吸おう　近木圭之介

ある夜ひそかに月光木の肌女体のごとし　井上一二

まつかさそっくり火になる美しい時間をもつ　中原紫童

つきよ町のさくらに灯し町を愛する人人あるく　岡栄一

鰯おこしとどろき手をふところに漁師ゆきます　高橋良太郎

暑さが糸へん金へんと慌しく秋の暑さになる　束松八洲雄

わかれとは船の汽笛が大きすぎる　岡野宵火

小史」発表。

四月、『秋刀魚』（発行人・木村飛泉子）創刊。秋山秋紅蓼「新日本俳句」に「俳句四格調の説」発表。

五月、井手逸郎『子規』刊。小林不味鳴句集『こだま』刊。

六月、『連山』（編集兼発行人・伊東俊二）創刊。

九月、層雲四国大会（松山市）。

十月、秋山秋紅蓼歓迎群峰社句会（富山市）。

十一月、池原魚眠洞、愛知県から教育功労者として顕彰される。

十二月、大竹大三、『俳句四格調の説』批判』発表。

栗林農夫『俳句と生活』刊。

岡野宵火没（36歳）。

〈この年〉

宮本百合子没（52歳・小説家）。

無着成恭『山びこ学校』刊。

三原山大爆発。

横浜桜木町で国電火災（焼死百五人）。

林芙美子没（46歳・小説家）。

「羅生門」（黒澤明監督）ベニス国際映画祭で大賞受賞。

峠三吉『原爆詩集』刊。

アンドレ・ジード没。

「ヤットン節、リンゴ追分」流行。

神は冬をつくりたもう一本の枯草	船木	月々虹
ひとの喜びを悦び村に老い残っている人達	〃	
炎天、赤いポストにかげふかい口がある	藤野	番紅花
春の静かな山の七まがりで耳の長い兎と出あう	佐々木	石々
笑ってわらって涙が出るほど笑ったあとのみかん	池原	魚眠洞
なんと赤ン坊の掌が手相もっている	〃	
壁、何も思わず居る時の我影をおく	芹田	鳳車
東京の富士が三角、チンドン屋青い服で首ふる	秋山	秋紅蓼
夏は階段教室の光線と一匹の蚯蚓が皿の上にある	岡崎	城雨郎
幕があくと春の山しばらくの空虚にうぐいすを聞かせる	池田	詩外楼

○層雲記要

一月、井泉水「愛・理解・表現」、井上三喜夫「鳳車・秋紅蓼をめぐりて」。

四月、井泉水「徳と得」、柳田泉「兄流矢について」、大山澄太「山頭火の出家に就いて」。

五月、層雲春季大会（浜松市）。層雲壽老賞・杉田作郎。層雲賞・家木鉉十郎。井泉水賞・藤野番紅花。『層雲第二十三句集』刊。（三、四、五月40音以上の長律句載る）。

六月、大竹大三「藤野番紅花論」。

七月、斎藤清衛「自由律と自由の意味」。井泉水「自由律のさまざま性」。

八月、井泉水「灰斗のことども」。「福岡灰斗を悼む」（吾亦紅・石々）。

九月、井泉水「入門俳話」連載開始。

十月、井泉水「順ということ」連載。秋山秋紅蓼「第二十三句集を読む」。

十一月、大竹大三「佐々木石々論」。諸家「アンケート（回答）」連載開始。層雲秋季大会（日本橋・室町）。層雲文化賞・大越吾亦紅。井泉水賞・佐々木石々。

○同人動静

二月、柳田流矢没（76歳）。

四月、山頭火句集『草木塔』刊。尾崎放哉及び層雲物故者の追悼

猫は尾ッぽまで返事している秋の風吹く　内島北朗
通夜の明けた顔洗う水がながれている　金井三良
汽船が一つ黒い手袋から出て航く　近木圭之介
山羊は一日草を食べ続け飼主の思想などおかまいなし　唐沢柳三
雲、雲、すべての雲が動き出して今日の日の出る　小谷信夫
工場閉鎖と貼り紙して月夜の寒い葱畑である　束松八洲雄
雪の純情、大阪をちょっと白くしただけで消えてしまう　牧山牧句人
寒さ火吹竹で吹く　関口父草
赤いポストの、はつこい　吉浦俊雄
月からきた男を入れるかんぬき　矢内花子

句会（京都・建仁寺内久昌院）。
七月、伊澤元美「馬酔木」に「所謂自由律俳句についての一考察」、「鹿火屋」に「進んできた俳句の道」連載開始。
福岡灰斗没（60歳）。
十月、井泉水を迎え「山頭火十三回忌」（松山）。
山頭火『あの山越えて』刊。
和田光利句集『痩身』刊。

○その他
井泉水、放哉追悼句会に出席。
九州地方へ旅行。（博多でKRBより放送。佐賀県庁で講演）。
高松、松山を旅行。（愛媛大学で「山頭火と一草庵」の講演）。

〈この年〉
武田泰淳「風媒花」発表。
野間宏『真空地帯』刊。
久米正雄没（60歳）。
十勝沖地震（三月）。
日航機もく星号、三原山で遭難。
鳥取市大火（消失家屋約五千）。
破防法実施。
メーデー流血事件（皇居前広場）。
土井晩翠没（80歳・詩人）。
中山晋平没（65歳・作曲家）。

かっと一個の落日である冬がれ　秋山秋紅蓼
春遅い貨物列車の箱の数のもの憂さ　芹田鳳車
古くぎたたきのばしている好い日好い友の来る　内島北朗
ちょっくら休んで汗ふいてぽつぽつゆきやしょ　関口父草
ぜんまい綿着て山奥である　佐々木石々
蝶々や年に一度のお墓への道　木戸夢郎
ひっくり返っている下駄を直し医者を迎える　佐藤康治
まだ時間が時計にある椅子　近木圭之介
コップ二つの等しい液体　〃
すずしくコップの氷のかち合う人生かなしいこと多き　三好草一

○**層雲紀要**
一月、井泉水「歴史を知ること」、内島北朗「層雲百人一句」連載開始。
四月、井泉水「所思」連載開始。
五月、岡崎城雨郎「小谷信夫さんの横顔」。井泉水「入門俳話」。
層雲春季大会（京都嵐山・天竜寺）。井泉水賞・小谷信夫。
七月、岡栄一「アンケートの集計について」（次号にも掲載）。
九月、井泉水「作品か人間か」。
十一月、『層雲第二十四句集』刊。
井泉水「俳句の一つの道」。
大竹大三「高橋良太郎論」。
層雲秋季大会（日本橋・室町）。層雲賞・関口父草。井泉水賞・高橋良太郎。席上討論で魚眠洞が「俳句性解明」を提言。
同会場で井泉水の古希祝賀晩餐会。
十二月、井泉水「俳句のもう一つの道」。

○**同人動静**
六月、種田山頭火『愚を守る』改刷）。
七月、岡野宵火句集『赤光』刊。井上三喜夫句文集『そんな日のこども』刊。
八月、高橋一詢等編『碧梧桐』刊。栗林農夫『ヤロビの谷間』刊。
十月、俳誌「短律」創刊号（編集兼

蜜蜂そのからだそのままの光になって飛んでゆく　藤野番紅花
たねがふくろに、冬　唐澤柳三
ねえやに縁談があったりこのごろ餅はまだ水に残っている　小谷信夫
からすみんなじっとしておれない大夕焼です　家木松郎
静けさ山に来て村の雑音を聞く　江良碧松
青葉青くピアノに映り雲のむくむく湧くような曲　岡崎城雨郎
雪、教会の窓が果物のように明るくなる　尾形夫知郎
汽車が力学通りに人を轢いてしまった、霜　浄心寺良惇
春の月は大きく山の上に暫くは静止している　船木月々虹
数万の職工が退けどきの、落日の重量　吉田六郎

発行人・中原成之良）。津村木洋遺稿『わが一つの灯』刊。『本江木雨句集』。「松」再刊（編集兼発行人・内田六郎）。『窓』発行（発行人、酒井仙酔楼）。十二月、安斎櫻魂子没（68歳）。

○その他

井泉水、第一回「楽三会」を鎌倉長寿寺で催す。越後へ旅行。第五十九回神宮式年遷宮に奉仕（里見惇・川端龍子・伊東深水・児玉希望・宮本三郎ら）衛士として近侍。井泉水著作。『俳句の道』『芭蕉と一茶』『正岡子規』。

〈この年〉

丸木位里・俊子「原爆の図」。「ひめゆりの塔」映画（今井正監督）NHKテレビ放送開始。斎藤茂吉没（70歳・歌人）。国立大学に新制大学院設置。ボストンマラソンで山田敬蔵優勝。阿蘇山爆発（修学旅行生ら死傷）。坂東妻三郎没（51歳・俳優）。折口信夫（釈迢空）没（66歳）。「雨月物語」ベニス映画祭で最優秀賞。スターリン没。芸者ワルツ流行。

右に左に田へ行く水の音たてて行く	荻原井泉水	
霧の夜の一個のりんごと船の笛の色々な音階	吉田六郎	
打たれようとして蠅が身がまえる	池原魚眠洞	
山の桜は谷へ散り今もふるさとである	秋山秋紅蓼	
少女とナイフと林檎がくるくる赤い帯ほどいてゆく	岡崎城雨郎	
運河の水はのろのろ流れ葬式の花が橋を渡ってゆく	〃	
終戦九年の金魚屋がゆく保安隊がゆく	内島北朗	
旅の一人に町の川いそぎ流れる	近木圭之介	
そこだけネオンのいろになってふる雪の純情	藤野番紅花	
標本函、死はうつくしき蝶として	家木松郎	

○層雲紀要

二月、井泉水「和敬清寂の説」。安斎櫻魂子「みちのくの早春の味」。三月、井泉水「俳人同士というもの」。四月、井泉水「花を作るが如く」。岡崎城雨郎「吉田六郎の句に就いて」。（長律句賛否の応酬あり）。五月、層雲春季大会（兵庫県・祥福寺）。層雲物故誌友供養。層雲賞・吉田六郎。井泉水賞・大山澄太。七月、井泉水「珠の圓きが如く」。井関冬人「長律と短律に就いて」。八月、諸家「鳳車追悼」連載開始。九月、井泉水「享受する心」。十月、層雲秋季大会（東京・日本橋）。層雲賞・日向野秀策、佐藤康治。層雲文化賞・内島北朗。十一月、伊澤元美「庶民生活の風景」。十二月、岡栄一「鳳車初期の作品」。大竹大三「日向野秀策論」。

○同人動静

一月、青木此君楼句集『柊花』刊。「早春」第十号発行。二月、吉田猪五郎歌集『流揺抄』刊。四月、小林不味鳴句集『麦笛』刊。六月、芹田鳳車没（70歳）。七月、小林不味鳴『下山逸蒼の生涯と其の芸術』刊。

この世とかの世のへだたり果てしこんや月照る	関口父草
死を電報にして字のかず	岡栄一
秋はもう公園の椅子の性格が変ってきておる	船木月々虹
一っぱいの水をのみ心があたたまっているばん	中谷みさを
数学がきれいにとけていて少年らしい幸福	日向野秀策
淋しさは星との距離　ガラスは透明である	唐澤柳三
病めば夜は静かに地球が回ると思ったりする	大越吾亦紅
灯にくらくいて世にうときものの蕗をむくくらし	金井三良
へそがあって此の夏も無事でいる	佐藤康治
母が達者でいてくれる候文	山本秋光

細谷野蕗句集『雑音に遠く』刊。
八月、勝呂和三郎『一つの窓』刊。
橋本夢道句集『無礼なる妻』刊。
芹田鳳車追悼句会（横浜）。
九月、内島北朗『壷中随筆』刊。
関口江畔没（90歳）。
十月、大山澄太『忘れ得ぬ人々』刊。

○その他

井泉水、「奥の細道を尋ねて」NHK第一放送で放送。
井泉水著作。『俳句案内』。『日日好日』。

〈この年〉

岸田国士没（63歳・小説家）。
ビキニ水爆実験で第五福竜丸被災。
犬養法相指揮権を発動。
伊藤整『女性に関する十二章』ベストセラー。新書判時代の先がけ。「地獄門」カンヌ映画祭で大賞。
広津和郎「真実を阻むもの、松川控訴審判決を検討す」中央公論に連載。
三島由紀夫『潮騒』刊。
「原爆の子」国際映画祭で平和賞。
陸・海・空自衛隊発足。
ビキニ被災者久保山愛吉没（40歳）。
洞爺丸台風十五号で転覆（遭難者千四百四十名）。
プロレス、マンボ等流行。

いわおにじを吐く　荻原井泉水
街は俄にかげり来てアドバルーンのけわしい皺　秋山秋紅蓼
からす気のない鳴き方をして土用が曇っている町の中の木　池原魚眠洞
書くこと一枚のハガキに足りている友情　日向野秀策
自画像の顔の不機嫌をまたぬる　近木圭之介
月が明るく暗い指で鳴らす楽器　〃
水が落合ってはげしく抱合ってゆく青い激情　岡崎城雨郎
鮭が瑪瑙のような卵うむとき月に金色の波が立つ　佐々木石々
一個の静物として髑髏の正しき歯並び秋の日　三枝重峰
石になっておわすちちははをあらう　善方牛臥城

○層雲紀要
一月、井泉水「三十にして立つ」。
二月、井泉水「弓を学んだ事」。
三月、井泉水「矢を射るこころ」。
層雲会理事九十二名決定。層雲会発足。
『層雲第二十五句集』刊。
五月、この号「層雲」五百号記念号。付録に唐澤柳三編「層雲年表」掲載。
層雲会叢書として『層雲の道』（井泉水著）刊。
層雲春季大会（名古屋市）。
七月、井泉水「日本詩歌の『型』というもの」。
八月、逸郎「鳳車研究その一」。
十月、井泉水「身につけること」、吉澤稲市「二つの作品に近づいて」。
五百号記念層雲秋季大会（鶴見総持寺にて）。層雲故人文化賞・朱鱗洞、放哉、裸木、山頭火。層雲五百号記念色紙短冊展（日本橋・白木屋）。
十一月、井泉水「律するということ」。
十二月、井泉水「ジャンルということ」。（型の上のジャンルとして自由律を考えるべきではない）。

○同人動静
一月、飯尾青城子没（62歳）。
三月、山田梅軒句集『富士と共に』刊。

夢のなかで叱ってくれる父でしかない	関口父草
秋はもう公園の椅子の性格が変ってきておる	船木月々虹
なんと都会の真ン中の川に月が捨ててある	松田一男
冬並木は銅版画風な景色人が犬つれて歩く	井上有紀男
朝霧、海が近い駅の新聞を買う	小谷信夫
つくつくぼうしつくつくぼうしと金ほしく	池田詩外楼
月光隈なくびんぼうはてなし	〃
星空の星はうごくもの少年夜学へ行く	東松八洲雄
雪となるらしい空で井戸の底には水がある	天沼棗人
海がけろりと朝	山本秋光

九月、大山澄太『山頭火の生涯』刊。
十月、関口父草編『江畔遺稿』刊。
十一月、松田一男『窓の会作品一輯』刊。
十二月、松の会句集『芝生』刊。

○その他

井泉水、七十二歳の春を祝う。
元旦NHK「正月の思い出」放送。
新潮社『一時間文庫』の「奥の細道ノート」書き下ろし執筆。
東京昭和女子大学教授となる。
浜松、名古屋、伊勢、京都に旅。
井泉水著作。『奥の細道ノート』、『随筆芭蕉』全七巻刊行始まる。
『層雲の道』、『流水の書』。

〈この年〉

坂口安吾没（48歳・小説家）。
『世界百科事典』（平凡社）刊行始まる。
国鉄宇高連絡船紫雲丸衝突沈没。
鈴木信太郎ら一陽会創立。
武田泰淳「森と湖のまつり」発表。
第一回原水爆禁止大会。
安井曾太郎没（67歳・画家）。
全米テニスのダブルス選手権大会で賀茂・宮城組優勝。
アインシュタイン没。

星が水を離れて消えて行き大きな朝　三枝重峰
枯木にからだよせているのがかくれんぼ　池原魚眠洞
幸福なハンカチ振ったのだがそれからのすこしさびし　日向野秀策
家にいつかぬ女とおもい畳の上の鶏の糞ぬぐう　佐々木石々
地球儀に日本がありこの頃雁渡る空の藍　大越吾亦紅
落葉と屑屋さんの財布の紐の長さよ　浄心寺良惇
われ一口犬一口のパンがおいしい　荻原井泉水
喝采、といったふうに散るこんじきの葉と子供達　小谷信夫
木の葉さわがしくて夢はよる来る　近木圭之介
君と僕の思想は合う事がないままの春の白雲　東松八洲雄

○**層雲紀要**
一月、井泉水「自由律俳句という言葉」、逸郎「鳳車研究その六」。三月、井泉水「道は狭くとも門は広く」で「詩」を意図しての門を広げる。四月、春季大会。層雲賞、三枝重峰。五月、井泉水「リズムから見た短歌と俳句」、大竹大三「三枝重峰論」。七月、井泉水「俳句の骨格的構成」。八月、裸木23回忌特集号。西義一、北朗、秋紅蓼、魚眠洞の文。十月、秋紅蓼「岡栄一論」戦前・戦後の句。吉澤稲市「良惇展望」。層雲秋季大会。層雲賞、青山良淳。井泉水賞、岡栄一、東松八洲雄。『層雲第二十六句集』刊。十一月、北朗「東松八州雄を語る」。十二月、逸郎（池田詩外楼を憶う）。

○**同人動静**
二月、尾崎放哉『大空』再版。三月、福岡灰斗句集『北斗』刊。四月、見田宙夢句集『椰子と白雲』刊。五月、伊澤元美『現代俳句の流れ』刊。六月、井手逸郎、青木此君楼『俳人此君楼』刊。八月、佐々木石々句集『竹とんぼ』刊。池田詩外楼没（68歳）。

ただごとの如くここに底みせて米櫃なり　池田詩外楼

炎天、蟻のように歩いて人間戦争をする　藤野番紅花

高度に機械が動いて夏空美しい無防備都市　船木月々虹

機械につかわれている人間めしくうひと時　内島北朗

雲が丘を雪が街をそして風は旗を知っている　家木松郎

冬木負けた国の烏がないている　佐々木露路

親子で頼みにきて親の傘にはいって帰る　松田一男

義足で東京はどこへ行っても階段のある秋　矢内樹一

東京の空からきらきらと白く散布するものの意見　秋山秋紅蓼

鶏がわたしにくれた一つ玉子の養生　酒井仙酔楼

九月、高橋良太郎句集『月夜の螢』刊。
十一月、井手逸郎『高橋良太郎人と作品』刊。
故池田詩外楼追悼句会（神戸・楠木会主催）。

○その他

井泉水亡母三十三回忌。
個人誌『随』改めて創刊。
二月六日より三日間ＮＨＫ「趣味の手帖」で「俳談明治時代」放送。
『随』六月号に「一茶年代記」、八月号に「一茶遺墨名品抄」を記載。
『随筆一茶』刊行開始。
一茶百三十回忌全国俳句大会で選者となる。
金子兜太「俳句研究」に造形俳句論展開。俳壇に前衛俳句出現。

〈この年〉

「週刊新潮」創刊（週刊誌ブーム）。
石原慎太郎『太陽の季節』ベストセラーになり、太陽族の名生む。
高村光太郎没（72歳・彫刻家、詩人）。
棟方志功の版画、ベニス・ビエンナーレ展で大賞。
溝口健二没（58歳・映画監督）。
深沢七郎「楢山節考」発表。
谷崎潤一郎「鍵」発表。

青梅、朝、石を打つ	荻原井泉水
花一輪の一律	山本秋光
松老いて冬日にもつ影の伝説	池原魚眠洞
雨にゆれて花びら心もち発熱する	家木松郎
秋の日はばけつの中までどじょっこふなっこ	日向野秀策
貧乏話もわらって美しく稲を刈りては男にまさる	佐々木石々
月が静かにさしよればフラスコにある球面	船木月々虹
自画像を少し笑わせておく	〃
夜汽車が直線の時間を走る	近木圭之介
巌とて雨す嵐す	善方牛臥城

○層雲紀要

一月、井手逸郎「石々断片」、この号投稿規定改訂発表。

二月、井泉水、「芸術の行動性について」。

三月、井泉水「広場、道―求心、散心」、井手逸郎「鎮魂歌」。城雨郎評。

四月、井手逸郎「萩白し」（裸木研究）。

五月、井泉水「自由律という俳句とその性格」、井手逸郎「うたかたの」（裸木研究八月まで掲載）。春季大会。層雲賞、故岡崎城雨郎、井手逸郎。井泉水賞、山本木天蓼。

六月、井泉水「層雲に於ける自由の精神と自由律」。

七月、井泉水「自由の考え方と自由律の在り方」、内島北朗「菱の実」と「裸木山頭火」。

八月、井泉水「俳句の道としての非俗精神」。

九月、井泉水「非俗精神としての自由律」、井手逸郎「旅ゆく人」（近木圭之介人と作品）。

十月、井泉水「自由律の長さについて」、秋山秋紅蓼「山本秋光論、井手逸郎「魚眠洞研究その一」。秋季大会（東京）。層雲賞、山本秋光。層雲文化賞、池原魚眠洞。『層雲第二十七句集』刊。

十一月、井泉水「自由律俳句のＭＡ

その人に最後のたよりの香典と書く　江良碧松
何万カウントの雨がふろうとも桜満開　大西清風水
けむりがころがる汽車を見ている山の子　内島北朗
石、降らぬ日はくもりつめている　荻原井泉水
酸素熔接の青い光と雪降らぬ日とてなし　大越吾亦紅
ふかいところから根がぬけてきた　青木此君楼
泣くので眼から月がこぼれる　木村緑平
活字拾い集められてこれが詩である箱にいっぱい　三枝重峰
マッチのふく小さな詩を一日のはじめにもつ　佐藤康治
缺けて出て月である、貧乏　牧山牧句人

YA段階」。
十二月、井泉水「N・L・W・E・Aということ」。

○同人動静
三月、松田一男句集『菱の實』刊。
四月、放哉居士三十三回忌として俳句大会（鳥取にて地元同人）。
八月、大西清風水編『海へゆく水』刊。
九月、松の会年刊第二句集『笛』刊。
故里見波哉二十三回忌記念東京句会（浅草・保元寺）。
十月、山本秋光句集『月は知っている』刊。
東松八洲雄句集『車はまわってゆく』刊。

○その他
層雲会を維持機関として層雲社を独立会計に改める（二月）。

〈この年〉
小林古径没（74歳・日本画）。
川合玉堂没（83歳・日本画）。
三島由紀夫『美徳のよろめき』刊。
第一回東京版画ビエンナーレ展。
原田康子『挽歌』ベストセラー。
ソ連、人工衛星打上げ（犬を乗せる）に成功。
トスカニーニ没（90歳・指揮者）。
「有楽町で逢いましょう」流行。

この石、空におく雲を構想する	荻原井泉水	
笑うこともなく真実笑えないくらし	秋山秋紅蓼	
くらしをよくすると云う政治をきいてきてめしくう	〃	
何万ボルトの電線が越えてゆく雑木山一せいに芽ぶく	日向野秀策	
きよほうへんもよし馬に乗り風にふかれてゆく	大越吾亦紅	
あばらやながらも鷹の剥製と菊の二鉢三鉢	佐々木石々	
老い足りての死はしずかなるもののその顔の白き紙	高橋良太郎	
にたりと鬚面で熊をしとめてきた	善方牛臥城	
へそをあらい母を思う	〃	
空、青い運河にするほどに晴れて働く	牧山牧句人	

○層雲紀要

一月、井泉水「画と詩と句について」。井手逸郎「吾亦紅研究ノ一」。四月、井泉水「新短詩提唱」（連載）。瀧井孝作「四十年前の思い出」。井手逸郎「名作順禮その一」。放哉三十三回忌追悼句会。春季大会（京都）。層雲賞、牧山牧句人。松田一男。井泉水賞、酒井仙酔楼。五月、小牧健夫「子規最後の外出」。内藤濯訳「ルナールの言葉」。井手逸郎「放哉三十三回忌」。六月、金田一京助「奥村天酔のこと」。七月、内藤濯訳「ルナールの言葉」。八月、笹澤美明「ドライな詩の話」。逸郎「古城の石垣」（牛臥城論）。九月、井泉水「放哉という男」。十月、逸郎「遍路の笠」。「菅ほす顔」句集評。『層雲第二十八句集』刊。秋季大会（東京）。層雲賞、井上二二、伊藤雪男。井泉水賞、善方牛臥城、金井三良。十一月、井手逸郎「表現の論」（秋紅蓼「俳句表現論」を読みて）。十二月、高橋新吉「回想と空想」。逸郎「雀の言葉を読みて」。逸郎「伊藤雪男論」。

○同人動静

一月、高橋一詢没（59歳）。

理知と抽象の世に静物として林檎は赤し　牧山牧句人
骨をうずめて大いなる山　金井三良
砂に埋めたピストルの青春時代　岡栄一
石にちかずけ石をおく　青木此君楼
烈風の中取材する　伊藤雪男
青空が硝子瓶のなかまではいってきている秋　家木松郎
手を心に重ねる　近木圭之介
月があかるくて電線を通っていることば　東松八洲雄
春が少しあたたかく鼻が顔のまん中　酒井仙酔楼
小さな蝶が来る葬式の外の光の中　佐藤康治

三月、松田一男随筆集『菱の實』刊。
四月、鈴木蜻郎句集『うぐいす』刊。
小豆島南郷庵にて「雲の会」主催放哉居士三十三回忌。同追悼句会。
五月、古屋翠渓句集『流轉』刊。
六月、湯本澄耳句集『蠅たたき』刊。
九月、木村緑平句集『雀の言葉』刊。
十月、秋紅蓼評論集『俳句表現論』刊。井上一二句集『遍路笠』刊。
種田山頭火遺稿『其中日記』巻一刊。唐澤柳三　句集『黒いネクタイ』刊。

○その他
俳壇に前衛俳句、抽象俳句の名称が使用され始める。
放哉、山頭火に関する講演会（京都）に井泉水、澄太、逸郎講演。

〈この年〉
若乃花、横綱となる。
横山大観没（89歳・日本画）。
関門海底国道トンネル開通。
五味川純平『人間の条件』。
新特急「こだま号」運転開始。
一万円札発行。
映画「無法松の一生」ベニス映画祭大賞。
石井柏亭没（76歳・日本画）。
画家ルオー没。

夕焼雲、そこらじゅうが鴉になる　家木松郎
霜のきびしさもよし麦がこぞりて葉緑素を増す　日向野秀策
人の死、山にけむり一すじ置いてかえる　大越吾亦紅
かっと火を吐きひとのどぎもをぬく山め　関口父草
季節の速度梅ひらく　伊藤雪男
雪山火を噴き静まるとき寒し　土屋燕人
朝月、犬を放つ　佐々木露路
水が水を導いてゆく冬　山本秋光
風物としての石の一個　近木圭之介
雪に火の玉となってすずめのけんかだ　高橋良太郎

○層雲紀要

一月、秋山秋紅蓼層雲の編集担当。「層雲会」を解散し、層雲社直属の「層雲維持会」発足（代表・秋紅蓼、会計・伊藤雪男）。斎藤清衛「半世紀回想の中の俳句」。井泉水「新短詩提唱」連載。井手逸郎「名作巡礼」連載。

二月、内山雨海「書と畫」。

三月、北朗「句作余談」。

四月、三喜夫「その中に」。層雲俳句欄を改組。

五月、伊澤元美「抒情の回復」で兜太の造型俳句否定。秋季大会（浜松市）。井泉水賞、内田六郎。

六月、大竹大三「俳句の本質と自由律」。秋紅蓼「雪男の句について」。

七月、橋本健三「短詩型に於ける題名のもつ意味。

九月、「鎌倉だより」で井泉水、俳壇の論争から孤立を宣言。

十一月、大竹大三「俳句の内容について」（現代の句材での表現）。秋季大会（東京）。層雲賞・家木松郎。井泉水賞・秦是道。

『層雲第二十九句集』刊。

十二月、秋紅蓼「俳句一行詩論」。

女の指はことばである萩の枝である　荻原井泉水
石を置いて墓にしている　池原魚眠洞
牛乳一本正しく届いている夜明け　秋山秋紅蓼
硝子にはりついた秋と椅子に日課がある　家木松郎
はたらきつめて日をおとす　金井三良
稲の花八千万石八千万人食える　江良碧松
戦争反対の南瓜が太る　善方牛臥城
花にかくれていた子供が見つかった　松田一男
月光するどく対立するものの壁と壁　木戸夢郎
ポケットに手を星の香気痛いばかり　杉原経夫

○同人動静
四月、放哉句碑除幕式（須磨寺）に内島北朗参列。
五月、黒木紅足馬句集『浪おと』刊。
十月、秦是道句集『漂泊』刊。村尾草樹句文集『波と水仙』刊。種田山頭火『其中日記』巻二刊。

○その他
井泉水芭蕉忌の日から六日間NHK人生読本で「晩年の芭蕉」を放送。
井泉水著作。『おらが春』。

〈この年〉
メートル法実施。
黒部トンネル貫通（1万93m）。
日本原子力委員会創立。
安本末子「にあんちゃん」ベストセラーとなる。
高浜虚子没（85歳・俳人）。
永井荷風没（79歳・小説家）。
国立西洋美術館開館。
女子二百米背泳に田中総子世界新。
山中毅四百米自由形に世界新。
伊勢湾台風で死者・行方不明多数。
井上靖『敦煌』、大江健三郎『われらの時代』、中野重治『梨の花』刊。
キューバ革命。
第一回レコード大賞「黒い花びら」。

石、蝶がいるのは蝶を待っている　荻原井泉水
麦畑の畝の整然と青い拳銃をうつ　牧山牧句人
雪は夜深しアダリンというくすりありけり　家木松郎
月の光と影と心に斜面をもつ　木戸夢郎
ザクロが笑っている一匹のくろねこ　内島北朗
空がからっぽになってしまった青さである　小島元四郎
マッチが青い火を吐いて君とわたしとの空間　秋山秋紅蓼
火の焚口にうずくまり女ものおもうようす　日向野秀策
塩鮭一本提げて豪勢な町をとおり　大越吾亦紅
豪華に咲いて豪雨の中　矢内樹一

○層雲紀要

一月、井上三喜夫「いのちの流れに」、井泉水「新短詩提唱」続、井手逸郎「名作巡礼」続。
二月、伊澤元美「俳句の面白さについて」、井手逸郎「井泉水研究」（連載）。
三月、秋山秋紅蓼「無の立場」。
四月、大竹大三「明日への道」。
五月、井上三喜夫「魂の精白ということ」。
井泉水喜寿祝賀記念層雲大会（東京）層雲同人色紙短冊展。
六月、伊澤元美「放哉について」、前田若水「句唖郎と私」。
八月、井上三喜夫「原泉考」、井手逸郎「原泉味読」。
九月、井泉水「梵音海潮音」。
十月、井上一二「原泉を読む」。
十一月、『層雲第三十句集』刊。
層雲秋季大会（京都）。層雲賞・岡田城雨。

○同人動静

一月、細谷野露『一本松』刊。
四月、伊澤元美『俳句鑑賞歳事記』刊。
五月、層雲東北大会（福島・飯坂温泉）。
六月、句集『原泉』（井泉水喜寿記念祝賀会版）刊。青木此君楼句集『流れ木』刊。

青葉こんな世の中の石の叫びをきけ　佐々木露路

貧乏人は麦を喰えという麦はたくましく揃って穂になる　佐藤康治

ばかばかしく暑く世の中のことだまっているほかなく　荻原井泉水

火にするものは火にし一つの生活に終止符をうつ（退院）　田中操

赤旗は暑く鉢巻も暑くそんなきょうがまた　松田一男

一つの錆ついた惰性と貧乏のゆえに存在する　牧山牧句人

愕然と月を失う　伊藤雪男

空はただ空、落葉はひとり煙となる　荻原井泉水

追憶は、石に花開くことなし　中谷みさを

死んでしまったものは仕方がないぼんぼん時計　善方牛臥城

七月、種田山頭火『其中日記』（巻三）。吉澤句唖郎句集『一人歩き』刊。

十月、冬人・草樹・冬樹句集『嶺』。

米倉久枝句集『花と雲』刊。

十一月、金平二火句集『機械の音』刊。

○その他

井泉水著作。『日本歳事歳時紀行』。

井泉水「大法輪」に「鎌倉古寺めぐり」登載。西垣卍禅寺編『自由律俳句文学史』刊。

〈この年〉

火野葦平没（52歳・小説家）。

社会党委員長に浅沼稲次郎選出。

学生デモで樺美智子死亡

北海道夕張炭坑ガス爆発（死者三十五）。

チリ津波で三陸地方大被害（死者約百人）。

グアムのジャングルから元日本兵帰還。

宮内庁、深沢七郎の「風流夢譚」に抗議し、中央公論が陳謝。

ローマオリンピックで日本の体操四種目で優勝。

浅沼委員長、東京日比谷で演説中刺殺される。

カミュ没。

滝をおとし全山木の葉をおとしおわり　荻原井泉水
砂丘の白いリズムが海の第一楽章（鳥取砂丘）　家木松郎
わが句碑としてふるさと桜落葉する　秋山秋紅蓼
鴉は枯木に、群集何としてジグザクにあるく　三枝重峰
時計の針が静かに冬夜の深さを指している部屋　尾形夫知郎
かげろう、ちえたらぬ子にて石ころをならべ　近藤益雄
春の日の長針が短針を追いこしている旅の時間　岡田城雨
食餌制限なら霞でも食べろというのか春の日は永し　東松八洲雄
思考のそとに雪ふるマッチほのおにしておる　日向野秀策
花の思念はじけ散る鍵盤つめたし　中谷みさを

○層雲紀要
一月、秋山秋紅蓼「無の立場と人間存在」、井泉水「新短詩提唱」続、井手逸郎「井泉水研究」続。
二月、大竹大三「二つの表現」。井泉水秋紅蓼と「層雲創刊の頃」の題で対談。
三月、伊澤元美「難解」（金子兜太句の批判）、井手逸郎「岡田城雨」。
四月、創刊五十年記念号。井泉水「先ず自由律精神に立つべし」、付録「改訂層雲五十年表。
創刊五十周年記念春季大会、層雲賞・尾形夫知郎、井泉水賞・矢内樹一。
六月、井泉水「層雲の過去・現在・未来」。小沢武二「層雲入社事情」。
七月、一石路追悼号。北朗他の文。
八月、五十周年記念『層雲一人十句集』刊。
九月、秋季大会（富山市）。
十月、大竹大三「心と表現」。
十一月、『層雲第三十一句集』刊。
層雲人アルバム『随雲帖』刊。
十二月、井泉水「斯くて秋逝く」（八洲雄君のこと）、他各氏追悼文。

○同人動静
一月、青木菁華没（78歳）。

火はあやまてるにあらず春の野にして　大越吾亦紅
音楽しずかにおわるとき灯が喝采する　伊藤雪男
むかし船乗りとして冬夜のオリオンかがやく　遠藤虹水
花火、消えると綺麗な顔がそこに居る　矢内樹一
雪の裂け落ちた断面月光夜毎に青し　金井三良
君一石を世に投じそうして逝きしか此の路青し（一石路追悼）　秋山秋紅蓼
太陽から白球が落ちてくる観衆　内島北朗
月が星の迷子を探している　佐々木露路
旱雲水のない稲も露をもつ　江良碧松
雀千羽スクラム組んで案山子の警官、豊作　佐々木露路

飯尾青城子遺稿句集『年々歳々』刊。
二月、菁華遺稿句集『青木の花』刊。
岡田花子句集『花に花』刊。
三月、木戸夢郎第二句集『地黄帖』刊。
六月、逸郎『家木松郎人と作品』刊。
九月、家木松郎句集『発熱』刊。
十月、東松八洲雄没（63歳）。

○その他
井泉水、NHK第二放送教養特集で「私の自叙伝」放送。
俳句研究社の層雲特集号のため秋紅蓼と対談「層雲創刊の頃」。
NHK人生読本「遍路の心」放送。
井泉水著作。『人生読本』。
栗林一石路没（67歳）。

〈この年〉
金子兜太「俳句」に「造型俳句六章」発表。（一月）。
三島由紀夫『宴のあと』刊。プライバシー問題起きる。
ソ連、人間衛星船ボストーク一号打上げ成功。
東西ベルリンの境界に壁を築く。
北陸トンネル貫通（日本で最長）。
現代俳句協会分裂。
草田男等「俳人協会」設立。
ヘミングウェー没。

一句、その牡丹破顔微笑す　荻原井泉水

かまきり斧を持つ故に何をいかりておるや　日向野秀策

或る心についての冬の季節　近木圭之介

音楽、星いっせいに海に堕ちる　家木松郎

自問自答して木が落葉する　岡栄一

ゆきふるや由来人間は精虫でありし　中原紫童

働き手、は出かせぎの冬田の鴉　皆川蓼二

ぶりおこしやみてより乱舞するかもめの白く　高橋良太郎

果実の未熟にある野生を少年と食べます　牧山牧句人

機嫌のわるい凧を風にのせようとする　池原魚眠洞

○**層雲紀要**

一月、福本和夫「詩余と自由律」。井泉水との往復書簡。

二月、大竹大三「詩心について」。

三月、伊澤元美「言葉への過信現代俳句の批判」。

春季大会（和歌の浦）。

七月、大竹大三「俳句表現の二重構造」。（自由律の形態とリズムについて）。

十月、秋季大会、層雲賞・遠藤虹水、井泉水賞・天沼棗人。

大竹大三「俳句性と自然の軸」

層雲支部顕彰葛飾句会他十二支部。

十一月、『層雲第三十二句集』刊。

○**同人動静**

一月、高橋京香句集『故山』刊。

三月、松田一男句集『有為』刊。

内島北朗随筆『雲と泥』刊。

七月、平海馬石句集『第五十の星』刊。

十月、河重更涼句集『虹が合唱する』。

金井三良没（65歳）。

○**その他**

井泉水、和歌の浦層雲大会出席のあと高津子山、雑賀崎へ。

名古屋にて楽三会。芭蕉二百七十年忌に伊賀へ。

橋がゆるい孤を描くそして春夏秋冬　大越吾亦紅
血のつながりは気易くて氷がとける　木戸夢郎
深夜の桜と議事堂の空を流れていく星　秋山秋紅蓼
月は涼し係累なし　善方牛臥城
花のいまやためらわずしてひらく時　種子島千代子
一輪挿しにはつんと澄ました麦の穂一本　浄心寺良惇
結論の出た階段をおりる　山本秋光
ルオーに食いつくような目が背後にあった　和田光利
あきらめていた芽がでてきよる　関口父草
ニュースは足で探す職業の短い影つれて歩く　北田夕草

ハマの会主催、鳳車、菁華、八洲雄、香樹、和史の合同慰霊祭に出席。井泉水著作。『一茶』、『人生は楽し』。

〈この年〉
金子兜太「海程」創刊（四月）。
東京都の常住人口一千万を突破。
東京の学校一千二百三十八校、流感で全休（死者三百五人）。
常磐線三河島駅で電車事故（死者百六十人）。
プラハの世界体操選手権で日本男子団体が初優勝。
堀江謙一、単身ヨットで大平洋横断に成功。
三宅島で二十二年振りに大噴火。
室生犀星没（72歳・小説家・詩人）。
平野謙「純文学変質」発表、純文学論起る。
安部公房『砂の女』刊。
京都壬生寺、放火で全焼。
初の国産機ＹＳ―11試験飛行に成功。
ファイティング原田、世界フライ級選手権獲得。
読売交響楽団第一回公演。
全国総合開発計画決定に伴い、道路公団、産業都市建設が促進される。
ヘルマンヘッセ没。

いまは静かに雲を噴く山の若葉なり	荻原井泉水
心に人がおり夜汽車の速度になる	日向野秀策
黒いマントで冬がさまよう音の夜風か	大越吾亦紅
コンクリートから鉄筋が神経を出していて寒い	内島北朗
制服がペンギンのような女生徒雪の上に集まれ	中原紫童
この虫生きるための死んでみせる	〃
閉じて瞼の黒板に深夜の詩を書こう	佐々木露路
朝はまず御存じ烏の口上にて候	〃
雪の圧力竹の張力霽れてゆく	佐藤露江
否定の中の肯定、花が返り咲く	木戸夢郎

○層雲紀要

一月、井泉水「新短詩提唱」連載、井手逸郎「層雲五十年史」連載。井泉水傘寿。

大竹大三「心境について」。

四月、春季大会、層雲賞・前田若水、中原紫童。

井泉水「骨と肉とに就いて」で「新短詩提唱」に基づく層雲将来のビジョン表明。

『層雲第三十三句集』刊。

七月、大竹大三「層雲今日の問題」（詩的イメージの構成と現代的リズムの必要性）。

九月十月、六百号記念号。

井泉水「生命主義ということ」、金田一京助「井泉水と啄木の接触」、秋紅蓼「自由律俳句発祥」、北田夕草「自由律の詩的価値」。

秋季大会（東京・丸の内）。層雲賞・佐々木露路、井泉水賞・佐藤露江、層雲文化賞・木村緑平。

十一月、『層雲作品選第一』刊。

十二月、大竹大三「詩感と詩心の間」。

○同人動静

三月、上田都史『人間尾崎放哉』刊。

五月、伊澤元美『尾崎放哉』刊。

十一月、中原紫童没（64歳）。

ぶこつな手のひらのまめでしかない　関口父草
梅には梅の思想古木なるかな　秋山秋紅蓼
崖にて荒々しく心を吹くもののあり　近木圭之介
雪におりて眼光けいけいたる鳶のひもじきか　高橋良太郎
銃口の前もんどり打ちし兎を貰う　佐々木石々
華麗な雑踏黒人の白い歯笑って行く　秋山秋紅蓼
十字に流れる車の秩序の炎天　池原魚眠洞
あのくだらさんみゃくさんぼだい此世雪ふる　木村緑平
夏草、不慮の出来事として人が轢かれる　森田斉生
戦後派といっても磁石は北向いて見せる世の中　北田夕草

十二月、田中雲魚句集『雲魚』刊。

○その他
井泉水、八十歳。
春季大会のため信州小諸へ。芭蕉真蹟の調査のため伊賀上野へ。

〈この年〉
NHK第一回大河テレビドラマ「花の生涯」放映。
吉行淳之介「砂の上の植物群」発表。
北九州市発足（人工百四万人）。
全国PTA協会発足。
オーストラリア遠征中の田中総子水泳で九つの世界新。
五十年間無罪を叫んだ吉田石松、再審で無罪。
久保田万太郎没（75歳・小説家）。
『現代日本思想大系』刊行開始（筑摩書房）。
『太陽』創刊（平凡社）。
映画「武士道残酷物語」ベルリン映画祭でグランプリ。
米国ケネディ大統領暗殺される。
新千円札発行。
東海道線鶴見で電車衝突事故。
三井三池三川鉱でガス爆発。
日生劇場開場。
「こんにちは赤ちゃん」流行。
テレビアニメ「鉄腕アトム」放映。

月、此のとき雲が構想を新たにする　荻原井泉水
鞭とチョークとゼロの持つ意味を教う　日向野秀策
はつらつと日をしぶく鮭、人ら網にせり　大越吾亦紅
どこかで何かがあまりの静寂に爆発している　岡栄一
夢を売っている師走の女が一枚買ってゆく　木戸夢郎
冬と接触した車と車と夕刊の三面　家木松郎
音は夜のどん底に人間釘を打っている　内島北朗
月に己れの裏側を見られる　三好草一
自分のかげとさえ気の合わんときの風がふく　山本木天蓼
東海道快晴快速一連秋色　渡辺砂吐流

○層雲紀要

二月、村尾草樹「放哉回顧文」。
三月、草樹「放哉への新しい照明」。
四月、春季大会（浜松市）。
『層雲第三十四句集』刊。
七月、秋紅蓼「詩としての俳句」。
近藤益雄追悼号。
八月、大竹大三「自由律の俳句性について」2。井上三喜夫「内にあるもの」（益雄の死によせて）。
十月、岡栄一追悼号。井手逸郎「岡栄一の人と作品」。諸家の文。
十一月、秋季大会、層雲賞・小川都影、井泉水賞・渡辺砂吐流。

○同人動静

一月、内島北朗随筆『みみづの糞』刊。
二月、杉本玄々子没（73歳）。
三月、中原紫童句集『月がのぼる』刊。
松田一男句集『有為』刊。
四月、酒井仙酔楼没（76歳）。
五月、近藤益雄没（57歳）。
七月、古屋翠渓随筆『配所流転』刊。
八月、岡栄一没（62歳）。
九月、和田光利句集『風花』刊。
十月、村尾草樹『放哉・その凡て』刊。

○その他

「井泉水半寿祝賀のための会」発足。

青葉が埋めつくしている空間と水の独白の白い時間	池原魚眠洞
風に突っ放された蝶の傷心	山本秋光
海に日がさがり或る砂丘の美しい恥部	近木圭之介
雲が散らばっている日のマーガレットの白	秋山秋紅蓼
青空へほうり出されている停年	小島元四郎
貸しも借りもない師走の星が出ている	佐々木露路
解放経済です町工場の隅の桜です	牧山牧句人
木漏日の迷彩蛇が木に登っている	松田一男
雨だれのなんだかんだといっている	北田夕草
冬、月が階段の性格に影する	田中操

井泉水「随」に「八一番日記」連載。
井泉水芸術院会員に推薦される
井泉水著作、自選句集『長流』。井泉水随筆集第一『七十一番日記』。
詩と俳句性の論議活発。

〈この年〉
野上弥生子『秀吉と利休』刊。
「ミロのビーナス」展。
北杜夫『楡家の人びと』刊。
佐藤春夫没（73歳・詩人）。
「ピカソ展」開会。
新潟地震（死者・行方不明三十八人）。
富士山頂レーダー完成。
東京代々木総合体育館完成。
「展望」復刊。
米国の月ロケット、月面撮影に成功。
ソ連3人乗り宇宙衛星船打上げ。
公明党結成。
名神高速道路全通。
羽田空港―浜松町モノレール開通。
東海道新幹線営業開始。
オリンピック東京大会開催。
マッカーサー没。
王貞治、ホームラン55本の日本新。

元日新しき足袋をはく幼きときより　荻原井泉水
風に野火を移す　池原魚眠洞
雪の足跡が火を入れた窯への往き来　内島北朗
生れた町の雪げしき表町ゆき裏町もどる　大越吾亦紅
空にはとんぼういつまでも年とらぬ子が瞼の中　松尾あつゆき
心に絵の具取り散らしていた　近木圭之介
人の流れにさからう一人の人生としてゆく　日向野秀策
月光すさまじ山の全貌雪崩しおえたり　佐々木露路
虹立って何を欺く　善方牛臥城
くらき雲のそれよりくろき海しずまりてあり　高橋良太郎

○**層雲紀要**
一月、井泉水「芭蕉は禅の上で悟っていない」上。（次号に下）。
二月、春季大会（鎌倉・建長寺）。同日井泉水芸術院入り祝賀パーティ。小川都影「放哉の入院拒否」。大竹大三「自由律の俳句性について」3。
四月、井泉水「門を開いて語る」（連載始まる）。
五月、吾亦紅追悼特集。秋紅蓼他。
六月、井泉水「原爆地長崎にて松尾敦之と」。
七月、井泉水「平戸の途中益雄を弔す」。
九月、井泉水「阿蘇の麓にて昔、山頭火と」。内島北朗「戦争と俳句」。
十一月、秋季大会（東京・神田）。層雲賞・甲子悟、巣山鳴雨、米倉久枝。大竹大三「自由律俳句と時代的意義」。
十二月、『層雲第三十五句集』刊。

○**同人動静**
二月、前田若水『二行詩　霰』『井月人と作品』刊。
木村緑平句集『小さいいのち』刊。
大越吾亦紅没（77歳）。
五月、唐沢柳三『自由律俳句史とこころどころ』刊。高橋良太郎第三句

かたく信じている微笑　山本秋光
進むも退くも植えて一面青田となる　江良碧松
年ゆくてのひらの生命線洗う　木村緑平
星が微塵に光りわが孤独を愛そう　秋山秋紅蓼
位牌一つ持って来た東京で息災でいる　和田光利
石投げて朝の沼を笑わす　小島元四郎
月が堕ちた百合の白い戦慄　田村光子
台風の映像一転時局の戦争となる　甲子梧
結局は一人であることの二人のくらし　木戸夢郎
風が宝石のようにまたたいて消費景気の年逝く　鈴木折嶺

集『鰤おこし』刊。
十月、秋山秋紅蓼『梅花無限』刊。
十一月、黙徒句集（三十三回忌記念出版句集）刊。皆川蓼二句文集『信濃川早春』刊。
十二月、勝呂和三郎句集『白い灯台』。
高田影象第一句集『朝の鴎』刊。

○その他
井泉水、九州地方に旅。
井泉水著作。小説『芭蕉日記』。

〈この年〉
伊豆大島大火。
太田薫総評議長国際レーニン平和賞。
丹下健三、英国ロイヤル建築金賞。
アメリカ、北ベトナム空爆開始。
福岡県山野炭坑ガス爆発（死者二百三十七名）。
梅崎春生「幻花」発表。
小島信夫「抱擁家族」発表。
梅崎春生没（50歳・小説家）。
谷崎潤一郎没（79歳・小説家）。
高見順没（58歳・小説家）。
三船敏郎「赤ひげ」でベネチア映画祭最優秀男優賞。
朝永振一郎ノーベル物理学賞受賞。
米川正夫没（74歳）。
シュバイツァー、ルコルビュジェ没。

花空へちり了る　（武二逝く）　荻原井泉水

真顔、一本残っているマッチをする　秋山秋紅蓼

谷のくぼみに海が置き去りにした水と空　松尾あつゆき

小米桜の狂い咲き、遺品に陽を当てている　渡辺砂吐流

白紙であって裏があり表がある　山本木天蓼

チンボコをもつ名をもらって赤ん坊ごきげん　内島北朗

風を火にして野火猛る　〃

影、私を最後に列が終っている　池原魚眠洞

政治、街の川に魚がもどってくるほどになる　佐藤康治

どちらからともなくどちらからでもなく　善方牛臥城

○層雲紀要

一月、井上三喜夫「自由律俳句の発生とその持味について」。

二月、諸家「秋紅蓼追悼文」。

四月、井泉水「秋紅蓼の一生」。

五月、諸家「小沢武二追悼文」。井泉水「鎌倉だより」で層雲の「逆縁」を嘆かれる。

春季大会（京都・妙心寺）。層雲賞・小島元四郎。壽老賞・木戸夢郎、甲子梧、小西仏舎。

七月、井泉水「瀬戸内海七日」。

八月、井泉水「九州だより」。

十月、大竹大三「今日の層雲について」（層雲作品の現代的意義を説く）。

十一月、諸家「前田若水追悼文」。

秋季大会（東京・神田）。

『層雲作品選第二』刊。

十二月、「層雲作品選第二」作者一覧と後記。

○同人動静

一月、秋山秋紅蓼没（81歳）。（山梨県出身、層雲初期から参加の代表作家。編集主任として企画その他俳句界との交流、執筆にも積極的だった）。

浄心寺良惇『葛飾風景』刊。

三月、小沢武二没（71歳）。

六月、井上三喜夫『自由律俳句の道』刊。大山澄太『良寛物語』刊。

これがあなたの遺していった制服の二人の少年　小林仁子
風鈴に風がきてなんにも言うなと言う　財馬呵歩
しあわせとはマッチ一本けさの生活に点火す　中谷みさを
星の一つが幾千の星となり海の断崖　岡田城雨
月に野犬化する黒い一匹の周辺　近木圭之介
人生はドラマその配役の屑屋さんくる　小島元四郎
岸辺、熱い砂が溢れてくる　清水えみ子
携帯ラジオが細いアンテナ出して夜の軽音楽　森田斉生
稲妻、胸のどこかへ住みついている青い蝶　菅崎道雄
氷雨の夜空ベトナム戦争を電光する　渡辺砂吐流

七月、山頭火句集『自画像』刊。
十月、佐藤露江句集『北上川』刊。
十一月、北朗随筆『あるやなしや』、『陶工の楽書』刊。
十二月、井関冬人句集『キリストの絵』刊。

○その他
井泉水、NHKテレビ放送「この人この道」（渋沢秀雄と対談）。勲三等瑞宝章受賞。瀬戸内海、九州、山陰へ旅。

〈この年〉
井伏鱒二「黒い雨」発表。
全日空機、東京湾に墜落。
カナダ航空機、羽田で着陸失敗。
BOA旅客機、富士山麓に墜落。
川端竜子没（80歳・日本画）。
ソ連のルナ9号、月面軟着陸し月面写真を送信。
米のサーベイヤ1号、月面軟着陸し月面写真を送信。
封書十五円、はがき七円の郵便新料金を実施。
全日空機、松山沖で墜落。
北京に紅衛兵出現、文化大革命。
南ベトナムで反政府デモ激化。
TV、おはなはん、ザ・ガードマン。

樟の木千年さらにことしの若葉なり　荻原井泉水
永劫とは滝、刹那刹那として滅す　〃
かまきり三角の顔して本性抵抗する　日向野秀策
笑っちゃおれない世相に花火があがる　内島北朗
あてにされるからにはゆく　関口父草
世相、月はよんどころなく空におる　三好草一
月が汽船から黄色いくだもの持っておりる　近木圭之介
脚もげばった昔廃兵というものありし　小島元四郎
深夜作業の機械の音信濃川は昼夜を渡る　皆川蓼二
たわむれてふる雪に寄り沿うてゆく　矢内花子

○層雲紀要

一月、井泉水「山陰道十日」。魚眠洞「選後感」（新年度出発の心構えについて」。
二月、井泉水「出雲にて碧梧桐を憶う」。
三月、井泉水「伯耆にて緑石を憶う」。
四月、改巻号から層雲編集室を巣山鳴雨方（鎌倉市西御門）に置く、一般投句欄選者を魚眠洞、秀策、父草、あつゆきの四名とする。
五月、春季大会（太宰府・天満宮）。井泉水の句碑除幕式。
六月、井泉水「旅中だより」。
八月、井泉水「門を開いて語る」（十八）（碧梧桐と虚子）。瓜生敏一「日常語について」。
十月、層雲六百五十号記念号。井手逸郎「層雲中期の意義と人々」、特別付録「随想千字文」。
十一月、文化の日、第六百五十号記念秋季大会（東京・神田）。層雲賞・皆川蓼二、矢内花子、川島惟彦。壽老賞・善方牛臥城他。
十二月、大竹大三「放哉・山頭火の文学」。

或る朝汽船が沖を走るコップに小さく　川島惟彦
からす寒ん空へ油ぶち撒いて火をつけた　渡辺砂吐流
火が燃えようとするロゴスを求めようとする　橋本健三
まな板できざんでいる物価が上る　善方牛臥城
黄色い月の破片が朝、黒猫が通る　田村美津子
男の解らぬ世界で女が箪笥をあける音で　甘利一童
こどもすくすく育ち交通戦争つづく　三好千峰
枯木クリスマスの星を吊りベトナム休戦　中谷みさを
原爆の日がすぎるとまたひっそりつくつくぼうし　松尾あつゆき
手をとめれば手の骨（是道君を見舞う）　池原魚眠洞

○同人動静

四月、佐々木石々第二句集『雄物川』刊。
五月、日向野千一路編『追悼句集・和子』刊。
七月、『定本青木此君楼句集』刊。井上三喜夫『春がくるうた』刊。
十月、上田都史『俳人山頭火』刊。
十一月、田村光句集『心』刊。

○その他

井泉水、家族を伴い宮崎のえびの高原に旅。層雲春季大会に出席。天満宮に献句奉納。山口県下、大分県下、福岡県下を旅。

〈この年〉

山本周五郎没（63歳・小説家）。
長野県塩尻に初の共産党市長誕生。
西日本に集中豪雨（死者行方不明三百人以上）。
南海電車衝突（重軽傷九十名）。
壷井栄没（66歳・小説家）。

月、天上天下寒に入る　荻原井泉水

ひそかに原潜を寄港させてこの国の月の美し　日向野秀策

一枚の古風な風景へ犬は枯草色で歩く　三好草一

また一人を星にした今夜星の下ゆく　巣山鳴雨

月、奔流の如くベトナム反戦へ集会する　川島惟彦

若い季節の黄色い蝶と白い汽船と噴水　田村美津子

犬死にもせなんだもんで年がとれます　関口父草

濁った川が変化した街の血管でもあった　近木圭之介

雪ふる小さな印刷所で絵本が刷れていく　佐藤康治

被爆者はかなし炎天の下大臣の代読をきく　松尾あつゆき

○層雲紀要

二月、『層雲第三十六句集』刊。

三月、井泉水「妙好人緑平」。

四月、井泉水「流れる水は語る」連載始まる。その一「自然ということ」。層雲春季大会（小諸）。層雲賞・日向野千一路、種子島千代子。一般投句欄改定、選者交替選。完吾「俳句隆盛期の課題」。

六月、層雲社句会復活（建長寺）。

七月、井泉水「流れる水は語る」その四「自由ということ」連載終る。『一人十句集』（層雲六百五十号記念）刊。

九月、井泉水「対話と独語」（信州大学講演「芭蕉について」）。層雲秋季大会（高野山・普賢院）、井泉水賞・古屋翠渓、千代延青牛。

十月、井泉水「霊雲帖を前にして」。

十一月、井泉水「その人とその句」連載始まる。

○同人動静

一月、木村緑平没（81歳）。村上潮水句集『捕われた命』刊。

三月、松田一男句集『樟の木』刊。山田句塔句集『雑木林』刊。魚眠洞層雲を離脱「視界」創刊。

四月、井手逸郎『此君楼読本』刊。

六月、船木月々紅句集『蓮の習性』刊。

視界ゼロを行く木が立つ木が立つ　内島北朗
人間だけが芽ぶかずして歩く
炎天、おのれの蛇身かくすすべなし　浄心寺良淳
心鞭打つ一本の鞭はもちたし　日向野千一路
山笑う人間それどころでない
機械整然と倒産している無音、別れてゆく　種子島千代子
「めし」とただそれだけの看板
奥さん盛装して猫に言いきかせる言葉　山本秋光
屋根に風化した月をおきこの街の公害対策
潮騒、壺の中からくる　由川うしほ

瓜生敏一
金平二火
田村美津子
中谷みさを

七月、古屋翠江『移民のらくがき』刊。木村緑平『雀の生涯』刊。
九月、山田句塔句集『椰子の実』刊。
十月、白藤簡子遺稿『花大根』刊。
大山澄太『漂泊の俳人山頭火の手記』刊。
十一月、内田六郎『鶴を待つ』刊。
十二月、中沢春柳『彩雲帖』刊。
佐々木石々没（76歳）。
青木此君楼没（82歳）。
佐々木露路没（70歳）。

○その他
井泉水、信州小諸層雲大会に出席。
薬師館裏の井泉水句碑除幕式。
井泉水著作。『芭蕉を尋ねて』井泉水俳画集。

〈この年〉
藤田嗣治没（82歳・洋画家）。
大学紛争拡大。
米黒人指導者キング牧師暗殺。小笠原返還協定調印（六月復帰）。
日本最初の心臓移植。
米軍北爆を中止。
川端康成ノーベル賞受賞。
三億円事件発生。
「現代日本文学大系」（筑摩書房）刊行開始。
「新潮日本文学」（新潮社）刊行開始。

人間不在の世界となるか雪かように降る　荻原井泉水
手を合わせたまう仏に手を合わす　〃
風に髪を逆立てて人がくる、私がゆく　金平二火
学園紛争　梅は凛冽散るまでを咲く　渡辺砂吐流
笑いは右のポケットに涙は左のポケットに卒業してゆく　平松星童
灯して読み古い世におる　真鍋竹灯
顔の横に耳ぺったりとくっつけて偏屈　池沼両間子
宇宙船月へいそぐ鼠に毒おく　和田光利
蛾の死、ふしぎなくらいきれいな朝である　日向野秀策
焦点を合わされている微笑　内島北朗

○**層雲紀要**
二月、井泉水「年頭らくがき」、井上三喜夫「再び古い型の日本詩人のことば」連載始まる。
四月、井泉水「道ある故に我等ゆく」連載始まる。
層雲春季大会（大津・三井寺）。
層雲賞・真鍋竹灯、金平二火、池沼両間子。井泉水賞・江良碧松。寿老賞・内島北朗、村上潮水、財馬呵歩、岡田花子。
五月、『層雲第三十七句集』刊。
八月、井手逸朗「日記と書簡」（山頭火と放哉書簡の収穫）。
十一月、層雲秋季大会（東京・通運会館）。層雲賞・高橋白露、渡野辺朴愁。井泉水賞・山本蒼天、小林銀汀、和田光利。
層雲諸霊供養塔落慶開眼式（小豆島・本覚寺）。

○**同人動静**
五月、山根いずみ句集『芽ぐむもの』刊。
九月、村上潮水『爆弾下の報告』、井手逸郎『此君楼新考』、土屋秋香句集『秋香存稿』、大橋蓮子第二句集『小鼓』、木戸夢郎『人煙帖』、内田六郎著『七科約説』刊。
船木月々紅没（72歳）。

人間とて機械のする仕事見ているのが仕事　松尾　あつゆき

貝がらの幻想カメオの美猊となる　小林仁子

人間猿に拍手を送る　山本秋光

取り交した名刺の奇遇と空白　渡辺砂吐流

氷塊の中の街を真二つに鋸く　小島元四郎

三日月さま張込み中です　浄心寺良淳

海が置き去りにした貝殻汐ためている　高橋白露

裸いとし人間なんとたくさんの傷あとを持ち　渡野辺朴愁

黄昏と日没のバランスの中で子供ないている　菅崎道雄

公平な夜が来た勝手口からゴミ持って出る　伊藤完吾

○その他
井泉水、京都の層雲大会出席のの
ち瀬田に泊まる。義仲寺、幻住庵
跡訪。越前、加賀、越中の旅。句
碑句碑除幕のため兵庫県三田へ。
井泉水、中央公論社版「日本の詩歌」
第十九巻に載る。井泉水句評釈は詩
人村野四郎。

〈この年〉
東大安田講堂の封鎖解除。
海音寺潮五郎「天と地と」ブーム。
軍縮委員会へ日本初参加。
いざなぎ景気。
東名高速道路開通。
国立近代美術館開館（石橋正二郎
寄贈）
米アポロ11号月往復成功。
坂本繁二郎没（87歳・洋画家）。
原子力船むつ進水。
伊藤整没（64歳・小説評論）。
石田波郷没（56歳・俳人）。
中村岳陵没（79歳・日本画家）。
ホーチミン没。

人生の有明つばくらのごとき父なりし（信州池田町句碑）　荻原井泉水
壁にモナリザを貼りむずかしい年頃　松尾あつゆき
野火、追い詰められた焔として逃げてゆく　松田一男
冬という幕がびりびり破れる寒さである　巣山鳴雨
終着駅のレールの交錯が脳神経のような雪になる　村上潮水
核言わぬ日はなし木の葉散らぬ日はなし　真鍋竹灯
スモッグの夕映えにネオンが発色しはじめる　日向野秀策
夕焼まっ赤な反戦デモ寒い犬が鳴く　内島北朗
地球の罅から出てきて夜更けを鳴く　和田光利
牛のためならかかをも叱るか　土屋燕人

○層雲紀要
一月、井手逸郎「井泉水序説」連載始まる。
二月、井泉水「それより六十年」連載始まる。
四月、井泉水「鎌倉だより（一）」。（短詩表現の積極性を訴える）。
五月、層雲春季大会（京都・東福寺）。層雲賞・井上三喜夫、村上潮水、井上有紀男。
六月、井上三喜夫「自由律俳句という呼称の意味するもの」。
九月、『層雲一人十句集』第三刊。
十一月、層雲秋季大会（東京・神田）。層雲賞・土屋燕人、和久田登生。

○同人動静
三月、古瀬山四郎句集『べにばな』刊。
六月、小林銀汀句集『荒海』刊。
七月、和田光利第八句集『高曇』刊。
九月、米倉久枝句集『松の木と共に』刊。
十一月、泉丈編『元良先生追慕集』刊。
十二月、岡栄一遺句集『遠花火』刊。

○その他
東福寺山内天得院前庭に井泉水句碑立つ。井泉水、翌日琵琶湖畔遊。
井泉水筆「奥の細道三十六景展」（大阪と静岡の松坂屋）。

雪ちらちら斧の力を老の力とする　江良碧松

死がさらった街の、いまにして装う春なり（広島）　井上阿弥坊

いまは子にしてやれることただ墓の草ぬく　松尾あつゆき

生徒と教師の断絶、パンはちぎってたべる　巣山鳴雨

木々その時押黙り人みな影となって歩けり　三好草一

さて、考える人は考えている私は去る　山本木天蓼

未来とは空から銀糸が万博雨の夜　真鍋竹灯

ベンチ退屈を食べすぎて錆びてしまった　梶田鴻邦

この初夏の空の夕月というものの近代性　井上有紀男

太陽をはじき出す大阪の朝がこれから　菅崎道雄

井泉水、大阪、奈良の旅。信州池田塩尻に井泉水句碑立ち、除幕式に参列。つづいて能登、金沢、富山へ旅。

〈この年〉
榎本健一没（65歳・俳優）。
核拡散防止条約調印。
国産人工衛星打上げ成功。
世界貿易センタービル完成。
第一回大宅壮一賞を石牟礼道子辞退。
日本万国博覧会（大阪）。
日本赤軍による日航機よど号乗っ取り事件。
日米安全保障条約延長。
日本山岳会、エベレスト登頂に成功。
教科書検定裁判で家永三郎原告勝訴。
西条八十没（78歳・詩人）。
いざなぎ景気終息。
東京で歩行者天国始まる。
海老原喜之助没（66歳・洋画家）。
福田豊四郎没（75歳・日本画家）。
森田たま没（75歳・随筆）。
大宅壮一没（70歳・評論家）。
三島由紀夫割腹自殺（45歳・小説家）。
スカルノ、ナセル、ドゴール没。

木の葉木の葉、石の言葉が予言する　荻原井泉水
洗濯機がひとりでとまっているあほらしい世の中　日向野秀策
死ぬときふいにあおむけになる一匹の蠅の死　大竹大三
空を緑を陽を返せと叫んでいる集会　内島北朗
犯罪にメートル尺をあてている　善方牛臥城
太陽、戦争は何処かにある地平におりる　伊藤雪男
河が屈折して黒い街にさえぎられ日没　菅崎道雄
秋がじっくりと深まり蜘蛛が華麗に糸を吐く　渡野辺朴愁
靴に泥つけて来た本当の人間の声　伊藤完吾
シグナル常のごとく作動して正確なり十一月此の日（三島由紀夫自刃）　平松星童

○**層雲紀要**
一月、井泉水「それより六十年」連載中。井手逸郎「井泉水序説」(14)。内島北朗「古い句をたどる」(一)。
二月、井泉水「米寿の弁」。井上一二「句碑と鐘銘とを回想する」。山崎農夫朗「迂愚の迷蒙」。
三月、井上三喜夫「俳句の素顔」。
四月、第59巻改巻号、作品欄改題。
内島北朗「層雲人の句碑」(1)。
五月、層雲春季大会（浜松市・佐鳴湖畔）。寿老賞・井上一二他。
六月、井上三喜夫「俳句の世界」。『層雲第三十八句集』刊。
九月、山崎農夫朗「永生への熱祷」。
十月、井手逸郎「井泉水序説」(24)。井泉水米寿祝賀大会（鎌倉・鶴ケ岡会館）。層雲功労賞・伊藤雪男。
十一月、井手逸郎「井泉水風土」連載始まる。
十二月、井泉水「層雲と私」（秋季大会での話）。

○**同人動静**
一月、層雲社新年句会（建長寺書院）。
内島北朗随筆集『春風秋雨』刊。
二月、野村朱鱗洞位牌が愛媛新聞社の調査で、大分市で発見される。内島北朗喜寿記念『北朗作品記念集』刊。

行き詰った首を同志に切らせる（三島由紀夫の死）　山本秋光
雲は流れるままに流れ天下の無名氏　瓜生敏一
はなびらが授業じかん　渡辺砂吐流
様々な足に行き逢う失望の谷　由川うしほ
すずめたちよ東京砂漠という風ふく中　和田光利
記憶を追跡してやまず別個の記憶　関口父草
第二の勤めに根が生えてビールが溢れる　松田一男
猛暑、若者ゴーギャンの絵になって街をゆく　小林仁子
おのれ葬りたしわが悲しみ風化する前　松尾あつゆき
おわかれのにじと峠のおじなりし（塩尻峠にて）　荻原井泉水

三月、田中孤国句集『流れる水』刊。
四月、小池鈴江句集『蝉の標本』刊。
六月、大山澄太編『山頭火著作集』刊。
八月、平田白蛇句集『白蛇』刊。村上潮水旅行記『遊学』刊。大山澄太『俳人山頭火の生涯』刊。
十月、大山澄太編『定本種田山頭火句集』刊。
十一月、唐沢柳三『自由律俳句史雑記』刊。

○その他

津田清楓、小川千甕、荻原井泉水書画三友展（大阪・松坂屋）。
井泉水句碑佐渡に建立。
井泉水著作。画幅『奥の細道廿四集』、『画幅芭蕉春秋』、井泉水俳句集『大江』、米寿記念展画集『松に因みて』。

〈この年〉

東京国際版画ビエンナーレ展。
沖縄返還協定調印。
児玉希望没（72歳・日本画）。
山口蓬春没（77歳・日本画）。
全日空機と自衛隊機の空中衝突事故（死者百六十一名）。
徳川夢声没（77歳・声優）。
内田百閒没（81歳・小説家）。
志賀直哉没（88歳・小説家）。

日まわり黒い実となりドル・ショックに明け暮れる　渡辺砂吐流
霧がとざした街のどこかで爆弾を造っている世相　大森定次
冷戦、ざくろの実はいつまでも枝にある　戸羽千之
すてられし花の余力頭もたげて咲く　種子島千代子
胸に白いハンカチの常識
くちづけ、少女の瞳が星をためている　山本秋光
機械が機械をつくる寒い音で　鶴田育久
すなおに心が言葉になって葉がちる　内島北朗
かさこそ落ち葉の話は石に腰おろしてきく　三好米子
或る日の洗濯ばさみの何もぶらさげていない空白　吉浦俊雄
　三好草一

○層雲紀要
一月、井泉水「解説　乗鞍岳秋色」。井上三喜夫「再び古い型の日本詩人のことば」。
層雲六十年年表（井手逸郎編）。
藤原よし久「放哉と丁哉」。
五月、井上三喜夫「自然の心」。
内島北朗「古い層雲の人々」（上）。
六月、層雲春季大会（鳥取県三朝）。
層雲賞・吉浦俊雄、三好米子。
井泉水「鉄鉢と鉢の子」、伊藤完吾「鉄鉢の句」、橋本健三「短詩の鑑賞」（一）、大竹大三「印象詩としての俳句のリズム」。
九月、井上三喜夫「放哉俳句一説」。
十一月、内山雨海「自由律への思慕」、井上三喜夫「三自一体ということばについて」、松尾あつゆき「原爆句抄あとがき」。
層雲秋季大会（鎌倉・鶴岡旅館）。
十二月、井上三喜夫「放哉覚書」（一）。

○同人動静
二月、高橋政二句集『でっかい月』刊。
三月、藤崎麦村遺稿句集『あまのかわら』刊。
五月、木戸夢郎第三句集『人煙帖』刊。
高橋良太郎第四句集『日没』刊。
六月、井上三喜夫編『尾崎放哉全集』刊。松岡一枝句集『石榴石』刊。

ほたるは光る刹那刹那の何を思うや　荻原井泉水
春闘終りどこふく風の撒水車が水まく　日向野秀策
句帖ふところに、心に秘めたるものあり　松尾あつゆき
星空痛い程のむかし　杉田井蛙
ふさぎこんで記憶の針を夏に合わす　伊藤完吾
夏が一気に秋の有刺鉄線にからんでいる蔓　関口父草
秋が手のとどくところでうれている　山本木天蓼
磯の香に母を感ずる海に子と来ている　西川ふじ子
案山子影をのばし孤独を予感する年令　安田十一
深夜の酒はよし好きな壷との対話　内山雨海

上田都史『人間尾崎放哉』刊。
七月、原むめ句集『余生』刊。
松田一男随筆集『樟の木』刊。
唐沢柳三雑文集『馬の足』刊。
美田一草句集『一草一木』刊。
八月、大山澄太『山頭火の宿』刊。
渡野辺朴愁句集『鉄を打つ音』刊。
十月、上田都史『放哉の秀句』刊。
松尾あつゆき『原爆句抄』刊。
十二月、大橋蓮子句集『小鼓』刊。
佐瀬茶楽句集『宵螢』刊。
山田こゝろ第二句集『くさの実』刊。

○その他
井泉水、九州高千穂神社内山頭火句碑除幕式によせ講演録音送る。
層雲春季大会へ出席。鳥取の放哉墓参。上田都史らと東京新宿で「山頭火を語る講演会」。
井泉水著作。『山頭火を語る』（伊藤完吾共著）、『詩と人生』、『芭蕉観賞』、『旅人芭蕉抄』。「随」第二百四号で終刊し、層雲に合併。

〈この年〉
連合赤軍浅間山荘事件。
沖縄復帰、沖縄県復活。
川端康成自殺（72歳・小説）。
日中国交正常化。

正月めでたし黒豆は黒くからすは黒く　内島北朗
花火けんらんたり夜は憮然たり　中谷みさを
余りにもたのしかった空気のぬけたゴムマリ　黒田政子
赤い羽根着けて貰いちょっぴり幸福な雲　大森定次
家紋瓦の溜息に病葉は風化する　天野登志子
春は桜咲く守衛の規律　松田一男
島を春に明け放つ鬼太鼓を打つ　三国魚竿水
山は若葉に朝の第一楽章うぐいす　小林仁子
だれかがじっとみている火の山のけむり　南沢延江
春夜やたらに深刻がる自画像の表情　渡辺砂吐流

○**層雲紀要**
一月、井泉水「機縁ということ」。田村美津子「山頭火と白船」。
二月、井泉水「独語的な対話」連載、三月、和田光利「山頭火来る」。
四月、井泉水「流るる雲のことば」（一）松尾あつゆき「原爆を顧みて」。
『層雲第三九句集』刊。
五月、層雲春季大会（京都・一灯園）。井泉水「それより六十年」（33）終。「木戸夢郎逝く」。
六月、木曽聡「山頭火の俳句」（一）。
八月、井泉水「甲信六日」、井上三喜夫「朱鱗洞と山頭火」。
九月、井上三喜夫「白船と山頭火」、伊澤元美「原爆句抄」について。
十月、層雲秋季大会（鎌倉・若宮荘）。層雲賞・三国魚竿水、小林仁子。
十一月、原一郎「『自由律』私見」、井手逸郎「二代の句縁」。

○**同人動静**
一月、関口父草句集『牛』刊。
二月、『此君楼全句集補遺』刊。
三月、松田一男句集『黒と白』刊。山本天蓼句文集『望郷』刊。松岡一枝著『里の子日記』刊。
四月、木戸夢郎没（83歳）。
五月、唐沢柳三詩集『ふるさと』刊。
六月、『定本山頭火全集』刊。

今どき石炭たいて走る汽車が古里の山に入る　三好草一
花たかだかとあり夏なるかな　荻原井泉水
皿にひと房の葡萄、影は一光年の月を宿す　田村美津子
あるときそっと死がくる人が歩いている　岡田城雨
空に湿舌あって人間軟体動物となるか　皆川蓼二
さるすべりの花ケロイドの肌の日焼けの色かな　松尾あつゆき
その木の股にまたがって柿が鈴なり　関口父草
山が月を高くした　近木圭之介
出稼ぎに発つ朝の雪にしみじみ尿する　細川草里
さむざむ賛成した手をポケットにしまう　松田一男

内島北朗随筆集『残照』刊。
小林銀汀句碑長岡市に建立。
七月、三好草一詩集『白鷺のいる町にて』刊。
巣山鳴雨句集『鎌倉春秋』刊。
九月、瓜生敏一著『妙好俳人緑平さん』刊。
十一月、山本蒼天句集『雲の底』刊。
和田光利『和田光利自選句集』刊。
江良碧松句碑故里麻郷に建立。
十二月、井手逸郎著『続良太郎・人と作品』刊。

○その他
井泉水、層雲春季大会（京都）へ出席。長野県浅科村に句碑建立、除幕式に出席。層雲秋季大会（鎌倉）へ出席。川崎市柿生の善正寺に句碑建立。井泉水著書。『自然・自己・自由』、『短詩入門』、『井泉水草画集』。

〈この年〉
椎名麟三没（61歳・小説）。大仏次郎没（75歳・小説）。小松左京「日本沈没」発表。近衛秀麿没（74歳・指揮）。吉屋信子没（77歳・小説）。狂乱物価・異常インフレ起る。江崎玲於奈ノーベル賞受賞。サトーハチロー没（70歳・詩人）。ピカソ没（92歳・画・彫刻）。

傷つけば女心貝が音もなく閉じる　松原トヨ子
愛のせつなさよ肋骨のない胸で受けとめる　木曽聡
月が更けて街が死面の透明さになる　大森定次
鮪まっぷたつに断ち切った包丁の裏表　河内登美子
枯木の星がちかちか何か地球に発信する　小林仁子
大き餓死なんとしておすめすのちぎりつつ　高橋良太郎
ニュースには感心のない猫が新聞の上雪朝　内島北朗
それはまるいかたちにつつんであるもの　近木圭之介
鏡と女とパントマイムな春へ蝶が出てくる　三好草一
ランドセル土手に投げた小石の三段とび　天野登志子

○層雲紀要

一月、井泉水「独語的な対話」。井上三喜夫「放哉覚書」。
二月、内島北朗「忘れられない句」。
四月、鈴木貴子「放哉俳句遺漏考」。
五月、橋本健三「詩とその周辺」（一）。
六月、井泉水「象徴語」について。大竹大三「放哉俳句の形成過程」。層雲春季大会（新潟会館）。
層雲賞・大竹大三（評論）。
七月、井泉水「書と字に就いて」。井上三喜夫「放哉余話」。
八月、原一郎「放哉と宗教」。
十月、木曽聡「層雲の道を歩む人たち」（一）―井泉水―連載。
十一月、層雲秋季大会（京都・天得院）。
十二月、鈴木貴子「定型時代の放哉俳句」。井上三喜夫「そして古い型の日本詩人のことば」。
層雲事務室伊藤雪男辞任を機に、層雲社、発行所ともに京都内島北朗方へ移転。

○同人動静

一月、中谷みさを句文集『風景の中で』刊。矢内樹一没（72歳）。
二月、善方牛臥城没（81歳）。
三月、井上有紀男句集『白い祭』刊。
四月、瓜生敏一句集『稚心』刊。

月が理論の外を照らしている　山本秋光
年を経たケロイドの色、傷は胸の奥にある　松尾あつゆき
穴に這入りたいと思う大きな穴を心に持つ　矢内樹一
すい星が白い尾を引き地球が冷めてゆく事実　伊藤完吾
まっ白に洗いあげてくらしきりつめている　日向野秀策
孤愁、ざくろの具象が一個置いてある　井上有紀男
暗い夜の花が匂う木の存在　中谷みさを
向日葵孤高にして抱壷の顔になる　巣山鳴雨
君たちあの世の、わたしこの夜の月を見る　荻原井泉水
天上天下ただ一つの月となりし時　〃

六月、大山澄太、高藤武馬著『山頭火句と言葉』刊。
八月、水谷青史句集『一本の芦はうたう』刊。江良碧松句集『松吹く風』刊。
山田句塔自選句集『椰子の実』刊。
九月、内田六郎没（81歳）。
十月、橋本夢道没（71歳）。
十一月、内島北朗随筆『行雲流水』刊。
十二月、矢内樹一・花子句集『樹と花』。

○その他
井泉水、NHKラジオ「趣味の手帖」放送。東京12チャンネル「人に歴史あり」で対談。甲州、信州旅行。新潟で作品展。大阪・東京松坂屋展。前立腺手術。この年春季・秋季大会は欠席し録音講演。
井泉水著作。『九十翁の書』。

〈この年〉
山本有三没（86歳・文学）。
尾崎喜八没（82歳・詩人）。
深尾須磨子没（80歳・詩人）。
福田平八郎没（82歳・日本画）。
ルバング島で元軍人小野田寛郎発見。
宮本三郎没（69歳・洋画）。
堀江謙一マーメイド3号で世界一周。
フォード大統領来日。
佐藤栄作ノーベル平和賞。

頤に鬚はのびるままにしてとにかく九十一	荻原井泉水
ねがわくばその頃辞世とシテ牡丹一句を（西行をおもう）	〃
冬の日の座に出てきた一匹の蠅のペーソス	日向野秀策
石臼あっぱれ漬物石として	関口父草
生きて居ればこそ今年の熟柿食う	内島北朗
年月、ケロイドの皺すなわち老いの皺となる	松尾あつゆき
わたしの骨のくちたところに蒲公英よ咲け	和田光利
殺されに行く牛が大きな糞を落している	木曽聡
少年秘密の日だまりを持ちて読む本	渡辺砂吐流
手品師種をあかせば人生またかくのごとし	内山雨海

○層雲紀要

一月、井泉水「半世紀層雲社物語」（上）。次号（下）。
二月、井上三喜夫「層雲秀句観賞」（一）。
三月、井泉水「みずから語る」。
四月、井上三喜夫「放哉忌に寄せて」。
村尾草樹「中学時代の放哉俳句」。
五月、井泉水「昔ばなし」。
六月、井泉水「井泉水余話」。
八月、大山澄太「山頭火の宿」（一）。
関口父草「一石路追想」。
井上三喜夫「いまはただ」。
平沢伸雄「俳句の国際化」。
十月、層雲秋季大会（鎌倉・海浜荘）。
寿老賞・江良きみ、新庄青涯
渡辺砂吐流、小林不借、杉田井蛙
浄心寺良惇。
十一月、井泉水「漱石先生の印象」。
十二月、斎藤清衛「ままの生」。
木曽聡「若い人のための新しい俳句『短詩』」。

○同人動静

六月、松尾あつゆき『原爆句抄』刊。
七月『近藤益雄全集』刊。
上田都史『自由律俳句文学史』刊。
九月、吉沢稲市『名のない句集』刊。
十月、大山澄太『澄太句集五十年』刊。
十二月、渡辺砂吐流句集『年輪』刊。

砂丘へ誰れが菜の花をすてたのか　近木圭之介
捨てきれないものの影がくる月天心　淺沼参三
鴉くろぐろと世をすねて憚らず（自嘲）　鷲見冬青
死は近きにありさりげなく人の訃を聞く　巣山鳴雨
事故現場のガラスの破片が冬の銀河になってしまう　大森定次
月へ蒼ざめてゆくおちばの背信　菅崎道雄
選挙も終り月が村に帰ってきた　南沢延江
平和像はただ被写体として花のちる　松尾あつゆき
月夜皎々と屋根瓦の鬼のめんだま　大竹大三
谷の源流に落ちていた白い蝶のハンカチ　伊藤完吾

○その他
井泉水、楽三会、鎌倉新年句会出席。
井泉水筆「筑波梅林」碑除幕。層雲秋季大会に出席するも疲労気味で中座。信州・松本へ。浅間温泉、鷹の湯に句碑建立。
十二月二十四日脳血栓で倒れる、左半身不随、言語障害が残る。
井泉水著作。『益軒養生訓新説』、『井泉水短冊集』。

〈この年〉
夏目伸六没（66歳・随筆）。
新幹線、岡山・博多間開通。
梶山季之没（45歳・小説家）。
ベトナム戦争終結。
蒋介石没（88歳・中国政治家）。
日本女子登山隊、エベレスト登頂成功。
林武没（78歳・洋画）。
沖縄海洋博覧会。
堂本印象没（83歳・日本画）。
棟方志功没（72歳・版画）。
東京宝塚劇場「ベルサイユのばら」ヒット。
倒産件数戦後最悪を記録。
酒・たばこ・郵便料金値上げ（はがき20円）。

わが骨壷としてこの壷の見るにあかなく　荻原井泉水
美し骨壷　牡丹化(かわ)られている　〃
信ずるにはあらずしんじつ祈るのみ　日向野秀策
先生も骨壷の中供花にうまり　内島北朗
山ノ内山鳩なく私にもう先生はいない　松尾あつゆき
山の噴くけむり消えゆく空果てしなし　関口父草
まさに安楽死、お口元一句示し給うや　渡辺砂吐流
今日如何に地の底にまで降る雨の松の青きも　三好草一
自然死こそしんじつ仏となりたもう　大山澄太
そんなとき師を思うなみだあたたかし　井上阿弥坊

○**層雲紀要**

一月、井泉水「上根岸明治のころ」。二月、山田無文「平常心是れ道」。井上三喜夫「疎慵雑筆」（一）、「井泉水年譜の訂正について」。

三月、『層雲第四十句集』刊。

井泉水「安楽死」、「牀上より一言」。瓜生敏一「山頭火の緑平宛書簡」。

四月、随翁「他山の石か」。井泉水「連句病牀独吟」、「とんぴ頓吉のうた」句。伊藤雪男追悼特集。巣山鳴雨、層雲編集辞任し伊藤完吾編集担当（六月号より）。

五月、井泉水「安楽死」（再度）。

六月、井泉水追悼号（1）。随翁「無我生」。井泉水「独語的なる対話」、「見おさめの花かとも」句。井泉水句抄（一）3回。井泉水閲歴3回。井泉水「記憶の断面」（一）連載。大竹大三「小浜の放哉」（一）連載。

七月、井泉水追悼号（2）。

随翁「人相」、「東西南北」。上田都史「自由律俳句・日はまた昇る」。吉田精一「井泉水について」。伊澤元美「啄木と井泉水」。

八月、井泉水追悼号（3）。

井泉水「老子の言葉」、「師伝」。井本農一「井泉水と自由律俳句」。

層雲全国大会（浜松・館山寺温泉）。

心も濡らす雨の通夜の一人として　巣山鳴雨
少年のかわいた眼が風の記憶を水色にする　菅崎道雄
夜のテンポに関わらぬ白磁の壷のある位置　鶴田育久
少年パンのような詩を書き一匹の猫愛撫する　田村美津子
ラッシュの流れとは逆な勤めで人生終盤　鷲見冬青
師の視線なぜに遠く冷たく話すひと言ずつ　伊藤完吾
インフルエンザ。鼻の中に不安な地形がある　近木圭之介
空、一匹の蟹が懺悔する　南沢延江
山のなんでも屋のハガキがきれた　和田光利
鳴くだけないた蝉が蟻に引かれて行く　池田実吉

層雲賞・鷲見冬青、鶴田育久、田村美津子、菅崎道雄、伊藤完吾。
十月、層雲社機構、層雲規定の改正。
井泉水「湘南懐古」（一）連載。
十一月、大竹大三「井泉水先生の生涯」。

○同人動静
二月、伊藤雪男没（84歳）。
四月、天沼雄吉『棗の花』刊。
七月、牧山牧句人没（77歳）。
十月、近木圭之介方に井泉水、山頭火、黎々火句碑建立。

○その他
井泉水、伊藤雪男死去「鎌倉だより」書く。「幻の句碑」ようやく建つ。五月二十日脳血栓再発、午後四時十七分逝去、九十一歳。戒名『天寿妙法釈随翁居士』。五月二十二日自宅にて密葬。五月二十六日東京六本木妙像寺にて層雲社社葬。陛下より祭祠料下賜。従四位勲三等旭日綬賞授与。角川「俳句」、「俳句研究」で荻原井泉水追悼特集。
井泉水句集『四海』刊。

〈この年〉
武者小路実篤没（90歳・小説）。
周恩来没、毛沢東没。

着ぶくれて京の底冷えに生きている　内島北朗
人を憎む罪の目をえぐり取って下さい　田村ゆき江
こころみだるるとき磁石北を指す　和田光利
こどもなにをみつけた駈けてゆく草の径　橋本健三
ぼろ寺で鴉が啼く貧しい人の淋しい葬　浄心寺良淳
若鮎の如く灼熱の鉄ラインを流れ　今田昭三郎
廃液入れたドラム罐一本捨てるところがない　下村直樹
ふと真赤な嘘を、鎌のような月が出ていた　田中倍雄
親ゆずりの掌の皮はちびんのが取りえでのんた　木本千鶴子
月光匂う透明なセロハンに包まれている、眠り　高垣吉江

○層雲紀要

一月、伊澤元美「俳句否定の論理と俳句の可能性」。平沢伸雄「アメリカハイク展望」（1）連載。

二月、井泉水「湘南懐古」（5）完結。伊澤元美（前月の論考補説1）。

四月、原一郎「芭蕉俳句の英訳」。玉木斗汐「江良碧松氏を憶う」。

五月、井泉水一周忌特集号。井泉水「山頭火と牧水」（講演から）。水野欣三郎「句碑画幅展」を見て。内山雨海「荻原先生と私」。大竹大三「見おさめの花かとも」考。「荻原先生を偲ぶ」諸家。高橋良太郎追悼特集。「高橋良太郎句抄」。和田光利「高橋良太郎兄を哭く」。

六月、親井牽牛花「井師と伊勢・伊賀の旅」。瓜生敏一「層雲創刊以前の井泉水」（1）連載。

七月、「層雲」二十代群像（作品）。

八月、伊沢元美「俳句否定の論理と俳句の可能性」補説（4）完結。層雲全国大会（京都・天得院）。

十月、小玉石水「放哉の句に思う」。

十一月、和田光利特集「古里の鰈」（作品）。三浦石雨「光利素描」。

十二月、小玉石水「放哉の人と作品」。

古里では黄昏が咽喉からあふれてきた　近木圭之介
美学とノートの無い肖像。中国山系葉がふる　〃
とかげの目がぬれて原爆忌祈りの時刻となる　中谷みさを
曲がるだけまがった胡瓜の青い偏見　田岡柳甫
鉄の切粉が螺旋にのびる暑さが絶頂　松本久二
田の水は上の田から来る百姓にはならぬ倅をもつ　小林星人
闇が村にかぶさる過疎の星座を秘め　親井牽牛花
光のシャッターに包みきれない乳房と嬰児　池田実吉
いのちあればひらひら蝶々のマンネリ　小林仁子
やっと仕事にありついた両手に太陽を握る　田中倍雄

○同人動静
一月、井手逸郎『青木此君楼研究』（1）刊。
村上潮水没（83歳）。
二月、層雲九州大会（宮崎）。
江良碧松没（89歳）。
三月、日向野千一路句集『私のアルバム』刊。
高橋良太郎没（74歳）。
四月、小林銀汀没（88歳）。
五月、大山澄太編山頭火遺稿『三八九集』刊。
六月、広橋求堂句集『佐渡の流人』刊。
八月、井上一二没（82歳）。上田都史『山頭火の秀句』刊。
十月、『橋本夢道全句集』刊。

○その他
「井泉水句碑展」（浜松市美術館）。
井泉水一周忌追悼句会（京都・天得院／東京・妙像寺）。井泉水「奥の細道随想」（録音テープ）。
井泉水著作。『人間好時節』。

〈この年〉
田中絹代没（67歳・女優）。
藤森成吉没（84歳・小説）。
今東光没（79歳・小説）。
海音寺潮五郎没（76歳・小説）。
カラオケブーム起る。

漁村で酒と蟹を食べ自殺論聞きながら	近木圭之介
林檎むく指先の静かすぎる疲労感雪つむ	中谷みさを
無思想なうまさ湯豆腐をあつあつあつ	平松星童
美し星座の信条今夜も冬の大三角を画く	小林仁子
人間のエゴの咲かせた哀しい春を売ることか	高垣吉江
選びそこねたコースを落ちる一枚の落葉のモノローグ	〃
李また咲いて索漠と暮すのはまずい	井上有紀男
少年に春はや兆す五色の噴水	親井牽牛花
月を能面としてかけてある二月の空	松原トヨ子
夜が黒い手使い分け闇の中の赤いくちびる	河内登美子

○層雲紀要

一月、小玉石水「放哉の人と作品」（2）。川島惟彦「新・種田山頭火研究」（1）。二月、親井牽牛花「管見〈新俳句作品〉時評」。三月、上田都史「俳句去日来日」（1）。五月、内島北朗追悼号、北朗句抄・追悼文（諸家）。平沢伸雄「アメリカハイク展望」終。層雲全国大会（俳句文学館ホール）。六月、年間層雲賞・近木黎々火、中谷みさを。層雲新人賞・幾代良枝。層雲発行人・伊藤完吾。発行所・京都市東山区今熊野東瓦町六九五　池田実吉方に変更。代表役員・日向野秀策就任。七月、大竹大三「小浜の放哉、追記」。九月、伊沢元美「自由律俳句の過去・現在・将来」。井上三喜夫「自由律俳句の将来性について」。上田菁也「自由律俳句の明日」。三好草一「一年が過ぎた」。大竹大三「自由律雑感」。アンケート報告（上）。上田都史「層雲の命名」俳句去日来日（7）。十月、瓜生敏一「自然・自己・自由」について。親井牽牛花「自由律作品の鉱脈」。小玉石水「自由律その一筋」。井上有紀男「自由律俳句の将来について」。上田都史「自由律俳句の立場」。

しらじらと朝は仮想の敵	伊藤完吾
すっかり変装して、言葉を売りに出かける	段証尚子
終盤もうわが王将の行く処がない	財馬呵歩
われら人間さかしらにＨＩＢＡＫＵＳＹＡとよぶな	松尾あつゆき
原爆おちない保障はない空からはなびら	〃
捨てざるを得ぬ古里のしばらく見えかくれする	田中倍雄
老獅子のごとく吼えたきことといっぱいあり	和田光利
森の光　蝶を狂わす	椿山雁
夕陽におちた一匹の蛾の優雅なる終焉	田岡柳甫
五月のバラたち芳しく私が透明人間になる	幾代良枝

十二月、波多野翠江「呵歩さんを偲んで」。親井牽牛花「管見俳句時評」終。

○同人動静

一月、「層雲」同人制を設ける。
二月、九州大会（佐賀市）。
三月、内島北朗没（84歳）。内島北朗随筆集『頭寒足熱』刊。
四月、皆川蓼二句集『信濃川春秋』刊。
五月、上田都史『小説木歩』刊。
六月、三間畦石没（71歳）。
七月、鶴村松一『野村朱鱗洞』刊。
九月、井手逸郎『天露したたる』刊。物部卓郎句集『風の日』刊。
十月、財馬呵歩没（85歳）。近木圭之介『かっぱ無頼』冊子刊。日向野秀策句集『かし胡桃』刊。
十二月、橋本健三没（66歳）。

○その他

井泉水著作『此の道六十年』刊。

〈この年〉
伊豆大島近海地震。
東郷青児没（80歳・洋画）。
柴田錬三郎没（61歳・小説）。
古賀政男没（73歳・作曲）。
成田空港運営開始。
日中平和友好条約調印。

誰もいないプールを泳ぎきれない一枚の木の葉です　高垣吉江
魚を競る銀河魚臭を発す　近木圭之介
寝台急行が傷んだ冬月を見捨てた　伊藤完吾
このごろただぼうぜんと落日を見る癖　田中倍雄
清貧とは菊を食べることではなかろう　皆川蓼二
たこたこあがれ通知表のことは忘れろ　松尾あつゆき
思想喪失　菜の花が咲いた　近木圭之介
流離感、羽織の紐が一本とれていた　和田光利
どっかでたんぽぽになる気で飛んでいく　日向野秀策
春昼無為蛍光灯一本の紐をぶら下げ　三好草一

○層雲紀要

一月、井上三喜夫「層雲の命名について」。二月、橋本健三追悼号。句抄、解説。大竹大三「橋本健三を憶う」。瓜生敏一「かすかなえにし」。三月、大竹大三「放哉俳句の研究」（1）。小玉石水「若狭常高寺を訪ねて」（1）連載。五月、層雲全国大会（長野市）。六月、層雲賞・高垣吉江、田中倍雄。層雲新人賞・坪倉優美子。七月、井上三喜夫「層雲が志向するもの」。小玉　石水「放哉の一句」（1）。親井牽牛花「随感・新自由律俳句活動への展開」。八月、伊沢元美「栗林一石路」句集について」。上田都史「西東三鬼と俳句弾圧事件」俳句去日来日（17）。伊藤完吾「層雲におけるプロ俳句を探る（1）連載。十月、上田都史「層雲、最近の傾向について」俳句去日来日（19）十二月、山村裕「句の虚構表現をめぐって」。井上三喜夫「自由律俳句表現の多様性について」。

○同人動静

一月、加藤裸秋『せせらぎ』刊。二月、九州大会（長崎市）。

雪の晴れ間のメニューなら雲の白いフランスパン　松原トヨ子
白い自転車の少年が海へ向う道を指さす　坪倉優美子
葉桜犬が吠える港街夕べの魚臭　中谷みさを
山ふかくゆくおのれのこころ弾きながら　関口父草
空が深くて花びらは所詮蝶になれない　斉藤玉枝
この界隈の構え今も色街ざぼんの花や　吉岡憲生
春愁、乳房の内側に紅く暖かな鳥が住む　河内登美子
梅雨を枕にA・マルローがその夢に来る　梶田鴻邦
生きる倫理妻と話し遠いいなずま　親井牽牛花
禁猟区物怖じしない鳩の眼がまんまるい　木本千鶴子

鶴村松一『野村朱鱗洞拾遺』刊。
三月、筒井茎吉『風茎亭漫筆』刊。
四月、瓜生敏一『身辺雑記』冊子刊。
五月、大月喜三郎句集『霜のはな』刊。
六月、角森和夫『随筆詩集』刊。山田こゝろ第三句集『七十の坂』刊。上田都史・永田龍太郎編『自由律俳句作品史』刊。
七月、鶴村松一『伊予路の野村朱鱗洞』刊。
九月、松田一男句集『田布施川のほとり』刊。上田都史『上田都史句集』刊。浄心寺良惇第二句集『新宿春秋』刊。
十月、上田都史『心の俳句・趣味の俳句』刊。
十一月、井手逸郎『野村朱鱗洞入門』刊。

○その他
井泉水（山頭火・放哉）大原出版企画。『新俳句入門』復刻版。

〈この年〉
米中国交樹立。
電話ダイヤル全国自動化達成。
巌本真理没（53歳・バイオリン）。
中野重治没（77歳・小説）。
水谷八重子没（74歳・女優）。

寒波来て切々と昭和史をかえりみる　親井　牽牛花
もはや原爆のケロイドかくさず胸の奥は言わず　松尾　あつゆき
自動ドアが開いて孤独な人を入れた　日向野　秀策
虫の音土に潜み冤罪叫びつづけて逝った　中谷　みさを
競って紅葉する一葉一葉の美しい自我　高垣　吉江
五月は指から蝶がしたたり落ちた　近木　圭之介
海浜この町に糧を得雑考す　〃
太陽の女神のあまりにも多産系な、春　松原　トヨ子
八・六はかなし夏の花のさかり　井上　阿弥坊
雲のひとつひとつ未知の言葉をもつ　西川　ふじ子

○層雲紀要
一月、「層雲の長律句」研究（1）、原一郎・古川克己。
瓜生敏一「層雲創刊以前の井泉水」（27）終。
二月、「層雲の長律句」（2）。
小玉石水・鶴田育久。
瓜生敏一「井泉水年譜考」（1）。
二月、層雲九州大会（別府市）。
三月、小玉石水「放哉の恋句」。上田都史「俳句去日来日」（24）終。
四月、瓜生敏一「井泉水年譜考」（3）終。
五月、八百号記念号（五、六合併号）。井泉水病床日記抄。伊沢元美「大正期の層雲とわれわれの責務」。大竹大三「層雲昭和前期の展望」。上田都史「自由律俳句の栄光と苦悩」。層雲年表補足（昭46～54）。
層雲全国大会（京都市）。
七月、層雲賞・斎藤玉枝。
新人賞・吉岡憲生。
九月、伊沢元美「採芳巡礼」（1）連載。井手逸郎「遠天の鷹」書評。
十月、小玉石水「沢芳衛さんに会う」。伊藤完吾「三つの話題から」時評。
十一月、小玉石水「俳句の末尾と自由律」。筒井茎吉「草創期層雲句集から拾う」（1）。上田菁也「虚以後」。

まだ死ねないと想うに冬薔薇の散る音	浅沼参三
花びらなお散りかかれ私が石になる	斉藤玉枝
海鳴りわすれて海が絵本になった	吉岡憲生
ああこのぼろぼろの一句日が沈む	田中倍雄
廃校の黒板に書き残されたままのさよなら	飯島翠壷洞
月夜の海がけものの骨あらっている	〃
出口のない雨期がきて胸に無表情なギプスの重み	河内登美子
田の面ギラギラ光り社会悪というもの考えている	藤田踏青
犬が嗅ぐ路地裏の犯罪、炎天	田岡柳甫
夕闇の空で突然蜘蛛の網にかかった女	三好米子

伊藤完吾「年間回顧」。

○同人動静

一月、山本木天蓼句文集『晩年』。和田光利第11句集『遠天の鷹』刊。

三月、伊沢元美『尾崎放哉』新訂版刊。上田都史『放哉・転転漂泊』刊。

四月、金子兜太他『山頭火の世界』刊。

五月、鶴村松二『愛媛の自由律俳句史』刊。山本秋光句集『風が燃える』刊。

九月、木下信三『山頭火の細道』刊。金平二火没（80歳）。

十月、小池鈴江詩集『続・出さない手紙』刊。鑑賞現代俳句全集第三巻『自由律俳句の世界』刊。吉沢稲市没（89歳）。

十一月、渡辺砂吐流文集『年輪残照』刊。松田鴎青子句集『菊の鉢』刊。

十二月、鶴村松二『芭蕉と一茶』刊。

〈この年〉

新田次郎没（67歳・小説）。

土岐善麿没（94歳・短歌）。

サルトル没（75歳・文学、哲学）。

上林暁没（77歳・小説）。

モスクワ・オリンピック不参加。

イラン・イラク戦争勃発。

越路吹雪没（56歳・女優）。

冷夏のため稲作大不作。

故郷、酸性の月にのぞきこまれている　比田井　白雲子
公証役場出でて晩秋、女の道　天野　登志子
使われない井戸の周りに舌が落ちていた　下村　直樹
美しいけもの罠に陥ち枯野雪ふる　飯島　翠壷洞
私の内なる丘の春靄に蒼き鹿立てリ　〃
冷夏憎し錆たドラム缶を叩く　岸本　久寿
駅の伝言板に消え残ったさよなら　田岡　柳甫
軒から燕ひる返りゆく背信の街　中谷　みさを
少女のかくコンパスの円が乳房にもなる思春期　高垣　吉江
青空に五月は家紋が透けておる　親井　牽牛花

○層雲紀要

一月、小玉石水「山頭火私稿」（1）。
二月、層雲九州大会（宮崎）。
三月、井手逸郎「美意延年」書評。
土屋燕人追悼特集・書簡、関口父草、南沢延江他。
四月、三浦石雨「津軽の馬寒」。
筒井茎吉「昭和五十五年度層雲回顧」。
五月、小豆島大会記念放哉特集・小玉石水、井上三喜夫。
層雲全国大会（小豆島・本覚寺）。
六月、層雲賞・田岡柳甫。
努力賞・淺沼参三。
新人賞・岸本久寿。
八月、松田一男追悼特集　句抄と略歴、追悼文。
十月、口語俳句についてのアンケート報告1。
大野栗里追悼　句抄と追悼文。
種田山頭火展（東京）毎日新聞主催。
十一月、口語俳句についてのアンケート報告2。
『層雲自選句集第四』刊。
十二月、筒井風茎亭「一石路句集散想」。

○同人動静

一月、土屋燕人没（78歳）。

錠剤の夜から黒い眠りを買う	浅沼参三
アスファルトてらてらと白い月が乾いている	藤田踏青
雷をテレビが感じている政治討論	大山冬石
古里の峠に立てば駆け上がってくる太鼓の音	河内登美子
うすい背中から後ろ指さされる	小玉石水
立止った風が何か忘れていったようだ	日向野秀策
老いた象を主役にサーカス雨の街に来た	浅沼参三
あの雲がおとした疑問山頭火何処へ	近木圭之介
イ・イ戦争の悲劇。目玉焼のための皿	〃
師走の扉で何かが終ろうとするとき	伊藤完吾

二月、北田寸児『バンコク草紙』刊。
三月、加藤裸秋詩集『韋駄天』刊。
五月、井上雄峯句集『来光』刊。
六月、松田一男没（74歳）。
七月、内山雨海『墨のにじみ』刊。
八月、荻原井泉水『随翁の随想』刊。
大野栗里没（89歳）。
十月、鶴村松一『伊予の細道』刊。
『種田山頭火展図録』刊。
十一月、加賀谷灰人随筆『無心庵今昔』刊。
太田行子句集『塵外録』刊。
十二月、鶴村松一『種田山頭火と野村朱鱗洞』刊。

〈この年〉
谷内六郎没（59歳・版画）。
市川房枝没（87歳・婦人運動）。
堀口大学没（89歳・作詩）。
水原秋桜子没（88歳・俳句）。
神近市子没（93歳・婦人運動）。
湯川秀樹没（74歳・物理学）。
芥川比呂志没（61歳・新劇）。
「シルクロード・ブーム」となる。
エジプト大統領サダト暗殺。
福井謙一郎（京大）ノーベル化学賞受賞。
黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』。
はがき40円、封書60円。

新聞が来た銃口がぼんやり皿のふちに映る　近木圭之介
洗濯挟みがもう春風を見たと言う　渡辺砂吐流
小さな内気な夕焼けが終り蹌踉（そうろう）と人よ　三好草一
空の静けさがもう夜を溜めはじめた　飯島翠壷洞
路地裏にも人生がありゴムホースとぐろを巻く　西川ふじ子
風冴える埠頭を振り向かせた汽笛だ　吉岡憲生
帽子から鳩が出過ぎるそんな平和宣言　浅沼参三
水たまり子供は地球を手玉にとる　藤田踏青
勲章にならん仕事もあるさ針のけつ押す　池田実吉
飴と鞭と、小農の振る赤旗はなし　甘利一童

○層雲紀要
一月、上田都史「荻原井泉水」（上）講演要旨。小玉石水「山頭火研究こぼれ話」。
二月、上田都史「荻原井泉水」（下）。筒井風茎亭「自選句集鑑賞」。
三月、層雲九州大会（佐賀市）。
四月、瓜生敏一「層雲史大正期概説」（1）。黎々火の周辺（近木圭之介・木下信三）。近木圭之介「山頭火折々の句」イラスト入りで紹介。層雲作品抄・大正時代1（青木此君楼他）。層雲全国大会（長野善光寺）。
五月、層雲賞・松本久二、河内登美子。新人賞・飯島翠壷洞。瓜生敏一「層雲史大正期概説」（2）。井泉水七回忌（東京・京都）。
六月、井上三喜夫「層雲初期の総括」層雲作品抄・大正時代2（久保白船他）。
七月、伊沢元美「昭和初期の荻原井泉水」（1）。小玉石水「俳句の音数」（1）。層雲作品抄・大正時代3（荻原井泉水）。
八月、伊藤完吾「昭和初期の荻原井泉水」（2）。層雲作品抄・昭和初期1（荻原井泉水）。
九月、大竹大三「放哉とその影響」（1）。層雲作品抄・昭和初期2（尾

昭和はいずこへ良い子悪い子普通の子　親井　牽牛花

うすい胸板一枚で戦後の海峡渡る　松原　トヨ子

家霊こもる古木ひねもす挽いている音　和田　光利

六月の山の亀裂に雉子の声鋭し　中條　恵行

波が波を越してゆく春への速度　河内　登美子

私に棲む青いガラス質の一匹です　近木　圭之介

烈日の石、蜥蜴の尾蛍光す　遠藤　虹水

薄ものにすけて蒼い女のいる水の流域　高垣　吉江

口に反核をとなえ核の傘の下にいる　松尾　あつゆき

人間の内側に潜む戦への人さし指　伊藤　完吾

崎放哉）。
十月、山田こゝろ追悼・句と追悼文。
十一月、大竹大三「放哉とその影響」（3）。千代延青牛追悼・句と文。
十二月、筒井風茎亭「裸木と武二」。層雲作品抄・昭和初期4（小沢武二他）。

○同人動静

一月、本岡八十八句集『十五縄手橋』刊。
三月、井上三喜夫『井上阿弥坊句集』刊。
五月、瓜生敏一『荻原井泉水研究』刊。
八月、瓜生敏一『田川の文学とその人びと』刊。
九月、『小池鈴江詩集』刊。
山田こゝろ没（75歳）。
千代延青牛没（85歳）。
十一月、鶴村松一没（49歳）。
十二月、巣山鳴雨没（80歳）。

〈この年〉

ホテルニュージャパン火災。
江利チエミ没（45歳・歌手）。
日航機羽田墜落事故。
五百円硬貨発行。
佐藤美子没（79歳・声楽）。
東北新幹線、上越新幹線開業。
西脇順三郎没（88歳・詩）。

言い訳にやって来た鼻の赤い紳士　飯島翠壷洞
森のレクイエム忘却の雪降りしきる　〃
駅裏の屋並が星の植民地になっている　〃
貧しい酒場を出ると瓦礫の迷路だった　〃
春の日暮れへ行方不明になった機関車　〃
キノコ雲ひらいて倫理とめどなく崩壊す　松原トヨ子
描きたいのは一本の哀しい木、その内部　近木圭之介
思春期は傷ついた蝶の触覚に似ていた　吉岡憲生
風が耳を縛りあげ馬のようにいななく　下村直樹
ひしめきあって時間を食べ散らかして街角　藤田踏青

○**層雲紀要**

一月、井上三喜夫「無心・82年の終りに思うこと」。伊藤完吾「層雲のプロレタリア俳句」。鶴村松一調査「種田山頭火句碑一覧」。

二月、瓜生敏一「自由律俳句の呼称について」。小玉石水「山頭火私稿（19）終。筒井風茎亭「一九八二年層雲誌上から」。層雲作品抄、昭和初期5（栗林一石路他）。

三月、伊沢元美「井泉水俳論の歩み」1。巣山鳴雨追悼、追悼文。層雲作品抄、昭和初期6（内島北朗他）。

層雲九州大会（長崎市）。

四月、層雲作品抄、昭和初期7（海藤抱壷他）。

五月、瓜生敏一「木村緑平」。筒井風茎亭「阿弥坊と雨海」。層雲作品抄、昭和初期8（藤沢せい一他）。

六月、層雲賞・松原トヨ子、新人賞・藤田踏青、松本千英子。荻原井泉水書簡1生誕百年記念特集。

七月、飯島翠壷洞追悼、句と追悼文。

層雲全国大会（浜北市）。

八月、筒井風茎亭「私見、秋山秋紅蓼」。井関冬人「層雲史に於ける青木此君楼」。

九月、木下信三「海藤抱壷」。瓜生敏一「近藤益雄」。層雲作品抄、昭和初

風が雨に洗われた青葉を饒舌にする　松本千英子
避妊具とりかえるものうい春風の韻（ひびき）　高垣吉江
「不沈空母」女はパンの耳容赦なくちぎる　田中倍雄
風に乱れるマーガレット畑の白い復讐　井上有紀男
月の雁　別離の言葉おいてゆけ　甘利一童
平和綻びてゆく振り向いたピカソの顔　淺沼参三
雨の町へ貼りついた軍手の淋しいばんざい　斉藤玉枝
さるすべり咲く日の濃さに長崎の鐘が鳴る　池田実吉
京の底冷えの底を坐るゆるぎもせず　中條恵行
おしんに子守歌なし雪ふかぶかとあり　端湖国

期9（関口父草他）。
十月、小玉石水「浜口弥十郎」。大竹大三「種田山頭火1」。層雲作品抄、昭和初期10（種田山頭火）。
十一月、内山雨海追悼、句と追悼文。
十二月、松尾あつゆき追悼特集。

○同人動静

一月、皆川蓼二没（79歳）。
二月、山田こゝろ句集『くにさき』刊。
三月、山形凡平句集『芽ぶくもの・春』刊。天沼棗人没（95歳）。
五月、飯島翠壺洞没（42歳）。
六月、山崎農夫朗句文集『凡愚』刊。七戸黙徒句文集『父を打てや』刊。井手逸郎没（80歳）。
八月、真鍋竹灯句集『竹に灯す』刊。
九月、内山雨海没（76歳）。
十月、橋本夢道句集『無類の妻』刊。松尾あつゆき没（79歳）。

〈この年〉
青函トンネル開通。
小林秀雄没（80歳・文芸評論）。
片岡千恵蔵没（79歳・俳優）。
中村草田男没（82歳・俳句）。
NHKテレビ小説「おしん」大ブーム。
三宅島大噴火。

空が不逞に押黙り登校拒否の鴉が通る　三好草一
朝、卵が一個古典的に置かれていた　近木圭之介
春雷マネキンの目が獣めく　池田実吉
ぴったり寄り添う若者に夕日はいりこめない　千葉勝子
心ニヒルに傾斜す、ねぐらの寒い階段　高橋政二
卍と狂う白一色の車間距離　渡辺砂吐流
軽金属の朝　児盗み知りそめぬ　松原トヨ子
猫の覗いた露地の廃都の様に動かぬ春　梶田鴻邦
港に漁船肩をよせ出口のない鉛色な不況　斉藤玉枝
埋葬した夜が乾いてゆく砂の風紋　田中伸和

○層雲紀要
一月、井上有紀男「山陰における層雲作家」。
二月、小玉石水「国語教科書（中学高校）と自由律」。岩本義孝「一行詩をよりどころとした国語教室経営の実践」。
層雲九州大会（別府市）。
三月、藤原よし久「九州における層雲の作家群像」。渡辺砂吐流「ビル人句会の思い出」。層雲作品抄、昭和初期11（伊藤雪男他）。
四月、小玉石水「漱石と放哉とシェークスピアと」。浄心寺良惇追悼。
五月、層雲賞・（評論）小玉石水。大竹大三内久根聖巳さんの句」。木下信三「圭之介幻想」。伊藤完吾「東京の句会」。
層雲全国大会（京都市）。
六月、層雲賞・田中伸和。新人賞・菊地正治。
小玉石水「短律俳句の形式的考察」。
七月、瓜生敏一「層雲作家の個人句集」。
木下信三「抱壺と山頭火」1。
八月、下村直樹「詩に触れてみる」。
九月、椿山雁「コンピュータ俳句」。
十月、小玉石水「中島棹郎」層雲史余話。大月喜三郎追悼、句と略歴。木下信三「抱壺と山頭火」4終。

寒さ居坐るロボットの声に抑揚がない　池田実吉
きしきしと己れの闇を切り裂いてゆく汽笛　藤田踏青
明るい光さし雲が決断する冬のエピローグ　高垣吉江
さらさら雪の壁に溶けたダリの時計　菊地正治
台所の萎びたナスビ　ここら少年愛護地区　下村直樹
どこかの海で油槽船が燃えている夕焼　岸本久寿
沖の難破船報じラジオ引き続き浄瑠璃　中條恵行
はるなつあきふゆわれはいらくさ　関口父草
昏れても暑熱衰えず月が浮力をもつ　清水福司
炎暑をはればれと泣く赤子だ　伊藤完吾

十一月、北田傀子「自由律俳句の名称について」。筒井風茎亭「興味ある対照」。和田光利「海藤抱壷全句集から」。
十二月、戦後の層雲一〇〇句抄（1）連載（松尾あつゆき他）。小玉石水「俳句とその詠うべきのも」。

○同人動静
二月、荻原　井泉水図録『面影』刊。
端湖国『コスモス菩薩』刊。
浄心寺良惇没（86歳）。
五月、『飯島一彦遺稿抄』刊。
六月、広橋求堂没（73歳）。
八月、大月喜三郎没（88歳）。
九月、海藤抱壷『海藤抱壷句集』刊。
十月、塚田虹子句集『静かなる螢の明滅』刊。
十一月、滝井孝作没（90歳）。
十二月、佐瀬茶楽句集『こぼれ菜』刊。和田光利句集『白頭鷲』刊。

〈この年〉
インド首相ガンディ暗殺（67歳）。
渋沢秀雄没（92歳・随筆）。
長谷川一夫没（76歳・俳優）。
今日出海没（80・評論）。
新紙幣（一万円札他）発行。
有吉佐和子没（53歳・小説）。

休みなくながれる砂に太陽を埋める　三好草一
非核非武装の盛夏甚平素肌に引っかけ　淺沼参三
馬三百円兵一銭五厘の軍服日に干す　小玉石水
富士に残照太陽明日へ急がねばならぬ　小林仁子
冬の風格が春にくずれようとするとき　日向野秀策
冬の銀河からきて一本の欅の白いシルエット　田岡柳甫
不景気と春風にゆらりテロリストが生まれる　松原トヨ子
工事の音うるさくて恋がこんぐらがってしまった　段証尚子
おやすみなさいいって童話の中にはいってゆく　藤本一幸
バカ笑いするな敗戦文化かな　椿山雁

○層雲紀要

一月、戦後の層雲一〇〇句抄（2）（岡野宵火・北田千秋子・滝山重三他）。伊沢元美「瀧井孝作の文学」。
二月、層雲九州大会（宮崎市）。
三月、木下信三「海藤抱壺ノート」。三浦石雨「句集『白頭鷲』を読む」。山形凡平追悼、句と追悼文。嵐雪人「自由律俳句のために」。
四月、尾崎放哉生誕百年特集、小玉石水、伊沢元美、井上三喜夫他。
五月、井上三喜夫「楠が若葉するとき」。瓜生鉄二「東京生命保険株式会社時代の放哉」（2）連載。小玉石水「光利句集『白頭鷲』評」。近藤てつのすけ「そおうん美術館」（1）連載。
層雲全国大会（米子市）。
六月、層雲賞・池田実吉。
長谷川雅明「自由律俳句のために」。
七月、小玉石水「第二芸術論と俳句の道」1。座談会「層雲昭和史（初期篇）を語る」。嵐雪人「嫁がせて」作品鑑賞。日向野秀策追悼、句と追悼文。
八月、終戦四十年記念「戦中戦後の思い出の一句と当時のわたくし」。
九月、木下信三「佐久より長府へ」。
日向野秀策追悼会（小山市）。

黒く見えるのは咽喉に軍歌がねじれたまま　近木圭之介

人工衛星紛れこみ憂鬱な春の星座　中條恵行

黄色い接着剤しぼりだし過去つぎあわす　松本久二

原爆忌向日葵より低く老婆行く　伊沢元美

夏空に一本煙突の敗戦を見た　伊藤完吾

雷きて干潟の人数炎えあがる　本岡八十八

放心の過去を啼き八月の夥しい空蟬　藤田踏青

干潟の側面で戦争はゆっくり濡れてくる　吉岡憲生

流れに逆う女の旗のその小さな旗をもつ　高垣吉江

月を切ったナイフの瑞々しいその色　斉藤玉枝

十一月、下村直樹「魔笛吹く司祭」圭之介詩抄評。

○同人動静

一月、山形凡平没（78歳）。
三月、下村鳴川句集『有帆川』刊。
四月、『藤本一幸自由律俳句五十句帳』。瓜生敏一『森有一翁の思い出』冊子刊。市川亜泉句集『翼粟』刊。
五月、近木圭之介『近木圭之介詩抄』刊。日向野秀策没（76歳）。
六月、山頭火研究会『山頭火句碑集』刊。山本木天蓼句文集『歳々年々・続晩年』刊。
七月、井泉水草画ハガキ『鎌倉の寺々』。和田光利編句歌集『二三子とわに生く』刊。高橋政二句集『羅漢』刊。
八月、藤本一幸『海市』創刊。
十二月、住宅顕信句集『試作帳』刊。勝呂和三郎句集『西伊豆界隈』刊。山本蒼天没（89歳）。

〈この年〉

石川達三没（79歳・小説）。
野上弥生子没（99歳・小説）。
笠置シズ子没（70歳・歌手）。
日航ジャンボ機墜落。
桜島南岳連続噴火。

金属が殺気だつほどに稲妻冬を走り	伊藤完吾
立ち上がればよろめく星座	住宅顕信
病む視線低くつばめが飛ぶ	〃
ひよこ夜店の景品には生まれてくるな	端湖国
朧夜の葉桜が暗示する硝煙の匂いだ	吉岡憲生
霧が悠然と辛夷を神に近づける	藤本一幸
すきま風ぬける女心をポリス家宅捜査す	段証尚子
神はゴッホの前にきいろで現われた	松原トヨ子
国鉄分割が吊革にゆれている	田中倍雄
敗戦を終戦と言いくるめまして御名御璽	池田実吉

○層雲紀要

一月、戦後の層雲一〇〇句抄（11）小玉石水「プロレタリア俳句作家群像」1。後記　総合俳誌年鑑号紹介。

二月、山本蒼天追悼、句と略歴。後記、NHKテレビドラマ「海も暮れきる・小豆島の放哉」のこと。

三月、層雲九州大会（佐賀市）。

四月、筒井風茎亭「先人墨跡余滴」。長谷川雅明「自由律余聞」。

五月、井泉水「楽三回」余聞1。大竹大三「先生晩年の言葉におもう」。小玉石水「井泉水遺訓」俳句の定義。伊沢元美編「層雲史から見た井泉水の作家文学関係者との交友リスト」。井泉水回顧（井上三喜夫、井上有紀男他）。

六月、新人賞・小部順子。

七月、小玉石水「山頭火慕情」。近木圭之介「森だより港だより」作品。井上三喜夫「近木圭之介の世界」。

八月、志摩芳次郎の「俳句人」文章について層雲の見解特集。小玉石水「暴論に対する論理」。反論（大竹大三、井上三喜夫、近藤てつのすけ、伊沢元美、筒井風茎亭）。

九月、戦後の層雲一〇〇句抄（17）終。層雲団塊の世代作品特集（清

煙突を折れて出る煙の風になる態　中條恵行
赤に黒い斑点のある春の多情な落日　三好草一
花から花へ喪章つけてゆく蝶の原爆忌　渡野辺朴愁
月をもいで枕元　高田弄山
大樹涼しく吾が体臭にうずくまる犬　中條恵行
胃カメラ過去を映し月夜のバラは白かった　西川ふじ子
飢えくぐりぬけた親と飢え知らぬ子の断絶　細川草里
もう体内の色を風が好餌しはじめた春　椿雁
破れた蝶　喪の記号に似ていた　近木圭之介
働いて腹立てている　林和好

水逸夫他）。団塊世代からの発言十月、団塊世代からの発言2。座談会「層雲団塊の世代」。
十一月、木下信三『海藤抱壺覚書』。筒井風茎亭「戦後の層雲一〇〇句抄」評。層雲団塊の世代作品選評。
十二月、伊藤完吾「思想　シンドローム」。

○同人動静

一月、瓜生敏一『中塚一碧楼』刊。NHKテレビドラマ「海も暮れきる・小豆島の放哉」放送。
三月、『近木圭之介句抄』刊。
四月、三好草一句集『音のない楽隊』刊。
五月、遠藤虹水句集『回想』刊。
八月、北村冬陽（83歳）。
十月、和田光利句集『筆勢不二を観る』刊。鉄鉢の会東京公演『うしろ姿のしぐれてゆくか　山頭火』。
十二月、瓜生鉄二『尾崎放哉』刊。

〈この年〉

梅原龍三郎没（97歳・洋画）。
石坂洋次郎没（86歳・小説）。
チェルノブイリ原子力発電所　大事故。

降っても照っても土はかわいいぞい	南沢延江
春風の重い扉だ	住宅顕信
夜が淋しくて誰かが笑いはじめた	〃
真ひる昼顔　少年ポケットに湖を眠らせ	浅沼参三
鎖の夜　犬が引きずってくる	藤田踏青
夕暮に刃物美し　わたし少女期の震えに触れ	段証尚子
風船かずらの社交性流れる雲につるした	吉岡憲生
端正な配列。ひとりづつ銃殺	松原トヨ子
骨哄笑しない　女焔となりました	近木圭之介
神のいない粗野な樹に一ト日になりたい	〃

○層雲紀要

一月、木下信三「海藤抱壺覚書」3終。渡野辺朴愁「先達の句集に触れて」書評。井泉水「楽三会」余聞2。井上三喜夫「俳句の国際的可能性について」。

二月、小玉石水「層雲における農村作家と信州の作家たち」。筒井風茎亭「山頭火声望のかげに」。

三月、作家研究・南沢延江らの農村作家（諸家）。森下伽羅甚「仁平　勝著『詩的ナショナリズム』感想」。木下信三「圭之介断想」作品評。層雲九州大会（長崎市）。

四月、親井牽牛花追悼、句と略歴。住宅顕信追悼、句と追悼文。作家研究・田中倍雄、吉岡憲生（諸家）。

五月、作家研究・松原トヨ子、段証尚子（諸家）。後記、「俳壇年鑑」87年紹介。

六月、層雲賞・吉岡憲生。新人賞・藤本一幸、伊藤千代子。

七月、作家研究・近木圭之介（諸家）。

八月、『戦後の層雲一〇〇句抄』感想、関口比良男。

九月、作家研究・高垣吉江（諸家）。

十月、作家研究・江口一夫、河内登美子（諸家）。

十一月、作家研究・麗日集作家評（諸

夕日が射すだけの部屋で一生なにをしていた　（自嘲）　和田光利
春へ発熱する稜線浅間を主峯とする　林　隆一郎
体ぶっつけてたどる道が減反　林　和好
死も生もただ今日の畑打つ　西田千世
ダイヤモンド婚されど一夢の中　井上阿弥坊
センチメンタルジャニー熱い焼芋にバターをのせる　中條恵行
酔いしれて流刑の一人となる駅のベンチ　清水青牛子
敗兵のこれ生きのびて書く反核署名　田中倍雄
炎天の慟哭　蟻がかついでいく　木本千鶴子
コピーの様な手を職工は採決に挙げます　梶田鴻邦

家）。木下信三「海藤抱壺消息」1。十二月、戦中戦後の青春群像推薦作品・（諸家）。

○同人動静

一月、親井牽牛花没（79歳）。
二月、住宅顕信没（25歳）。山本木天蓼没（83歳）。池原魚眠洞没（93歳）。
三月、『紫童句碑記念誌』刊。高垣吉江句集『転生』刊。小玉石水、伊藤完吾編著『戦後の層雲一〇〇句抄』刊。
四月、『自由律俳句の草創期』松山市立・子規記念博物館発行。
五月、山本木天蓼遺句集『想夫恋』刊。
六月、事務室を鎌倉に移す。
瓜生敏一『思い出す人々』刊。
七月、加藤智曲、音楽テープ『山頭火の世界』刊。
八月、工藤土筆句集『あしあと』刊。秋山巌『板画・山頭火』刊。
十一月、三好千峰句集『日月』刊。伊藤みどり没（81歳）。菅崎道雄没（64歳）。平松星童没（60歳）。

〈この年〉
鶴田浩二没（62歳・俳優）。
国鉄分割し、JRグループ発足。
石原裕次郎没（52歳・俳優）。
砂原美智子没（64歳・オペラ歌手）。

捨てられた人形が見せたからくり	住宅顕信
お茶をついでもらう私がいっぱいになる	〃
枯野　折れているカタカナの茎	藤田踏青
我が靴下は汚れて遺書の形となり	〃
とんび追う鴉が野も山も騒然と芽ぶき	岸本久寿
死も美しと思うひょうたんが窓にある	〃
山の手線でぐるぐる回るかなしい黄色い手	段証尚子
けさ東京に　鴉とダイアモンドと驟雨あり	〃
浮かび出て首振る鵜よお金欲しいな	中條恵行
核廃絶ほど遠い基地の獣めく夜光塗料	田中倍雄

○層雲紀要

一月、年間自選作品。戦中戦後の青春群像作品鑑賞2（諸家）。

二月、戦中戦後の青春群像作品鑑賞3（諸家）。伊藤みどり、菅崎道雄追悼、句と追悼文。

三月、年間自選句展望。

四月、住宅顕信句集『未完成』鑑賞

五月、井泉水十三回忌特集。伊沢元美「井泉水俳論の展望」。小玉石水「井泉水年譜追録」。井泉水作品鑑賞。（諸家）。層雲全国大会（坂出市）。句集『未完成』鑑賞（続）。

六月、新人賞・清水青牛子、中条恵行。特別作品賞・住宅顕信句集『未完成』。井泉水十三回忌特集続（諸家）。宇多喜代子「遠い春へ」『未完成』感想。後記、「俳壇年鑑」。

七月、句集『未完成』鑑賞続（諸家）。下村直樹「小説『二号線のうた』」。

九月、九百号記念号（八・九合併）特集。層雲今後の課題（諸家）。荻原井泉水全著作解題総覧。近木圭之介画「イラストで読む層雲名句展」。九百号協賛特集。

十月、句集『針のめど』『教会のオルガン』鑑賞（諸家）。東条成彬「井泉水『原泉』を読む」。笹野儀

息を吐く　生ある限り錆ひろがる　近木圭之介

小指がきれいだ　死ぬことないのに　〃

ポストの赤い口師走の風も投げこんでゆく　中谷みさを

不治の人見舞った日妻強く抱く　平田栄一

陽炎のひずみでおんぼろ自転車、芽ぶく　吉岡憲生

剥製の鳥　春が深呼吸する　淺沼参三

風の中に箪笥捨ててある　由川うしほ

なんとしたことだ　東京湾の黒い鮫　伊藤完吾

かみなりめよるのよなかにしろいへどはく　関口父草

夏へ賭ける百姓の朝は雀より早い　林和好

一「観念の海を潜って」。この号から徳島市の第一出版で印刷。十一月、木下信三抱壺と『椿』誌」。小玉石水「墓のうら」(1)放哉の人と作品連載。伊藤完吾「山頭火劇あれこれ」。笹野儀一「花園を荒廃させるもの」俳壇と歌壇時評。十二月、九百号記念号感想（諸家）。伊藤完吾「自由律の方途」。藤本一幸「光ふたたび」。

○同人動静

二月、本岡八十八句集『四本谷』刊。住宅顕信句集『未完成』刊。三好草一句集『草一年間句集2』刊。四月、秋山巌画集『酒仙の句』刊。五月、三好米子句集『教会のオルガン』刊。池田実吉句集『針のめど』刊。六月、伊沢元美『採芳巡礼』刊。大山澄太『生死の中の山頭火』刊。十月、加藤智曲『山頭火を歌う』歌・朗読テープ。（立風書房）十一月、菅崎道雄句集『月の偶然』刊。

〈この年〉

宇野重吉没（73歳・俳優）。桑原武夫没（83歳・フランス文学）。山本健吉没（81歳・文芸評論）。草野心平没（85歳・詩人）。

鶴くる空を心のどこかに何時も病む父　中谷みさを

星降る夜の森の遠くに鳴りやまぬ喝采　岩切東籬

錆びた咳が出る冬の夜の胸さわぎ　伊藤完吾

湖の虹美しき別れ哉　塚田虹子

上ミ御一人万骨かれて冬しょうじょう　小玉石水

マネキン黒衣にし銀座通り音楽がない　金子美代

浅間晴れて何事もなかったように昭和逝く　林隆一郎

顔半分は笑っているか般若の面　由川うしほ

言葉は隠れる事も知っている　藤田踏青

或る言葉がわたしを不透明にした理由　天野登志子

○層雲紀要

一月、年間自選作品。層雲年表（昭和六十三年まで）。特別作品（諸家）。

二月、下村直樹「一行の詩よ」。伊藤完吾「新年号年間自選作品総評」。若手有志「新春若手放談」。杉田井蛙追悼（山口保明）。

三月、句集鑑賞・伊藤みどり著『青葉あかり』。菅崎道雄著『月の偶然』（諸家）。角森利夫「句と随想」。

四月、今なぜ山頭火なのか（諸家）。NHKドラマ「山頭火」紹介。木下信三「山頭火伝説のこと」。

五月、井上三喜夫「五月の空」。山頭火特集（2）。伊藤完吾「山頭火アンケートから」。田中四郎「山頭火句碑・続報」。小玉石水他『随翁井泉水秀句鑑賞』を読んで。全国大会（箱根）。

六月、藤本一幸「阿波路の山頭火」。昭和六十三年度層雲賞、段証尚子・岸本久寿。新人賞、山本那智夫。

七月、池田実吉追悼特集（福島昌山人他）。池田実吉句抄。

八月、佐瀬茶楽追悼特集（相京晴樹他）。伊藤完吾「昭和俳句検証」さまざま。佐瀬茶楽30句。全国大会報告。

九月、伊沢元美「井泉水の言葉」。小玉石水「句集『草心』編集余香」。

昭和終った日のみんなひとつの顔になり　段　証　尚　子

幼児いじる性器火器快感　中　條　恵　行

一生バッタでいいから青草の道にもどせ　比田井　白雲子

はるくれてくるほどのかなしみをもつ　井　上　阿弥坊

日付のない暦背負(しょ)って逃亡しようか　近　木　圭之介

昭和痙攣すとんと落ちた三島の首　松　原　トヨ子

恋に恋した頃もあった洗い晒しのTシャツ　平　田　栄　一

みぎも　ひだりもない　こころ　まんなか　関　口　父　草

山頭火がくるラジオは南東の風風力3　青　木　久　生

うなぎ裂かれる日の太陽いびつに沈む　久　光　良　一

渡辺砂吐流「山頭火寸景」。

十月、故・真鍋竹灯句抄。藤本一幸他「真鍋竹灯追悼特集」。特集・層雲昭和代表句600句。（十二月号まで）。時空間（これより毎号）。

十一月、淺沼参三他「層雲昭和名句鑑賞」。

十二月、小玉石水他「テレビドラマ『山頭火』感想」。下村直樹「そうぅん博物誌」。

○同人動静

二月、佐瀬茶楽著『随翁井泉水秀句鑑賞』

四月、池田実吉没（69歳）。

五月、佐瀬茶楽没（84歳）。

荻原井泉水・伊藤完吾『山頭火を語る』刊。

六月、大越吾亦紅句集『草心』刊。

九月、野村朱鱗洞句集『禮讃』刊。

十一月、大竹大三没（74歳）。

十二月、小沢武二句集『気球の表情』刊。

田中四郎著『山頭火句碑集（二）』

〈この年〉

昭和天皇没（87歳）。

手塚治虫没（60歳・漫画家）。

鈴木信太郎没（93歳・画家）。

美空ひばり没（52歳・歌手）。

砂丘にことばうめてきた　小玉石水
寒い蝶支離滅裂に飛ぶ他ない　中條恵行
木の実が鳴るのは無意味におもえたが　近木圭之介
パン屑ぽろぽろ果てしなく星座ひろがる　清水福司
月がすき、雲がすき　人がすき　南沢延江
手をこまねいている者はいつの世も貧しい　細川草里
抛りたい石がいつまでも手の中にある　岩切東籬
何処までも夢を捨てないふんころがし　由川うしほ
白菜さくさくきざみさわやかな忘却もある　松本千英子
啓蟄のマンホールから人が出て来た　西川ふじ子

○層雲紀要
一月、年間自選作品。井上有紀男他「NHKドラマ〈山頭火〉感想」。山口穂銘「層雲九州大会の記」。
二月、大竹大三追悼（諸家）。
三月、年間自選作品選句と選評（諸家・編集室）。三浦石雨他「この十句」鑑賞。
四月、近木圭之介他「層雲叢書に学ぶ1　選句と感想」。平田栄一「青年句会報」（この号より連載）。江口一夫他「本岡八十八さん追悼」。
五月、淺沼参三他「層雲叢書に学ぶ2　選句と感想」。藤本一幸他「詩句集『遠い花火』評」。伊藤完吾「俳句集『十年』感想」。
六月、年間賞発表、層雲賞・阿川花子、新人賞・平田栄一。受賞作品と選考経過。伊藤完吾「俳界時評」。
七月、放哉・山頭火特集。伊沢元美「放浪詩人について気になること」。小玉石水「二人の違い」。木曽聡「二人の世捨人」。近木圭之介「山頭火うしろ姿考」。伊藤完吾「時の流れの中で」。
八月、編集室「層雲全国大会報告」。松岡一枝「干柿のたね」。比田井白雲子「原爆忌」。種子島千代子「夫を失う」16句。
九月、層雲叢書に学ぶ（諸家）。伊藤完

モノクロの世界は長い間平和だった　段証琴子

堰を切って巌に慟哭す　（夫を失う）　種子島千代子

心切なれば風石に鳴る　中谷みさを

爆心地の手ざわりレモン一つ置く　（原爆忌東京大会）　淺沼参三

いなずまの未完の青さ　しびれます　伊藤完吾

にがきおもいをひのこにやくなつ　松岡月虹舎

炎天に怯え人は一つずつ黒い影もつ　三好草一

透けた胸に蜘蛛の糸がはりだした　いまきいれ尚夫

夏雲仰いでいたらああほんとにご免なさい　青木久生

酸性霧一人を殺し　一人ずつ殺し　近木圭之介

吾「鬼無里村の半鐘」。新進作家作品。十月、伊藤完吾「放哉劇を観て」。小玉石水「放哉文庫」と取り組んで。いまきいれ尚夫「音楽・映画」。井上三喜夫「沈丁花（随想）」。十一月、伊沢元美「麻布雑記」。種田山頭火他「ふるさとの味・うどんの句」（解説・伊藤完吾）。十二月、「特集一九九〇年をふりかえって」（諸家）。渡辺七穂子「松山の恋人探し」。井上敬雄「詩人八木重吉の生家を尋ねて」。

○同人動静

六月、大橋裸木句集『陽へ病む』刊。七月、甘利一童没（65歳）。九月、田村光句集『霧笛』刊。十二月、塚田虹子没（86歳）。井上三喜夫没（86歳）。三枝重峰没（91歳）。

○その他

一月、井泉水遺語集。『井泉水の言葉』刊。

〈この年〉

池波正太郎没（67歳・小説）。幸田文没（86歳・小説）。土門拳没（80歳・写真）。ドイツ統一なる。

月忽ち一匹の猫を捕える　小林星人

馬の腹　洞窟の火あかくもえ　いまきいれ尚夫

こがらし、それからカラスもせきをした　南沢延江

半かけの月で二人がひとりになった時のこと　千葉勝子

過労死認定セズ花曇リノ朝ノ常夜灯　平田栄一

新聞を放り投げてある　戦争も　藤田踏青

墨を擦る墨の中より鵜が首を出す　中條恵行

田畑を捨てれば嫁来るのかな　林隆一郎

ダイヤルOからはじまる黄昏の不安　木本千鶴子

生命の写真　砂丘も波も燃えている　山上清子

○層雲紀要

一月、年間自選作品（平成二年度）。特集・層雲一九九〇の紙面から（次号も）。

二月、近木圭之介「山頭火句碑建立顛末記」。芦ケ原恵子「岡野宵火の生家を訪ねて」。

三月、年間自選作品推薦句（青木久生他）。井上三喜夫追悼特集（句抄と諸家文）（諸家）。塚田虹子追悼特集（句抄と井泉水・諸家文）。

四月、創刊八十周年特集（1）。層雲史に残したい十句（アンケート）。上田都史他諸家の文。層雲史ダイジェスト（1）年譜と代表句（次号も）。

五月、創刊八十周年特集（2）。層雲名句鑑賞（諸家）。新人作家群。全国大会鑑賞（諸家）。『層雲自選句集第五』刊。

六月、層雲年間賞発表（層雲賞・松本千英子、清水福司）。選考経過と推薦の言葉（三好草一他）。新人群像作品。

七月、伊沢元美「麻布雑記」。木下信三「山頭火書簡考」（上）。全国大会報告（藤田踏青他）。書評（諸家）。

八月、特集・和田光利追悼。句抄と追悼文（三浦石雨他）。「荒海の屋

冬しんしん木木みな逆しまに胸に坐る日　中谷みさを
人生って、冬空ポケットに凍らせ　田村光
呻きどよもす五臓六腑の地の果てよ　関口父草
独り黙りこんで戦を見ていた　伊藤完吾
暗澹と　つばき　満開　椿雁
医師国家試験合格　中華鍋火柱上げ　西川ふじ子
月炎える　私未来図どうあろうと　近木圭之介
老衰死　カメレオンが鏡の中　青木久生
山の怒り術（すべ）なし小さなヘリ旋回する　植原宮子
ほんのり星になりかけている女のゆびさき　藤田踏青

根屋根」評（田中伸和他）。「ケロイド」評（いまきいれ尚夫他）。九月、特集・渡辺砂吐流追悼。追悼文（小玉石水他）。層雲新進作家作品。新進作家紹介（三好草一他）。平田栄一「現代俳句の方向性」。十月、関口比良男「自由律その宿命」。新進作家作品評（平田栄一他）。木下信三「山頭火書簡推考」（下）。十一月、編集余話「自由律への諸論」（伊藤完吾他）。中堅作家作品（淺沼参三他）。十二月、伊藤完吾「ことしの話題（自由律探訪）」。西川ふじ子「井の端の会名句鑑賞。淺沼参三「土は生きている」感想。

○同人動静

一月、河本緑石句集『荒海の屋根屋根』刊。井関冬人没（84歳）。二月、松尾あつゆき句集『ケロイド』刊。三月、内島北朗句集『土は生きている』刊。四月、西川ふじ子句集『女の歳月』刊。五月、音楽テープ『層雲名句館』。。六月、日向野秀策句集『村の一本松』刊。和田光利没（87歳）。七月、関口　父草句集『父子草』刊。渡辺砂吐流没（92歳）。

海蝕の崖に現われるモンペ姿の落下　中條恵行
秘密結社めいて過疎地の水族館　藤田踏青
口紅なに色、風の耳打ち気になる夕べ　中谷みさを
てる日くもる日あなたの胸の潮騒聴いた　松原トヨ子
石が過した歳月を、人が腰かけている　西川ふじ子
ふるさとは曲った道や川がいい　林和好
今見てきた海の色を君に話そう　黒崎渓水
春雷一発欲しい体調になっている　由川うしほ
飽食暖衣、超高層にほろびの歌　和亭無頼
白き心陽に透かし白きものピンと干す　植原宮子

○層雲紀要

一月、91年を振りかえって（小玉石水他）。層雲中堅作家作品感想（田中伸和他）。層雲九州大会の記（吉岡憲生他）。伊藤完吾「風評宣言（1）」。

二月、91年の誌面から（淺沼参三他）。よかった句や文章（松岡月虹舎他）。三好草一「書評（父子草）を読んで」。近木圭之介「層雲中堅作家作品評」。

三月、年間自選作品推薦15句（諸家）。伊藤完吾「自由律探訪」。三好草一「一句のねだん」。

四月、井泉水「骨と肉とに就いて」。平田栄一『自由律俳句とは何か』をめぐって。鞭不木「松尾あつゆき句碑を訪ねて」。飯島昌「物置小屋通信」。

五月、自由律俳句の方向（井泉水の言葉）。平田栄一「創句に促されて」。松岡矩男「寺山修司コレクション」。小池能幸「層雲の光明」。

六月、層雲賞受賞作品（中条恵行・藤田踏青）。年間賞候補作品（諸家）。層雲賞発表・推薦のことば（三好草一・近木圭之介他）。端湖国・風間北光追悼特集。

七月、吉浦俊雄「層雲米子大会の記」。伊藤完吾「白い画像（内田創平記）。山田悠光「みちのく詩人」（光利忌）。

八月、（終刊号）特別作品。小玉石

へんに哀しい街だ　人と太陽の匂い　近木圭之介
何もしたくない日はぐっすり死んでいる　小川未加
青空はいつも臨月です　いまきいれ尚夫
笑い声かと思ったら貝殻とピアスの片っぽ　青木久生
時が人を奪って去る前ぶれもなく　山上清子
誰もいない丘へ気球が流されてきた　伊藤完吾
星を飲みこんだ深夜の水音　比田井白雲子
じっとり発作（いたみ）耐え　闇にメロン熟れ　浅沼参三
山のてっぺんまでバブルの灯がつく　林和好
発狂寸前夕日が落ちた　平田栄一

水「放哉博捜」。伊藤完吾「自由律探訪（朔太郎と井泉水）」。
これより「層雲社通信」として鎌倉より隔月発行。
1号（九月）、伊藤完吾「層雲終刊と層雲社通信のこと」。「俳壇」特集に名を借りて。
2号（十一月）、句集「黒蝶」評（中谷みさを他）。「声」通信文。

○同人動静
一月、小玉石水『山頭火慕情』刊。
日向野千一路没（82歳）。
四月、端湖国没（88歳）。
風間北光没（78歳）。
五月、鶴田育久句集『あいぞめ』刊。
七月、種子島千代子句集『黒蝶』刊。
八月、上田都史没（85歳）。
十二月、田村光没（82歳）。

〈この年〉
長谷川町子没（72歳・漫画）。
松本清張没（82歳・小説）。
バルセロナ五輪。
いずみたく没（62歳・作曲）。
中村八大没（61歳・作曲）。
米宇宙実験成功（日本人毛利衛同乗）。
学校の週休二日制はじまる
阿波野青畝没（93歳・俳句）。

みちしるべちょうがまがった　細川草里
ジッパーを下ろそうとする　無限大　藤田踏青
淋しいので　あたたかーいのボタン押す　久光良一
海へ出た風が翼を拡げる　中條恵行
霧に消えた吐息など誰も知らない　中谷みさを
遠く時計台　疑わしき時刻をうつ　青木久生
小さな地球にもぐらたたきはじまった　三好千峰
コインロッカーの遺失物、脳味噌　和亭無頼
娘が羽化を始めた　小池八巧水
匙のシュガー　過去抹殺の致死量だ　小川未加

○層雲自由律紀要

3号（一月）、年間自選作品。種子島千代子句集『黒蝶』鑑賞文（諸家）。伊藤完吾「山頭火俳句大賞のこと」。前号選評（諸家）。山岡敬典「頸信俳句とその周辺」。小玉石水「放哉異見一覧」連載。加賀谷灰人「上田都史追悼」。緑川真澄「巷の言語学」連載。後記「今年の課題として」。

4号（三月）、特集・テーマによる自由律作品分類1「都市の作品」。「自由律」キーワード考（諸家）。年間自選作品感想（諸家）。前号選評（諸家）。田村光遺句抄。

5号（五月）、テーマによる自由律作品分類「都市の作品」2。特別作品（松原トヨ子他）。首都圏口語俳句大会。前号選評（諸家）。

6号（七月）、テーマによる自由律作品分類3「農漁村の作品」。テーマ句（小林星人他）。木本千鶴子「牛十句鑑賞」江良碧松句集「松吹く風」より。前号選評（諸家）。

テーマ・農漁村、推薦作品（諸家）。

7号（九月）、特集・テーマによる

カラクリ霧の中　晴れたらいいね　木本千鶴子
ずっしり重い腰になってかつぐ　南沢延江
目を瞑って巨木を聴いている　沖星領
脳裏に土くれの腕が出ている　いまきいれ尚夫
太陽と働けば一人の敵もなし　林隆一郎
虚構ノ美シサ触レレバ風ニナル　近木圭之介
野獣一匹棲まわせ薔薇の家　平田栄一
太陽顔を見せぬ日のひまわりうなだれ　小林仁子
いのち緋ともえる曼珠沙華ひゃっぽん　浅沼参三
冷夏おろおろ小さな町の大きな事件　植原宮子

自由律作品分類4「戦争と平和」。特別作品評。浅沼参三「自由律俳句における短律句について」。小玉石水「自由律俳句に関する発言を受けて」。前号選評（諸家）。沖星領「八巧水と（短律）考」。8号（11月）、テーマによる自由律作品分類5「愛のかたち」（1）。年間優秀推薦作家（小川未加、南沢延江）。前号選評（諸家）。浅沼参三「書評・尾崎放哉全句集」。小玉石水「放哉の笑い」（連載）。

○同人動静

三月、小池八巧水句集『未成年』。四月、西田千世没（81歳）。七月、伊藤完吾・小玉石水共著『尾崎放哉全句集』刊。

〈この年〉

安部公房没（68歳・小説）。加藤楸邨没（88歳・俳句）。猪熊弦一郎没（90歳・画家）。北海道南西沖地震。井伏鱒二没（95歳・小説）。はがき50円、封書80円となる。『短歌俳句川柳101年』刊（新潮社）。

ずしりと私の事件簿。あま酒喉をやく　中谷　みさを

私の何処かで夜ごと正体不明の風ふく　田中　倍雄

午前四時　ボールペン使い切る　松岡　月虹舎

混沌の街公証役場の厚きドア　天野　登志子

大きな鼻だ法王庁の冬がきしんでいる　淺沼　参三

闇ノ方カラ舌タラシコツコツ砲車ガ　近木　圭之介

ピカソが好き横から縦から斜めから　小林　仁子

街の雑踏と人間臭さ新宿鮫が泳ぐ　西川　ふじ子

親になり神になり子を選別す　松原　トヨ子

満天　北極星と同心円です　いまきいれ尚夫

○**層雲自由律紀要**

9号（一月）、年間自選作品。特集・テーマによる自由律作品分類「愛のかたち」（2）。小玉石水「放哉の笑い」（連載）。愛の句鑑賞・諸家。淺沼参三「我が愛する獲物たち」。青木久生「一好活魂展を観る」。

10号（三月）、特集・わたしと青春、句・近木圭之介他。青春作品鑑賞・中条恵行他。南高新春句会報告。

年間自選作品話題句。沖星領「自由律の心とは」。自由律探訪。書評・淺沼参三「里の子日記」。伊藤完吾「拾い読み時評」。

11号（五月）、淺沼参三句集『金環蝕』鑑賞1・藤田踏青他。層雲史作家研究1「栗林一石路句抄」鑑賞・江崎美実他。山頭火ドキュメンタリードラマ「風のさすらい」感想・藤田踏青他。

12号（七月）、層雲史作家研究2「七戸黙徒句抄」地方作家の系譜・伊藤完吾、鑑賞・細川草里他。淺沼参三句集『金環蝕』鑑賞2・下村直樹他。

13号（九月）、層雲史作家研究3「芹

今日の海の色を話してくれないか　黒崎渓水
淋しさは夜の卓球台
父の土筆母のつくしと摘んでゆく　小池八巧水
鉄のカーテン崩したヒマワリ畑の明るさ　藤田踏青
瑞々しい咀嚼は朝食　鸚鵡のおしゃべりテラス　山上清子
骨が乾いている寂しさ
もう笑うな　あばらが不気味だ　小川未加
静寂は　蝶が破った　新城宏
星明りに探る落しもの　まこと　夢　唇など　高田弄山
うなぎ裂かれる日の太陽いびつに沈む　比田井白雲子
青木久生
久光良一

田鳳車句抄」雲の音周辺・伊藤完吾、鑑賞・淺沼参三他。
俳句レポート特集「平成コメ騒動顛末」伊藤完吾。
おコメ発言・久光良一他。今年の美術館から・いまきいれ尚夫。
14号（十一月）、層雲史作家研究4「海藤抱壷句抄」抱壷への視線・伊藤完吾、鑑賞・中谷みさを他。
平田栄一著『今を生きることば』書評・淺沼参三。

○同人動静
三月、淺沼参三句集『金環蝕』刊。
四月、西田千世句集『小さな灯』刊。
六月、小玉石水『海へ放つ　尾崎放哉句伝』刊。
八月、松岡一枝『里の子日記』刊。
瓜生敏一没（84歳）。

〈この年〉
山口誓子没（92歳・俳句）。
中華航空機墜落事故（名古屋空港）。
吉行淳之介没（70歳・作家）。
関西空港開港。
女性宇宙飛行士誕生（向井千秋）。
被爆者掩護法成立。
大江健三郎ノーベル文学賞受賞。
北朝鮮、金日成没（82歳）

月烈烈断水ノ街、犬帰ル　近木圭之介
肉が骨が無防備　冬銀河　〃
喪中につき季語から暫く離れます　藤田踏青
燃え尽きたダリの夜が明ける　〃
「父この下です」写真にペットボトル水　小川未加
一生ひきずるだろう　この虚無感流木めき　〃
無事か無事か無事か無事だったか　中條恵行
阪神激震　脳　液状化　小池八巧水
日本列島のふがいなさを見た　南沢延江
首相の眉毛ほど救援のびず尚余震　古市群青子

○層雲自由律紀要
15号（一月）、年間自選作品（平成六年度）。層雲史作家研究5「和田光利句抄」鑑賞・伊藤完吾他。山頭火墓詣・松岡月虹舎。16号（三月）、震災特集1「大震雑記」上・井泉水。震災句。自由律作家研究「近木圭之介40句」、「星童・翠壷洞から圭之介へ」平田栄一。層雲史作家研究6「飯島翠壷洞句抄」翠壷洞断片・伊藤完吾、鑑賞・小林星人他。層雲史作家研究7「平松星童句抄」平松星童・伊藤完吾、鑑賞・松原トヨ子他。17号（五月）、震災特集2「大震雑記」下・井泉水。震災句・小川未加他。自由律作家研究「平田栄一句抄」、「平田栄一・変転する句世界」藤田踏青、「神と人のはざま」平田栄一論・淺沼参三（その他の鑑賞・関根巧他）。18号（七月）、終戦50周年特集1小玉石水他。特集2原爆句・淺沼参三他。自由律作家研究「藤田踏青句抄」作品寸評・平田栄一。「ダンディズムの句境」藤田踏青論・淺沼参三、鑑賞・諸家。「被爆句鑑賞」淺沼参三他。（諸家）。「層雲自由律」への改題と組織変え

なぜだなぜだと問い糾す炎の夜	伊藤完吾
日記の余白が語る　星空への亀裂	中谷みさを
教育はサリンまで作ってしまった	林　和好
ひとくちの空気よりかるくポア	高田弄山
上野の駅でハルピン行きの切符を買おう	中條恵行
きらびやかに核纏わされた地球という星	松原トヨ子
とてもうすっぺらに生きてどじょう鍋	和亭無頼
午後から曇りだした空です鉛の兵隊	浅沼参三
胸に木霊こむらさきの不整脈	〃
洒落た別れもう九月の来る海で	〃

について・伊藤完吾。19号（九月）、この号より誌名を『層雲自由律』と改名。終戦と原爆の句（戦後50年特集）。終戦五〇周年特集2「層雲復刊のころ」浅沼参三。（諸家）。田中倍雄句集『わが流転』鑑賞・近木圭之介他。新刊書案内「風向きの変化」伊藤完吾。20号（十一月）、自由律シリーズ〈風〉の句。〈風〉の句鑑賞・中谷みさを他。テーマ作品特集・近木圭之介他。層雲自由律のこと2・伊藤完吾。書評『生きながら俳句に葬られ』藤田踏青。句集『干柿のたね』感想・新城宏。

○同人動静

七月、田中倍雄句集『わが流転』刊。
八月、松岡一枝句集『干柿のたね』刊。『原爆句抄（和英対訳）』訳・緑川真澄。
九月、青木久生自由律句集『佇彷』刊。
十月、浅沼参三没（61歳）。
十二月、由川うしほ句集『夏帽子』刊。

〈この年〉

阪神・淡路大震災（死者六千人以上）。
東京地下鉄サリン事件。
中国・フランス地下核実験。

暖炉の火こつぜんと消えた句座の空洞　（参三氏追悼）　新城宏

震災まる一年。脱出できない神経形状記憶　小川未加

一月はかなしい百万本の菊　南沢延江

春です　捨てた球根動き出した　木本千鶴子

ウツが芽吹く春風のハードルだ　小池八巧水

女ヲ描クエネルギーハ満月ニアル　近木圭之介

満月の瞬間からボルト一ヶ欠落す　高田弄山

かなしくおかしく人間の天敵はにんげん　松岡一枝

ダンボール男眠らせ、渇いた潮騒　沖星領

基地の拒否　小さな島の大きな成り行き　田中倍雄

○層雲自由律紀要

21号（一月）、年間自選作品（平成七年度）。自由律シリーズ〈空と雲〉（戦前篇）の句と解説。〈空と雲〉の句鑑賞・松原トヨ子他。テーマ作品特集・淺沼参三他。淺沼参三さん追悼特集／病床記1。参三さん追悼文・藤田踏青他。

22号（三月）、自由律シリーズ〈空と雲〉（戦後篇）の句と解説。〈空と雲〉戦後の句鑑賞・平田栄一他。井泉水のゲーテ訳詩（研究）・藤田踏青。青木久生自由律句集抄句と鑑賞・近木圭之介他。淺沼参三さん追悼特集／病床記2。

23号（五月）、自由律シリーズ〈土と石〉いまきいれ尚夫他。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・中谷みさを小玉石水他。淺沼参三さん追悼特集／病床記3。由川うしほ句集「夏帽子」鑑賞・和亭無頼、椿雁他。

24号（七月）、自由律シリーズ〈水〉近木圭之介他。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・久光良一他。小さな郵便局と井泉水・新城宏。

25号（九月）、自由律シリーズ〈火〉

流星の古里　浜辺で死んだ貝など　いまきいれ尚夫

目をあけたドランの月　地下入口の人形　中條恵行

慣れた鍵穴から私の闇が始まる　天野登志子

風に色をつけて見ている夜学生　比田井白雲子

壁にシャガール　朝が飛び立つ　植原宮子

口一文字に紅ひく巨星アンタレスもえた夏　中谷みさを

赤い夕陽は　たそがれ男の安らぎ　中根喜代

子供ら輪になって春の大きさ計っている　青木久生

遺伝子少し狂い指先からはみ出た思考　藤田踏青

時間と空間　成分無調整でいる　新城宏

作品。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・藤田踏青他。エロス句への挑戦・新城宏。エロチシズム俳句。幻の山頭火ドラマ・渥美清さん追悼。編集後記で、現代俳句協会が企画の『現代俳句歳時記』について。26号（十一月）、自由律シリーズ〈音〉作品。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・沖星領、新城宏他。大正期の「層雲」と井泉水・伊藤完吾。同人作品「思い出の夏」松岡布袋。老テク人種のハイテク苦戦記・新城宏。

○同人動静

六月、「層雲」復刻版（不二出版）。創刊号から配本開始。後記で紹介。

九月、由川うしほ句集『夏帽子』（姉妹篇）刊。

〈この年〉

岡本太郎没（84歳・芸術）。

司馬遼太郎没（72歳・小説）。

秋田新幹線、長野新幹線開通。

病原性大腸菌O157患者増加。

遠藤周作没（73歳・小説）。

ペルー日本大使公邸で人質事件。

ちょうがのぼっていったそらのうらがわ　久光良一

完熟トマト半熟タマゴ、半熟少女　新宿へ　由川うしほ

ポケットよりさわがしい心臓をとりだす　高田弄山

別離（わかれ）。のこされたカベの丸文字　小池八巧水

愛に溺れるも一興　死とエロス　松原トヨ子

深いしわだよ　闇が支える夜の鏡　木本千鶴子

杖がこづく地球の音を頼りにあるく　田中倍雄

安全神話　鳥たちをまた騙す　伊藤完吾

夢ファイルに一応貼っておく　黒崎渓水

あの角曲るとわたくしB面暮し　小川未加

○**層雲自由律紀要**

27号（一月）、年間自選作品（平成八年度）。自由律シリーズ〈太陽〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・平田栄一他。テーマ作品・近木圭之介他。

追悼「攝津幸彦・初期句の自由さ」藤田踏青。「遥かなる紫洋を訪う」青木久生。

28号（三月）、自由律シリーズ〈故郷〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・いまきいれ尚夫他。テーマ作品・中谷みさを他。

自由律俳句における無季・小玉石水。新春明句と自句自解・近木圭之介他。

層雲復刻版みどころ。

29号（五月）、作品10句・近木圭之介。作品14句・黒崎渓水。

自由律シリーズ〈海と湖〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・天野登志子他。テーマ作品・南沢延江他。四国遍路句・松岡布袋。

山頭火と碧松・久光良一。書評・仁平勝著「俳句が文学になるとき」藤田踏青。「世界の短詩」緑川真澄。

30号（七月）、自由律シリーズ〈山〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・

アンダンテ・カンタービレ　紅茶にしよう　新城　宏
イノチ詩語吐ク　微量ノ毒吐ク　近木圭之介
夜更け　遺伝子さかのぼる旅へ　いまきいれ尚夫
雨だれの危うい心拍　青木久生
菜の花ほのぼのならんでほの字のいろ　中谷みさを
ひとり　嘆きの舌です　浅沼道子
しずかにうらがえる牡丹のエロス　椿　雁
視姦者であり三流新聞であり扁平足　藤田踏青
いかづちへ耳はみ出してゐる一人　清水八重子
星空の線が読みとれないでいる　田中むつこ

清水八重子他。テーマ作品・三好千峰他。
エッセイ「桜の陰の部分」新城宏。詩人の眼『諷詠十二月』から・藤田踏青。「毛皮をお召しのお客様」孤舟。31号（九月）、自由律シリーズ〈食事〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・西川ふじ子他。テーマ作品・田中倍雄他。
32号（十一月）、自由律シリーズ〈飲料〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・比田井白雲子他。テーマ作品・西川ふじ子他。
作品13句・小川未加。
「楽しい緑川真澄さんの連載漫筆」中根喜代。
阿吽の会例会作品。
遺句抄・田中詩朗。

○同人動静
久光良一『自由律俳人江良碧松』刊。
十一月、関口父草没（96歳）。

〈この年〉
消費税5％。
東京湾アクアライン開通。
住井すえ没（95歳・小説）。
藤沢周平没（69歳・小説）。
永田耕衣没（98歳・俳人）。

列島悪の構図　体の穴みな怒り噴く　近木圭之介
人生、消去したい部分もある　新城宏
歩く姿も年金受給
鮫鰊　吊された大口のいさぎよさ　林和好
神が在る　悲しみを連れておられる　いまきいれ尚夫
突然笑い出したモナリザの八重歯　マオアキラ
この野郎臨界前核実験もすんな　天野登志子
曇天の似合う街の不思議に居つく　中條恵行
池に転げ落ちた月光　複雑骨折　田中むつこ
耐えて　どっと芽ぶく　伊藤完吾
比田井白雲子

○層雲自由律紀要
33号（一月）、年間自選作品（平成九年度）。自由律シリーズ〈短律〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・新城宏他。
層雲復刻版第18巻～20巻のみどころ・編集部。
34号（三月）、自由律シリーズ〈頭・顔〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・山上清子他。
作品「パレット・ナイフ1」近木圭之介。
随想「たかが食道1・和亭無頼（連載）。
一字空白と多行形式（俳論）藤田踏青。
関口父草さん追悼／思い出の一句・小玉石水他。
35号（五月）、自由律シリーズ〈身体・からだ〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・中条恵行他。
神経衰弱～妻失踪（句日記）小池八巧水。
『詩と人生』（書評）黒崎渓水。
『俳壇』（書評）藤田踏青。
「聖堂の中の孤独と自由」（エッセイ）松原トヨ子。
36号（七月）、自由律シリーズ〈手・

ひまわりの高さへゴッホの風のきて　清水八重子

言葉が勝手に丸まっている　黒崎渓水

指先まで吸った煙草が結論である　小池八巧水

何を考えているの大平洋の落日　三好千峰

女　股間にPHS秘め　青木久生

不況の空につり下げるミレー晩鐘　藤田踏青

虹の橋わたればほのぼの生きている　中谷みさを

こおろぎのよるがふきこぼれる　南沢延江

指紋の渦にんげん何をして来たか　松原トヨ子

蝶群れて風のかたちをうら返す　大谷房代

足〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・山上清子他。短詩「パレット・ナイフ2」近木圭之介。わたしの「癌め」3和亭無頼。来信・藤田踏青／返信・編集部。37号（九月）、自由律シリーズ〈生・死〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・久光良一他。エッセイ「鳥と季語」新城宏。木村緑平句抄と年譜。木村緑平さんのこと・編集部。緑平さん作品鑑賞・山上清子。38号（十一月）、自由律シリーズ〈喜怒哀楽〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・いまきいれ尚夫他。短詩「パレット・ナイフ3」近木圭之介。句集『花の群落』鑑賞特集・平田　栄一・小玉石水他。

○同人動静

七月、伊藤雪男句集『花の群落』刊。十月、高橋ちちり句集『沙羅ひらく』田村悌夫著『種田山頭火の妻「咲野」』

〈この年〉

明石大橋開通。

黒澤明没（88歳・映画監督）国民栄誉賞。

詩作行為は五臓の祭典であろう　近木圭之介
傘の骨こんなに折れ易い国でして　中條恵行
目的ナシの初詣ひたすら雑踏です　小川未加
木枯らしの置いていった不渡り手形　伊藤完吾
言ってしまえば壊れてしまうそんな倖せ　植原宮子
日本列島ダイジョウブほどよくヒン曲っている　高田弄山
銀河鉄道に乗り込んでゆく冬帽子　石井康久
空に遠い時間あり　航跡雲になる　久光良一
書いては消す煩悩の文字　年重ねる　中谷みさを
独言（ひとりごと）をいっぱい詰め込みコンテナ船　藤田踏青

○層雲自由律紀要

39号（一月）、年間自選作品（平成十年度）。新春一句集・近木圭之介他。自由律シリーズ〈年末・年始〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・青木久生他。

40号（三月）、自由律シリーズ〈動作〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・山上清子他。「パレット・ナイフ4」近木圭之介。「パレット・ナイフ5」近木圭之介。『海を見ていた放哉』（書評）黒崎渓水。三冊の川柳句集（新刊紹介）伊藤完吾。

41号（五月）、自由律シリーズ〈住居〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・比田井白雲子他。「パレット・ナイフ6」近木圭之介。自由律への提言・沖星領。沖星領さんの文章を読んで・青木久生。長生きの論（随想）和亭無頼。

42号（七月）、自由律シリーズ〈生活〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・清水八重子他。「パレット・ナイフ7」近木圭之介。特別作品・青木久生。「人生に三楽あり」和亭無頼。句集『容顔』新刊紹介・伊藤完吾。同（書評）藤田踏青。

43号（九月）、自由律シリーズ〈車〉

脳内に山姥が棲みだした　藤本経子
幻聴ならいいが、あの靴音遠近法　新城宏
ぼくの肋とジャコメッテイの細い針金　もりたえいいち
コソボの鴉夜啼きする　人間不信のとき　由川うしほ
生まれては見たけれどすべて乱だった　松原トヨ子
街が無口になった　ビルの鳥かご　西川ふじ子
夏よ逝くか　わらわらわらと一日の帳尻　沖星領
野菜不足の日モーツアルト聴く　いまきいれ尚夫
夜汽車がゆく向田邦子が乗っている　野村稲波
流れ星　夢ひとつ叶うまど　大谷房代

の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・藤本経子他。
「パレット・ナイフ8」近木圭之介。
「短詩研究」紹介・藤田踏青。
人生断章4「家族（序章）」秀祥。
44号（十一月）、自由律シリーズ〈旅〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・西川ふじ子他。
「パレット・ナイフ9」近木圭之介。

○同人動静

一月、由川うしほ句集『夏帽子』（続篇）刊。
五月、伊藤　雪男文集『雪道の足あと』刊。

〈この年〉

『現代俳句歳時記』現代俳句協会刊。（初めての太陽歴による作品と無季句掲載）。
三岸節子没（94歳・画家）。
東山魁夷没（90歳・画家）。
東海村核燃料工場で臨界事故。
ジャイアント馬場没（61歳・プロレス）
山岡久乃没（72歳・女優）
石原慎太郎東京都知事に。
江藤淳自殺（66歳・評論）。

不在の午後　それは椅子だが　　近木圭之介

人間が壊れてゆく　思ったより脆いんだ　　青木久生

胸一杯吸い込んだ毒、あるいはコドク　　いまきいれ尚夫

プライベートにはいり込めない秋　　安田阿佐子

過ぎた季節を　秋風にたばねる　　西川ふじ子

おつかれさんと月がでてきた　　南沢延江

行雲流水、長い間鳴らないピアノ　　藤田踏青

よろよろと平和へ倒れ込む　　比田井白雲子

忘れた句に味がつくそんな或る日　　山上清子

戦（いくさ）を知らない子等の飯茶碗　　林隆一郎

○層雲自由律紀要

45号（一月）、年間自選作品（平成十一年度）。「パレット・ナイフ10」近木圭之介。自由律シリーズ〈道〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・沖星領他。

46号（三月）、自由律シリーズ〈文化〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・由川うしほ他。「パレット・ナイフ11」近木圭之介。特別作品・いまきいれ尚夫、比田井白雲子。

この一筋（随想）和亭無頼。

47号（五月）、自由律シリーズ〈学問・宗教〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・久光良一他。「パレット・ナイフ12」近木圭之介。俳句と川柳の接点効果・伊藤完吾（定金冬二作品集『無双』より）。

48号（七月）、自由律シリーズ〈植物〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・中根喜代他。「パレット・ナイフ13」近木圭之介。宇宙的時間感覚（随想）3和亭無頼。

49号（九月）、自由律シリーズ〈動物〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・中谷みさを他。「パレット・ナイフ14」近木圭之介。

心に山河なくガム噛んでいる　林　和好
告知　這い上ってくる潮位　中條恵行
寒風　落した過去をさがしに戻る　植原宮子
なんでもありの世に哲学の貧困　新城　宏
思考回路ショートして春の雷　野間元祐
マグマが押し出す「柔らかいナショナリズム」だ　伊藤完吾
ヒヤシンス球根のまま　恋愛依存症です　浅沼道子
向き合って椅子がある　座らない椅子だ　もりたえいいち
亡友死んだふり　オレ生きてるふり　いまきいれ尚夫
蚊が寄ってくる　写楽の寄り目　中根喜代

じっちゃんばあちゃん（随想）4和亭無頼。
50号（十一月）、自由律シリーズ〈スポーツ〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・もりたえいいち他。「パレット・ナイフ15」近木圭之介。同人作品、小川未加。人生第三部（随想）5和亭無頼。

○同人動静

二月、『体験的新興俳句史』古川克己著。
五月、佐々木露路句集刊。
緑川真澄著『李白と杜甫』刊。
六月、古川克己没（87歳・俳句ポエム）。
十月、桟比呂子著『山じいさんと黎々火』刊。
十一月、『層雲自由律二〇〇〇年句集』刊。
十二月、「白い道―山頭火の妻」上演。

〈この年〉

丸木俊没（87歳・画家）。
古沢太穂没（86歳・俳人）。
小倉遊亀没（105歳・画家）。
滝沢修没（93歳・俳優）。
ミヤコ蝶々没（80歳・女優）。
三宅島噴火島民避難。
瀬戸青天城没（85歳・俳人）。
白川英樹ノーベル化学賞受賞。

新世紀　音でないおと私を通過　近木圭之介
混迷の木が霧に浮かべた月のかお　中谷みさを
究極の白は　四角い布である　もりたえいいち
石榴割れて女の部屋のサスペンス　清水八重子
遠い記憶がもつれた糸ほどいていく　植原宮子
それぞれの夢のほう向いて子らの靴　久光良一
捨てるつもりのストレス背負うて戻る　木本千鶴子
沈黙の長さへ枯れてゆく刻よ　野村稲波
無防備な女がしたたるティーバッグ　藤田踏青
少年風を行く川が蛇行しはじめる　林隆一郎

○層雲自由律紀要

51号（一月）、年間自選作品（平成十二年度）。「パレット・ナイフ16」近木圭之介。心に残る２０００年の一句・中条恵行他。現代川柳研究特集１・精鋭作品抄。現代川柳作品を読んで・荻原裕幸他。自由律２０００年句集特集１・注目作品集。句集鑑賞・もりたえいいち他。お笑い下され１・小玉石水。

52号（三月）、「パレット・ナイフ17」近木圭之介。平田栄一作品「日々の祈り」。自由律２０００年特集２・注目作品。句集鑑賞・西川ふじ子他。句集解説・伊藤完吾。むかし肥沃だったはずだが（随想）新城宏。お笑い下され２・小玉石水。心に残る一句・黒崎渓水。

53号（五月）、「パレット・ナイフ18」近木圭之介。自由律シリーズ〈星〉の句。作品解説・伊藤完吾、鑑賞・中谷みさを他。追悼田中倍雄作品集、追悼文・近木圭之介他。自由律のアイデンティティ・新城宏。

54号（七月）、「パレット・ナイフ19」近木圭之介。

伐るなら伐れ枯木見えを切っている　前田和子
悲しみとおり越して美味しい関係　淺沼道子
そのあとの言葉を埋めたような不機嫌　黒崎渓水
健康診断　息止めてみせる胸の内　野間元祐
水の中へさす早苗のたしかな手ごたえ　南沢延江
残照の中を持ち歩く等身大の言い訳　いまきいれ尚夫
砂漠に水まくおとこの晩鐘　新城宏
弾と砕けて魂などないさ　中條恵行
金属疲労の音がする　ヒマワリ　藤本経子
地平線の重さ背負って母戻って来る　小池八巧水

自由律シリーズ〈外来語〉の句。作品解説・伊藤完吾。作品鑑賞・緑川真澄他。

55号（九月）、「パレット・ナイフ20」近木圭之介。自由律シリーズ〈地名・人名〉の句。作品解説・伊藤完吾。作品鑑賞・山上清子他。コラム・時間軸。

56号（十一月）、「パレット・ナイフ21」近木圭之介。自由律シリーズ〈情報・通信〉の句。作品解説・伊藤完吾。作品鑑賞・木本千鶴子他。小池八巧水句集『未成年』鑑賞・新城宏。

○同人動静

三月、田中倍雄没（5日、87歳）。

十月、江良碧松句碑建立。

十二月、新城宏『一風変った自由律の鑑賞』刊。松岡一枝『先生のおっぱい』刊。久光良一、第22回山頭火賞。

〈この年〉

『放哉全集』句集（筑摩書房）刊。野村登四郎没（90歳・俳人）。大阪の池田市で小学生刺殺事件。ニューヨークで同時多発テロ。米英によるアフガン攻撃始まる。

あとがき

伊藤　完吾

明治末期に起きた河東碧梧桐の新傾向俳句運動を、更に進展させたのが、荻原井泉水の「層雲」であり、中塚一碧楼の「試作」でしたから、両者が創刊された明治四十四年を、一応自由律俳句の発生の年と考えてもよいでしょう。ただこの時期にはまだ自由律俳句という呼称はなかったわけですが、当時の作品をご覧になって、皆さんそれぞれが自由律俳句への作風の変遷を確かめられるのもよろしいかと思います。

なお自由律俳句の系譜について簡単に触れてみますと、井泉水と一碧楼の独自な自由律俳句への展開の他に、戦後になって、俳句を口語で書こうという運動から立ち上がった市川一男・内田南草・吉岡禅寺洞らによって推進された口語自由律俳句の流れがあります。

ただ、定型俳句の世界でもそうですが、自由律俳句の分野でも、創立者によって確立された作風が、主宰の交代などのために、次第に結社独自の作風が見えにくくなっているように思われます。その原因として考えられるのは、時代の変革による作品の価値観の違いが急速に広がっていったということでしょう。

さて、私どもの『層雲自由律90年作品史』の作品選考に当っては、時代を二つに分けて考えてみることにしました。最初は明治四十四年の創立から、昭和四十六年三月までのほぼ60年の期間。そしてそれ以後の30年間です。

最初の60年間は、井泉水が「層雲」誌掲載の作品から更に厳選し監修された『層雲句集』40

巻に当る期間です。井泉水ご自身この句集の作品選考には心血を注いだと書いておられる通り、句集の隅々まで細かい神経を使っておられることが分ります。巻末に掲げた「層雲句集収録表」をご覧いただければ、それぞれの期間における作家の活動状況が一目瞭然ですし、また時代の経過の中でその作家が果たした役割も知ることが出来ます。ただこの『層雲句集』は作家別作品の掲載であったため、今回の一年毎の作品抄出はかなり難渋しました。というのは、『層雲句集』の作品掲載年月と、暦の年月にずれがあること、また作品の実作年と層雲誌上の掲載年月も多少ずれがあったりしますので、作家の作句年と、この著の年間作品とは必ずしも一致しないといった経緯をご了承ください。

そのため、年間作品の下段にその年の「層雲紀要」や「同人の動静」「この年」の社会の動きなども書き込み、出来るだけ関連を持った作品を挙げたつもりです。

昭和四十六年四月以降の作品は、井泉水ご自身も体力の限界を感じられたのか、作家各自の自選句を集めた『層雲一人十句集』の刊行に切り替えられました。そこで井泉水没後を含め、改めて「層雲」誌を調査した上、主要同人の評価なども加え、編集部の判断で年間作品を抄出しました。その基準としては、①時代の動きが分る句、②新しい志向が感じられる句、③一般にも影響を及ぼす作品、ということで、単に自由律俳句といった意識に捕らわれない作品の枠を広げようと言う意図のもとに、後半30年間の作品を選んでみました。終わりにこの編集に協力くださった今給黎尚夫氏に厚くお礼を申上げます。

平成十六年十一月

層雲句集に収録された作家の句数　（１巻～１０巻）

順位	氏名	総句数	1巻 明44～大3	2巻 大3～6	3巻 大6～8	4巻 大8～10	5巻 大10～12	6巻 大12～14	7巻 大14～昭2	8巻 昭2～4	9巻 昭4～6	10巻 昭6～8
1	大橋裸木	396	—	—	—	—	15	60	105	51	60	105
2	芹田鳳車	286	9	67	67	58	24	3	12	24	8	14
3	青木此君楼	285	—	15	67	51	42	15	24	24	23	24
4	木村緑平	246	—	5	14	42	33	21	24	50	24	33
5	内島北朗	238	—	6	19	27	24	12	42	33	33	42
6	小沢武二	227	12	31	41	19	15	15	24	42	14	14
7	和田光利	221	—	—	—	—	—	26	42	42	51	60
8	秋山秋紅蓼	190	—	—	9	10	9	12	33	24	24	69
9	大越吾亦紅	184	—	—	—	17	33	9	—	60	32	33
10	尾崎放哉	175	—	5	5	—	4	96	65	—	—	—
11	鈴村日梢	171	—	14	46	50	24	22	6	2	6	1
12	久保白船	169	3	38	42	27	4	8	11	12	9	15
13	内藤寸栗子	158	—	—	14	41	24	11	15	24	14	15
14	栗林一石路	157	3	11	42	2	3	30	42	24	—	—
15	阡陌余史郎	145	—	23	13	32	3	6	33	24	6	5
16	野村朱鱗洞	133	60	32	41	—	—	—	—	—	—	—
17	浜口弥十郎	129	—	—	1	—	—	11	60	33	24	—
18	佐々木石々	121	—	12	15	19	10	15	8	21	15	6
19	七戸黙徒	120	—	—	—	58	33	—	—	—	20	9
20	酒井仙酔楼	119	—	28	18	2	7	1	3	4	33	23
21	小林銀汀	118	—	—	23	28	10	10	15	24	6	2
22	河本緑石	117	—	4	27	4	8	6	15	24	14	15
23	藤沢青銭子	108	—	—	—	—	—	—	—	15	51	42
24	種田山頭火	105	1	28	15	3	—	—	2	6	24	26
25	山本蒼天	104	—	6	23	15	15	15	11	11	6	2
26	金井三郎	98	—	—	22	11	10	10	15	6	9	15
27	井上一二	98	—	13	19	23	19	14	6	1	3	—
28	近藤益雄	94	—	—	—	—	—	—	6	33	23	32
29	河村花不言	93	3	3	12	20	15	4	18	16	3	10
30	小松崎翔陽	89	—	—	5	19	14	15	12	6	14	4
31	江良碧松	83	10	33	24	4	2	10	—	—	—	—
32	伊藤雪男	82	—	—	—	—	2	4	15	14	32	15

注）上記以外の主な作家は下記の通りです。
海藤　抱壷（80）、善方　牛臥城（79）、高橋　良太郎（73）、関口　父草（68）
岡　栄一（65）、木戸　夢郎（59）、山本　木天蓼（53）、吉澤　稲市（50）
佐藤　露江（53）、藻谷　草土子（53）、松尾　あつゆき（37）

層雲句集に収録された作家の句数　（１１巻～２０巻）

順位	氏名	総句数	11巻 昭8～9	12巻 昭9～10	13巻 昭10～11	14巻 昭11～12	15巻 昭12～13	16巻 昭13～14	17巻 昭14～15	18巻 昭15～16	19巻 昭16～17	20巻 昭17～18
1	大越吾亦紅	430	42	36	56	46	37	37	27	47	55	47
2	池原魚眠洞	268	24	27	21	26	17	27	15	37	37	37
3	秋山秋紅蓼	230	41	27	26	26	12	11	6	31	26	24
4	藤崎麦村	213	4	13	21	27	17	17	15	27	35	37
5	池田詩外楼	207	19	17	8	22	17	26	17	37	17	27
6	芹田鳳車	202	19	9	—	37	27	27	17	37	17	12
7	近木圭之介	196	15	17	9	17	4	7	17	17	46	47
8	和田光利	192	32	36	27	16	17	16	9	17	11	11
9	内島北朗	191	15	17	15	13	17	17	26	27	27	17
10	松尾あつゆき	166	19	15	13	12	9	9	11	16	26	36
11	堀栄之助	149	12	6	9	—	—	5	26	47	27	17
12	飯尾青城子	143	8	17	13	17	7	15	16	7	17	26
13	小沢武二	141	40	17	17	27	17	12	4	7	—	—
14	伊東俊二	139	4	10	5	—	6	2	12	37	26	37
15	牧山牧句人	138	24	16	16	22	17	2	9	16	9	7
16	窪田耕児	125	6	6	10	17	12	7	12	12	26	17
17	井上阿弥坊	124	11	12	17	26	9	7	4	17	12	9
18	久保白船	123	9	15	16	10	7	15	12	32	7	—
19	鈴木折嶺	109	15	11	3	3	3	12	6	12	17	27
20	渡辺砂吐流	102	1	10	6	7	6	17	11	27	5	12
20	井上充夫	102	—	—	2	7	7	17	12	17	23	17
20	酒井仙酔楼	102	15	12	17	7	7	7	12	12	6	7
23	田中井夢	95	3	2	1	6	1	17	9	17	12	27
24	伊藤雪男	94	7	17	9	7	3	9	16	16	7	3
25	財馬呵歩	93	6	7	10	19	9	4	9	17	4	17
25	重村雪人	93	5	11	16	7	17	17	5	7	2	6
27	関口父草	91	24	13	8	4	1	12	7	9	10	3
27	種田山頭火	91	20	14	5	21	11	12	4	4	—	—
29	木村緑平	90	15	12	10	4	6	8	6	12	10	7
29	青木此君楼	90	9	12	21	17	6	—	1	—	17	7

層雲句集に収録された作家の句数　（２１巻～３０巻）

順位	氏名	総句数	21巻 昭18～19	22巻 昭19～21	23巻 昭21～22	24巻 昭22～23	25巻 昭23～24	26巻 昭24～25	27巻 昭25～26	28巻 昭26～27	29巻 昭28～29	30巻 昭29～30
1	池原魚眠洞	360	37	37	27	37	37	37	37	47	37	27
2	大越吾亦紅	289	37	27	26	37	37	37	37	17	27	7
3	秋山秋紅蓼	189	16	12	17	12	17	27	17	27	27	17
4	平松星童	155	27	35	17	47	27	2	—	—	—	—
5	舟木月々虹	152	—	—	3	27	27	27	12	27	17	12
6	芹田鳳車	149	14	1	2	12	27	27	12	10	27	17
7	吉澤稲市	145	—	—	6	17	17	27	27	17	17	17
8	内島北朗	132	17	22	4	7	17	7	12	12	17	17
9	日向野秀策	121	3	6	1	7	6	17	17	17	22	27
10	松尾あつゆき	119	47	4	12	17	2	7	6	17	7	—
11	近木圭之介	115	23	8	10	17	17	17	4	10	2	7
12	福永夏木	112	1	—	—	7	17	27	17	17	22	4
13	堀滴々亭	110	5	8	12	17	7	17	17	17	10	—
14	木戸夢郎	106	2	7	5	7	10	17	12	12	17	17
15	池田詩外楼	103	11	16	7	17	12	15	12	12	4	7
16	小谷信夫	101	—	3	7	17	12	17	10	12	12	11
17	藤野番紅花	99	—	—	—	17	12	17	7	12	22	12
18	三好草一	95	—	13	7	17	12	26	7	4	7	2
19	高橋良太郎	93	16	17	6	4	1	1	2	12	17	17
20	伊東俊二	84	27	26	26	4	—	—	1	—	—	—
21	田中井夢	82	27	21	7	10	7	1	7	2	—	—
22	財馬呵歩	81	12	9	7	12	17	10	7	4	1	2
23	佐々木石々	80	6	5	4	2	—	3	6	10	27	17
24	木村緑平	78	9	10	7	7	12	17	7	4	1	4
25	山本木天蓼	77	2	8	17	7	11	10	2	7	3	10
26	岡崎城雨郎	75	—	—	—	—	—	2	17	17	27	12
	佐藤康治	75	16	10	—	—	1	—	2	7	12	27
28	束松八洲雄	68	1	9	3	7	17	7	7	7	3	7
	瀧山重三	68	13	16	7	27	5	—	—	—	—	—
30	吉田六郎	66	—	—	—	17	17	17	2	1	—	12

層雲句集に収録された作家の句数　（３１巻～４０巻）

順位	氏名	総句数	31巻 昭29～30	32巻 昭30～31	33巻 昭31～32	34巻 昭32～34	35巻 昭34～36	36巻 昭36～38	37巻 昭38～40	38巻 昭40～42	39巻 昭42～44	40巻 昭44～46
1	日向野秀策	434	22	26	47	57	67	47	47	47	37	37
2	池原魚眠洞	260	27	27	37	37	37	30	27	27	11	—
3	内島北朗	227	17	16	12	32	27	27	27	35	17	17
4	山本木天蓼	226	7	7	12	27	32	44	27	39	14	17
5	大越吾亦紅	211	12	22	22	47	47	17	37	7	—	—
6	秋山秋紅蓼	206	17	17	17	37	27	27	27	37	—	—
7	高橋良太郎	195	17	7	12	37	17	27	22	27	22	7
8	佐藤康治	192	22	22	27	22	22	17	27	17	10	6
9	佐々木石々	184	22	22	27	22	32	17	22	14	6	—
10	木戸夢郎	177	17	16	12	32	27	27	22	7	10	7
11	三好草一	149	—	4	3	17	22	17	17	22	27	17
12	山本秋光	138	17	7	12	27	11	7	17	17	11	12
	善方牛臥城	138	—	4	6	27	37	27	6	17	7	9
14	家木松郎	129	17	12	12	37	32	17	2	—	—	—
15	浄心寺良淳	124	12	7	12	12	17	22	11	7	17	7
16	矢内樹一	122	12	4	7	7	22	27	7	17	7	12
17	松田一男	121	7	7	7	17	27	12	22	7	3	12
18	岡田城雨	108	4	7	2	7	32	27	17	7	3	2
19	関口父草	106	12	3	2	17	7	12	12	7	17	17
20	松尾あつゆき	101	—	—	—	—	—	—	—	47	27	27
21	岡栄一	98	12	22	17	6	22	12	7	—	—	—
22	伊藤雪男	97	7	1	6	7	17	17	7	13	10	12
23	井手逸朗	93	—	7	6	17	10	12	17	7	10	7
24	小島元四郎	91	22	7	—	7	17	12	7	7	11	1
25	牧山牧句人	89	—	—	12	17	22	16	22	—	—	—
26	渡辺砂吐流	88	—	—	—	—	—	—	27	22	22	17
	南川鴻亮	88	6	7	7	17	10	17	12	3	3	6
28	遠藤虹水	87	4	—	—	6	12	22	12	17	7	7
	木村緑平	87	7	7	6	7	17	12	7	17	7	—
30	江良碧松	86	6	7	4	7	12	10	7	17	7	9
31	近木圭之介	82	17	12	6	6	7	3	17	11	3	—

層雲句集に収録された作家の総句数　（1巻～40巻）

順位	氏名	巻数				合計句数
		1～10	11～20	21～30	31～40	
1	大越吾亦紅	184	430	289	211	1114
2	池原魚眠洞	36	268	360	260	924
3	秋山秋紅蓼	190	230	189	206	815
4	内島北朗	238	191	132	227	788
5	芹田鳳車	286	202	149	14	651
6	日向野秀策	—	15	121	434	570
7	木村緑平	246	90	78	87	501
8	和田光利	221	192	17	39	469
9	大橋裸木	396	33	—	—	429
10	高橋良太郎	73	66	93	195	427
11	松尾あつゆき	35	166	119	101	421
12	青木此君楼	285	90	17	27	419
13	小沢武二	227	141	16	23	407
14	山本木天蓼	53	42	77	226	398
15	近木圭之介	—	196	115	82	393
16	佐々木石々	121	3	80	184	388
17	池田詩外楼	16	207	103	56	382
18	木戸夢郎	59	—	106	177	342
19	関口父草	68	91	60	106	325
20	酒井仙酔楼	119	102	46	50	317
21	伊藤雪男	82	94	22	97	295
22	久保白船	169	123	—	—	292
23	吉澤稲市	50	81	145	14	290
24	佐藤康治	6	16	75	192	289
25	藤澤せい二	108	75	62	33	278
26	三好草一	—	27	95	149	271
	金井三良	98	68	32	73	271
28	牧山牧句人	28	138	15	89	270
29	堀栄之助	—	149	110	6	265
30	井手逸朗	51	59	52	93	255

（参考）：小林　銀汀（253）、浄心寺　良淳（251）、財馬　呵歩（244）
渡辺　砂吐流（240）

層雲史を創った人々

荻原　井泉水

尾崎　放哉

芹田　鳳車

種田　山頭火

大橋　裸木

河本　緑石

野村　朱鱗洞

内島　北朗

佐々木　石々

伊藤　雪男

小澤　武二

層雲自由律９０年作品史

2004年11月30日印刷
2004年12月20日発行
定価3,000円（本体＋税）

編　集　伊藤　完吾
発　行　伊藤　完吾
発行所　層雲自由律の会
〒248-0012　鎌倉市御成町17-5
電話(FAX)　0467-22-4362
印刷所　有限会社第一出版

ISBN4-915434-26-5　C-1092　¥3000E